

牧羊者

教師の方々へ

二〇〇三年度の最終巻をお届けできることを感謝します。今回は「冬号」と言えましょうか。1冊1冊は薄いものですが、4冊まとめるとかなりの厚さになります。来年度はどのような形で発行するのが良いか、現場の先生方のご意見を伺いたいと思っています。各教区の教会学校局員の先生や、それぞれの教会の牧師に、ぜひお伝えください。

「教師養成講座」も最終回を迎えました。いかがでしたでしょうか。初代の教会学校局長としての熱い思いを感じたのは、決して私だけではないと思います。この熱意、この使命感をしっかりと受け継ぎ、次の世代にバトンタッチすべきだと教えられました。教会学校教師は、子どもたちに対する愛と熱情がなければ、長く続けることはできません。常に心に火を燃やし続けましょう。

今年度は、「教師の方々へ」というこの欄で、本誌の実際的な使い方を説明しています。本誌を初めて用いてくださる方々は、特に注意深くお読みください。

本誌は、毎週続けて教会学校に来る子どもたちを主な対象にしています。12月には主イエスの誕生後の出来事を見ましたが、今号ではそれに続いて、主にお会いした人々を2月中旬まで取り上げます。その後6週間に渡って、主がご自分のこ

とを何とおっしゃっているかを学びます。詳しくは、4〜5頁を参照してください。また、今号の巻末には、新年最初の日曜日のために、特別教案を用意しました。新年からカリキュラムにそって学ぶことが難しい教会では、これを用いてくださって結構です。ちょっと手を加えれば、年末感謝礼拝に用いることができるかもしれません。

4頁構成の各週教案の最初2頁は教師の学びのために用意しました。これは成人科でも用いていただけます。

次の頁で、子どもたちに話すメッセージの例が書かれています。現場での生徒の学年や理解度に応じて、適切に取捨選択してください。幼い子どもたちには、付録のフラッシュ・カードを紙芝居のよう

に用いると話しやすいでしょう。最後のページは、分級の時に用いるワークブックの説明です。ワークブックはA・B・C・Dの4種類があります。学年と理解度によって、最適のものを用いてください。生徒の数だけコピーしてくださってもかまいません。

ワークブックAは未就学児専用です。その週の内容にそって、切ったり、貼ったり、塗ったりします。クラスに、はさみ・のり・クレヨンなどを常備しておいてください。教師は、少なくとも前日に

はワークに目をおして、用意すべきものをチェックしておいてください。分級の時には、子どもたちと一緒に作業しながら、その日の目標が理解できるように話してください。

ワークブックBは1〜2年生用です。子どもたちが自分で考えて書き込めるまで、忍耐して待ちましょう。本誌には、毎週、その日の内容にふさわしい子ども用賛美歌が記されていますので、参考になさってください。これらの曲を吹き込んだテープがあります。必要な方は発行所まで申し込んでください。

ワークブックCは3〜4年生用です。最初に中心聖句を確認して、テーマをとらえます。いつも適用質問が用意されていますので、一人一人に考えさせ、決断を促してください。できたかどうかを次の週に反省することも大切です。

ワークブックDは、5〜6年生から中高生まで用いられるように準備されています。これも適用を重視しています。聖書の内容については、「中高校へのヒント」で補ってください。

中高校のヒントは、問答形式で内容を考えさせます。できれば自由にディスカッションできる時間を設けてくださればと思います。これらの質問を全部する必要はまったくありません。

目次

教師養成講座 「主に喜ばれる教会学校」(第4回)	2
年間カリキュラム	4
1月教案	6
2月教案	22
3月教案	42
新年礼拝特別教案	58
編集後記	58

1月

2月

3月

教師養成講座

主に喜ばれる教会学校(第4回)

長島幸雄

長島幸雄師は教会学校局の初代局長で、『牧羊者』の名付け親です。以下の講座は、『牧羊者』一九八七年4月号から9月号まで、6ヵ月にわたって連載されました。現在でも傾聴に値する重要な内容です。

聖霊の働きには二つの面があると思います。

一つは、私たちに信仰を与えて救わせ、私たちの心を新しく生まれ変わらせ、私たちをきよめ、私たちの内に内住し、心を満たして下さるという救いと成長に導く働きです。

それともう一つが、奉仕の動力、また、あらゆる行動の動力となる御霊の賜物を与えて下さるという働きです。

さて、奉仕の動力として、第一に、教師にほしものが「力」であります。第二が、御霊の賜物です。第三は「祈り」です。その御霊の賜物を得る方法は「祈り」以外にないのでから。

祈りによって、自分の内に、聖霊は働いてくるしました、相手の内にも聖霊は働いてくるのです。

ですから、私たちは祈らなければなりません。祈らないと聖霊は働かない。助けが必要だと思ったら、祈らなければならないのです。

「彼らはみな、婦人たち、特にイエスの母マリ

ヤ、およびイエスの兄弟たちと共に、心を合わせて、ひたすら祈をしていた。そのころ、120名ばかりの人々が、一団となって集まっていたが、ペテロはこれらの兄弟たちの中に立つて言った(使徒行伝1・14、15)。この人たちが、集団を作ったというこの目的は何であったかといえますと、5節の「すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」、すなわち、聖霊のバプテスマを授けられて、御霊の賜物にあずかるために祈っていたのであります。そして、その祈りの応答として「五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起ってきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりひとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの

他国の言葉で語り出した」(使徒行伝2・1～4)。これが、聖霊がそがれるということです。祈っていると、聖霊がそがれるのです。ですから、皆さんも、自分の受け持ちのクラスの生徒の名簿を開いて、一生懸命に祈ってみて下さい。

皆さんは、とことん追いつめられた経験があるでしょうか？ 私は献身する前、自分が教会学校を受け持っていた時、生徒が一人も来なくなつて、分級の時間に自分のクラスに一人も生徒がいなくて、という経験をすることがあります。

その時、自分が受け持ったことは失敗だったんではないか、「他の人にやらせればよかったと周りの人から言われているんじゃないか、というような恥ずかしい思いになったことがあるのです。私は、自分の心の内をさらけ出して祈りました。「神様、私は専門家の伝道師でもなんでもないし、『なれ』と言われるから教師になつたけれど、生徒が全然来なくなつてしまいました。神様から預かっている魂だと言われるけれども、神様、素人の私が、こんなふうにつ追いつめられているんです。このままだったら神様の栄光に傷がつきますから、どうぞ一つ助けて下さい」と、くやし涙と情けなさで、どうしたらよいかわからないところまで追いつめられて、お祈りしたのです。

見捨てられたような、敗北感を感じて祈った祈りでしたが、このお祈りによって、その時、御霊の力が与えられたのです。このどん底の経験をを通して、人間の力ではない、自分をはるかに超えた御霊の力、御霊の賜物が、与えられたのです。そ

の祈りのあと、少しずつ子どもたちは来始めました。

人を集める、ということは、人の力ではない、御霊の力なのだ、自分に御霊の賜物を与えて下さって、人を集めさせて下さるのだ、ということがわかったのです。

祈っていると、自分のうちに、聖霊が働かれるし、子どもたちにも働かれる。そして、不思議に心が結ばれてくる。ですから、ある一つの時点に來ると「おいで」と言わなくても、子どもたちがドンドン集まってくる、集めることに苦労がいらないほどに、垣を乗り越えることができるのです。

さて、祈っていると、聖霊に満たされた、ということがわかるようになりますが、それには、次の三つのことがあります。

① み言葉が開かれて、確信がわいてくる。

② 勝利感が与えられる。

③ 心に平安と喜びが溢れて讃美が出てくる。

土曜の夜などは、受け持ちの生徒の名簿を前にして、ひとりひとりの名を挙げて、祈りこんで下さい。

祈りも、例えば、「子どもが少ないんです。どうぞよろしく願います」だけで終わっていたのではダメで、勝利が与えられるまで祈る、これを「祈りがやぶれる」というのですが、「神様、これでいいんですか？ こんな状態でもって、あなたの大事な子どもの魂を私に預けて、あなたが損をするのではないですか？ なんとかして下さい」と問い詰め、神様の前に迫っていくのです。そ

すると、祈りの最中は、泣き言や敗北感があるが、祈りぬけると勝利感がくるのです。祈りの中で勝ったノというまで祈りぬかないといけない。そこまで祈る必要があるのです。これが、御霊の賜物が与えられてくることの一つの秘訣です。

靈的な問題には、祈る人は強い。祈った人は必ず勝利する、祈らない人は負ける。なんといっても、祈って勝利を得ている人、祈りぬいている人は、顔に、目に出ていて、内から喜びがあふれ出てきています。

さて、次に大切なことは、教師の日常生活での訓練です。日頃の生活の中で、教師自身が祈って勝利をする、ということが必要なのです。そういう生活での積み重ねが、そのまま子どもたちへの証しとなっていくわけですから、責任重大です。

だから、教師は自分の信仰生活の中で自分自身を訓練して、敗北の連続ではなくて、困難は次から次へと来るのだから、祈って勝ったという、どんな出来事でも負けて終わったことは何一つない、祈って全部勝利した、という記録の連続でなければならぬのです。

「祈って勝利。そして勝利の連続」。困難がいくらか起こってもそれが問題ではない。ぶつかった困難から逃げ出さないで、一つ一つ勝利を収めていくという、教師自身、訓練することが大切です。

そして、次に、万事、好都合の時に祈って、み言葉を与えられて行動するということが大切なことなのです。困難な時に、だんだんと訓練が身についてくると、困難を乗り越えられるようになります。

ます。しかし、案外、好都合の時と言うのは祈らないもので、また、祈らなくても何でもできるのです。例えば、字を書くのを得意としている場合に、「字を書いてくれ」と頼まれて書く。すらすらと思うように書ける。しかし、どんなに上手であっても、まず、書く前に「主よ、どうか御霊の賜物によって力を与えたまえ」と祈る。これが大切なのです。一困難な時も、また、困難でない時にも、万事祈って事を成す。一これが生活訓練です。そして、教師自身から自然に出てくるもの、それが子どもたちの信仰生活に及んでくるのであります。

では、まとめましょう。

私たちが、人を集める力、人に感化を及ぼす力、あるいはメッセージに子どもたちの聞き耳を立てさせていく力、子どもを信仰に導いていくこの力の、そういう力というのは、聖霊の力です。御霊の賜物です。その賜物、力はどうすれば得られるかという、それは、祈りです。祈る者には聖霊の力が与えられてくる。ですから、万事祈ること。祈るのも、自分自身の生活の中で起こってくる困難に対して逃げないで、祈りぬいて勝利を収め、また、平和な、好都合の時に祈って事を成していくこと。

これらのことが、日々、御霊の力が加えられていく秘訣であるということをお話して、終わりたいと思います。

第一期 神の救いの計画

●受難節		テーマ		聖書		中心聖句	
4月6日	進級式	ゲッセマネの祈り	マルコ14:32～42	同上	同上	14:36	
13日	十字架上の叫び	復活の主の働き	使徒1:3～11	同上	同上	15:34	
20日						1:8	

●王国時代から捕囚・帰還まで		テーマ		聖書		中心聖句	
4月27日	サムエル(祝福の継承)	サムエル1:1～15章	同上	同上	同上	3:9	
5月4日	ダビデの選び	サムエル16:1～13	同上	同上	同上	16:7	
11日	母の日	サムエル17:1～58	同上	同上	同上	17:37	
18日	王に手を下さないダビデ	サムエル24:1～22	同上	同上	同上	24:6	
25日	ダビデの失敗	サムエル11:1～12:14	同上	同上	同上	12:9	
6月1日	ソロモンの盛衰	列王上3:1～11章	同上	同上	同上	3:14	
8日	ベニミン	列王上17:1～24	同上	同上	同上	17:1	
15日	エリヤの働き	列王上18:1～19章	同上	同上	同上	18:21	
22日	ナアマン將軍	列王下5:1～19	同上	同上	同上	5:14	
29日	バビロン捕囚	エレミヤ29:1～14	同上	同上	同上	29:11	
7月6日	偶像からの脱出	ダニエル1:1～21	同上	同上	同上	1:8	
13日	迫害からの脱出	ダニエル3:1～30	同上	同上	同上	3:18	
20日	陰謀からの脱出	ダニエル6:1～28	同上	同上	同上	6:23	
27日	捕囚からの帰還	エズラ1:1～10章	同上	同上	同上	1:1	

恵みふかい神

中心聖句・詩篇34:8

主の恵みふかきことを
味わい知れ。
主に寄り頼む人は
さいわいである。



第二期 神の前に立つ備え

●神の目で見た善悪		テーマ		聖書		中心聖句	
8月3日	地の塩・世の光	殺してはならない	マタイ5:10～16	同上	同上	5:13, 14	
10日	姦淫してはならない	誓ってはならない	マタイ5:27～30	同上	同上	5:22	
17日	目には目を	人の前での善行	マタイ5:38～48	同上	同上	5:34	
24日	神の国と神の義	さばいてはならない	マタイ6:1～4	同上	同上	6:1	
31日	求めなさい		マタイ7:7～12	同上	同上	7:7	
9月7日	振起日						
14日							
21日							
28日							

●神の国の価値観		テーマ		聖書		中心聖句	
10月5日	木は実でわかる	岩の上の家	マタイ7:13～23	同上	同上	7:17	
12日	人を恐れるな	邪悪で不義な時代	マタイ10:24～33	同上	同上	10:24	
19日	種まきのたとえ	毒麦のたとえ	マタイ13:1～23	同上	同上	13:23	
26日	からし種のたとえ	心を含ませて祈る	マタイ18:15～20	同上	同上	18:19	
9日							
16日							
23日							

第三期 主イエスとの関係

●降誕節		テーマ		聖書		中心聖句	
11月30日	アドベント	肉体となった言	ヨハネ1:1～5	同上	同上	1:14	
12月7日	マコトの光	ザカリヤの賛歌	ヨハネ1:9～13	同上	同上	1:9	
14日	クリスマス	シメオンとアンナ	ルカ2:21～38	同上	同上	2:31, 32	
21日							
12月28日	年末感謝	主のめぐみの年	ルカ4:16～30	同上	同上	4:19	
1月4日	新年	ローマの百卒長	ルカ7:1～10	同上	同上	7:7	
11日		パリサイ人シモン	ルカ7:36～50	同上	同上	7:47	
18日		マルタとマリヤ	ルカ10:38～42	同上	同上	10:42	
25日		10人の病人	ルカ17:11～19	同上	同上	17:18	
2月1日		ザアカイ	ルカ19:1～10	同上	同上	19:10	
8日		十字架上の強盗	ルカ23:39～43	同上	同上	23:43	

●わたしは～である		テーマ		聖書		中心聖句	
2月15日	いのちのパン	ヨハネ6:22～40	同上	同上	同上	6:35	
22日	門・羊飼	ヨハネ10:1～18	同上	同上	同上	10:11	
29日	よみがえり・命	ヨハネ11:1～44	同上	同上	同上	11:25	
3月7日	世の光	ヨハネ12:44～50	同上	同上	同上	12:46	
14日	道・真理・命	ヨハネ14:1～6	同上	同上	同上	14:6	
21日	まことのぶどうの木	ヨハネ15:1～11	同上	同上	同上	15:5	

●受難節		テーマ		聖書		中心聖句	
3月28日	救い主の入城	ヨハネ12:12～19	同上	同上	同上	12:13	
4月4日	最高の愛	ルカ23:32～38	同上	同上	同上	23:34	
11日	救い主の復活	ルカ24:1～12	同上	同上	同上	24:6	

聖書 ルカ7・1～10
テーマ ローマの百卒長

序論

「主に出会った人」で最初に学ぶのは、ローマ軍(あるいは当時のガリラヤ地方の支配者ヘロデ・アンティパスの軍)に属していたと思われる「百卒長」である。6節や9節から、彼は異邦人だったと推測できる。カペナウムには収税所があったので(5・27)、軍隊も駐在していたのだろう。彼は主イエスが多くの人々を癒しておられることを、うわさで聞いていた(5・15)。

一、自分自身に対する見方

主がカペナウムに来られたとき、彼の「頼みにしていた僕が、病気になるって死にかかっていた」。その僕を癒してほしいと願った彼は、「ユダヤ人の長老たちをイエスのところにつかわし」た。異邦人である自分は、主イエスに会っていただく資格がないと考えたからだろう。いや、それだけではない。主が自分の家に近づいてこられた時さえ、友だちを送って、「わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格は、わたしにはございません」と言わせている。彼は、自分が罪ある者、汚れた異邦人であることを、認めていた。

しかし、ユダヤ人の長老は、「あの人はそうしていただくうちがございます」と、主に伝えている。百卒長はユダヤ人を愛して、会堂を建てていたのである。彼は7節で「わたしの僕をなおしてください」と言っているが、この「僕」とい

う用語は、2、3、8、10節の「僕」(「奴隷」とは違う語で、子どもを指す時にも用いられる。彼は、ユダヤ人と思われるこの僕を、子どものように愛していたのであろう。

この百卒長は、ユダヤ人から見ても立派な人だった。しかし、彼はそれをおくびにも出さない。かえって謙そんに主の御前に出ている。主は、このような謙そんな者こそ受け入れてくださる。

二、主イエスに対する見方

百卒長が「わたしも権威の下に服している者です」(「も」という語に注意)と言ったのは、彼が主イエスの権威を認めていたからにほかならない。彼は、主が病を癒す権威を持たれていることを明確に認めていた。「権威の下に服している」と言ったのも、その権威に従順に従う気持ちの表明だろう。「行け」「こい」「これをせよ」というような自分の命令でさえ、部下はそれを聞いてすぐに行動する。それなら、病を癒す権威を持たれている主イエスがお言葉をくださったら、病気は治るはずだ。彼はそう考えて、「ただ、お言葉を下さい」と主に願っていたのである。

この百卒長の主イエスに対する見方は、先週学んだナザレの人々のそれとは対照的である。「この人はヨセフの子ではないか」と言って、主の権威を認めようとしないうちに、みわざは決して現れない。しかし、主のことをまだじゅうぶん知らなくても、このお方が人にはない権威を持たれていることさえ理解しているなら、主はすばらしいことをしてくださるのである。

三、本物の信仰

主イエスは、この百卒長の言葉を聞いて非常に感心され、「これほどの信仰は、イスラエルの中でも見たことがない」とおっしゃった。彼は異邦人であったが、本物の信仰を持っていたのである。本物の信仰とは、一方で自分自身の無力を認め、他方で主イエスの大能を認めることである。このときに、信仰は生きて働く。

よく注意して今日の聖書箇所を読むなら、この百卒長は、直接には主イエスに出会っていない。また、主はこの僕が癒されるようにという言葉を出されてもいない(ただし、並行箇所のマタイ8・5～13には、こちらも記されている)。しかし、「八使にきた者たちが家に帰ってみると、僕は元気になる」といって、直接に主イエスに出会わなくても、まだ直接僕に対する癒しの言葉がなくても、本物の信仰を持った者の願いに、主は応えてくださったのだ。この箇所を書き記した異邦人の医者であるルカは、どれほど大きな感動をこの出来事から受けたことだろうか。

結論

現代でも、私たちは主イエスにお会いすることができ。肉眼の目で見えなくても、信仰の目によって主を見ることができるのである。そのためには、まず謙そんにならねばならない。自分が立派な者だと思ってはならない。しかし、主はそんな者をも愛しておられる。そして、病をいやす権威以上の、罪を赦す権威をもって私たちの願いに応えてくださるのである。

研究資料

(長田)

大胆な信仰

信仰とは、「望んでいる事がらを確信し、まだ見えない事実を確認することである」(ヘブル11・1) 故に、その内に大胆さを含んでいる。見えないものを見る信仰からは当然のことであっても、見えるものだけを見ていく生き方からは、大胆、無謀と考えることがあるのである。キリストが示された信仰に対する考え方は、極めて大胆なものであった(マルコ11・22～24)。百卒長が示した信仰も、大胆な信仰の典型を示すものである。

①謙そんな人格の内に宿る信仰(6、7節) 「大胆な信仰」は、高慢ではない。むしろ、偉大な信仰は、謙そんな人格の内に宿る。自らについては、その無価値、無能力をよくわきまえつつ、そのような者にもあわれみ深く、全能の御手をもって働いて下さる神を信じるのである。

②み言葉への信仰(7節) 信仰とは、神のみ言葉の真実と力を信じることである。天地創造のみわざは、神のお言葉によってなされた(詩篇33・6)。「きよくなれ」との御子の言葉が、重い皮膚病を瞬時にいやした(ルカ5・13)。人の心が変わり、時代が揺れ動くとも、とこしえに変わることはない神のみ言葉に立つことこそ、私たちの信仰の土台である(イザヤ40・8)。

③御子の権威への信仰(8節) 百卒長は、自らローマ帝国の中で与えられていた権威の力を知っていた。そのような経験を覚えつつ、ましてや、

神の御子に与えられた権威は、絶対的なものであると考えた(マタイ9・8、28・18)。私たちが御子の名によって祈るのは、御子の内に絶対的な権威が与えられていることを信じるからである(ヨハネ14・14)。

テキスト

- 7・1 カペナウム ガリラヤ宣教において、主が拠点とされた町(4・31)。
- 2 百卒長 ローマの軍隊の歩兵100人の指揮官。
- 3 自分の僕を助けにきてくださるようと、お願いした 僕のためにいやしを願い、手間暇かける百卒長の姿には、彼の慈悲深い性格が示されている。百卒長が僕をどのように考えていたかは、「百卒長の頼みにしていた僕」(2節)(新改訳では「重んじられているひとりのしもべ」との表現にも表れている。また、7節の「わたしの僕」と訳されている言葉は、「わたしの青年(少年)」とも訳せる(新改訳聖書7節欄外注参照)。
- 4 彼らは…熱心に願って 長老たちの熱心さは、彼らがいかに百卒長を敬愛していたかを示す。あの人はそうしていただくうちがございます 長老たちのこの言葉は、百卒長の自分自身への評価の言葉と好対照である(6、7節)。
- 5 わたしたちの国民を愛し、わたしたちのために会堂を建ててくれたのです 百卒長が素朴な隣人愛の持ち主であったことに加え、ユダヤ人の信仰に対して関心以上のものをもっていただことの表れ。
- 6 わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格

は、わたしにはございません 百卒長のキリストに対する尊敬の大きさを表すと共に、当時、ユダヤ人が異邦人との交際を禁じられていたことも背景にあったであろう。

7 ただ、お言葉を下さい キリストが直接僕に会ったり触れたりすることなしに、ただお言葉一つで僕をいやすことができるこの彼の信仰がうかがえる(参照 列王下5・11)。

8 わたしも権威の下に服している者ですが 権威に関する彼自身の経験を通して、御子に与えられている絶対の権威に対する信仰を働かせている。特に、その権威は言葉の持つ力において表されるのであって、百卒長としての「行け」「こい」「これをせよ」といった言葉であっても、兵卒をその通りに動かすとすれば、御子のお言葉一つで、病がいやされると考えることは、彼にとって理の当然と考えられた。

9 イエスはこれを聞いて非常に感心され キリストが人の示した信仰に対して感心された例としては、ツロの女の例がある(マタイ15・28)。いずれも異邦人であり、謙そんの中に大胆な信仰が見出される。一方、故郷のナザレでは、主はユダヤ人たちの「不信仰を驚き怪しまれた」(マルコ6・6)。私たちの信仰(あるいは不信仰)は、主のお心をどのように動かしているであろうか。

10 使にきた者たちが家に帰ってみると、僕は元気になるっていた マタイによれば、キリストがいやしの言葉を宣言されたその時に、癒された(マタイ8・13)。

聖書 ルカ7・1～10
タイトル あっぱれな信仰

中心聖句 ただ、お言葉を下さい。そして、わたしの僕をなおしてください。

ルカ7・7

目標 イエス様が感心されるような信仰者になろう。

導入

皆さん、あけましておめでとございます。2004年の最初の日曜日です。最初からこうして神様を礼拝できてうれしいですね。この新しい1年、主イエス様のご支配の2004年（A.D.）もますます教会学校に励んで、イエス様のすばらしいことをもっとたくさん知って、しっかりとイエス様を信じる子どもになりましょう。

今月はイエス様に出会った人々のことを見ていきます。まず、最初にイエス様からとっても感心された信仰、あっぱれな信仰をもったローマの百卒長さんです。この人はユダヤ人ではなかったのにどうしてそんなにイエス様が感心されるほどの信仰があったのでしょうか、そのわけはこうです。

百卒長の命令

キャンプとか、クリスマスとかにこんなゲームしたことないですか？『船長さんの命令です。ハイ、右手をあげて下さい』『船長さんの命令です。左手をあげて下さい』『では両方ともおろして下さ

い』そこで両手をおろした人はアウト。そう、船長さんの命令だったと言うとおりになるというゲームですよ。実はこの百卒長さんには100人の兵卒たちがいて、ひとりの人に『行け』と言えば必ず行くし、ほかの人に『こい』と言えば来るのです。そして、僕に『これをせよ』と言えばちゃんとしてくれるのです。すごく権威のある人だったんですね。ところが、こんな力のある人でしたが、ある日、とても頼りにしていた僕が病気になるって、しかもとても重い病気で死にそうになっていました。さあ、日頃、兵卒たちに命令してそのとおりになっている、病気に対しては力がありません。ましてや死の力には勝てそうにもありません。この百卒長さんはどうしたでしょう。

百卒長の信仰

百卒長はこの僕を子どものように愛していたのです。だから何とかして死なないで元気になるってほしかったのです。そっで、イエス様をお願いして助けてもらおう。なぜなら、イエス様がたくさんの病人をいやされ、そして、今カペナウムに帰ってこられていると聞いたからです。そこで百卒長はユダヤ人の長老たちをイエス様のところにつかわして、自分の僕を助けにきてくださるようにとお願いしました。ユダヤ人の長老たちはイエス様のところに来て、熱心にこの百卒長のお願いをきいて僕を助けにきてほしいと頼みました。「あの百卒長さんはユダヤの国民を愛して、会堂まで建ててくれたのです」と。イエス様が彼らと一緒に出かけていたその途中、家からあまり遠くないところで、百卒長から送られた友だちが百卒長

の気持ちを伝えました。「主よ、あなたにわざわざおいでいただくにはあまりにもったいないことですし、わたしの屋根の下にあなたをお入れする資格すらわたしにはありません。ですから、自分でお迎えにあがる値打ちさえないと思っていました。ただ、お言葉を下さい。そして、わたしの僕をなおしてください。わたしも権威の下に服している者ですが、わたしの下にも兵卒がいます、ひとりの者に『行け』と言えば行き、ほかの者に『こい』と言えばきますし、また、僕に『これをせよ』と言えば、してくれるのです」。

百卒長へのごほうび

この百卒長のへりくだった心、それでいて、イエス様とお言葉の権威と力を100パーセント信じ頼みとしているその信仰を見、この百卒長の言葉を聞いたイエス様は非常に感心されました。そして、ついて来たたくさんの人々の方を振り向いてこう言われました。「あなたがたに言うておくが、これほどの信仰はイスラエルの中でも見たことがない。何という誉れに満ちたお言葉がイエス様の口から、この百卒長の信仰に向かって語られたことでしょう。百卒長はイエス様とお会いしてもないのです。しかし、そのあっぱれな信仰は生きて働き、イエス様のおほめのお言葉と共に、なんと僕はすっかり元気になりました。あっぱれな信仰、イエス様にすら感心される信仰、これこそ本物の信仰です。信仰には必ずやごほうび（報酬）があります。この1年、ただ、お言葉を下さい」と信仰をもって歩みましょう。

ワーク A

●1月4日～2月8日の聖句ルカ10・42

●話し方のヒント

100人の兵隊を持つ隊長さんがいました。イエス様を心から信じていたので、兵隊の一人が病気になる時、すぐにイエス様をお願いに行きました。「私は偉いのだから聞いてくれるのは当たり前」といはいりんぼではなく、「ただイエス様がおると言ってくたださるだけでいいのです」と、イエス様の力を信じていました。イエス様はその信仰をほめて、病気もおしてくださいました。ワークについて

彩色してカードを完成してください。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。

●質問2 家の中に入っていたく資格もないという謙遜とイエスさまの権威を信じる信仰がこの願いを引き出しています。

●質問3 イエスさまが「なおれ」と言われたことは書いてありませんが、ここで大切なのは百卒長の信仰であることを理解できるように導きましょう。

●質問4 み言葉がそのとおりになることを自分の体験や、また聖書の記事（たとえば天地創造）などを通して話してあげましょう。

ワーク C

●「権威」の意味を説明してあげてください。

●「権威」の有無は、その人の出した言葉がその言葉とおりに実現するかどうかでわかります。その言葉を出した人の中味（誠実さ、真実さ）や実行能力が問われるのです。

●百卒長は、軍隊という「上官命令に絶対服従する地上最強の権力組織」を例にしました。日本という法治国家の場合、その権威は色んな国家権力、国家資格（運転免許、医師免許、司法資格、警察権力など）に現われ、その通用する範囲は日本の国内です。社長ならばその権力の範囲は、会社の中でしょう。そのように、神様の権威は、神様が造られたすべてのもの（被造物、天地万物）に及ぶのです。つまり、百卒長は、イエス様を天地創造の神様としてとらえていたのです。

ワーク D

●今日から6回シリーズで、イエス様に出会った人たちに焦点をあてて学びます。質問を通して学ぶことは、それぞれの人の苦しみや感情を察しながら、私たちもイエス様に出会うことが目的です。●ローマの百卒長は、イエス様にその信仰をほめられた数少ない人の一人です。「ただ、お言葉を下さい。そして、わたしの僕をなおしてください」と語った彼は、権威ある者の言葉がどういうものであるかを知っていました。①②の質問を通して、わたしたちは言葉に従うとは、どういうことなのか現実のこととして、捕えたいと思います。

●★マークの質問を通して、新しい年もイエス様の権威あるお言葉に従って歩めるよう気持ちを新たにしたいと思います。

中高科へのヒント

●考えてみよう

1 百卒長が主イエスのもとに直接出向かず、ユダヤ人の長老たちや友だちを遣わしたのはなぜですか。

2 百卒長はどのような人柄、信仰の持ち主だと言えますか。

3 百卒長が主イエスから称賛されたのはなぜですか。

●自分にあてはめてみよう

1 あなたが百卒長であれば、どうしたでしょうか。

2 あなたは主とみ言葉に対してどのような態度を取っていますか。

3 人々はあなたの信仰をどう評価しているでしょうか。また、主イエスがあなたの信仰を「ご覧になると、一体何と言われるでしょうか」。

●話し合ってみよう

1 主のみ言葉がいかに権威あるものであるか、聖書全体から調べてみましょう（詩篇107・20、イザヤ55・10～11、ヘブル4・12他）。

2 主イエスが信仰を称賛された例、逆に不信仰を嘆かれた例を見てみましょう（マタイ15・21～28、13・53～58、14・22～33他）。

3 語られたみ言葉がそのとおりに実現した実例を聖書の中から挙げてみましょう。

4 み言葉が与えられ、そのとおりになったという体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ルカ7・36～50
テーマ パリサイ人シモン

序論

主イエスに香油を注いだ女の話は、全福音書に記されている。他の3福音書は、受難週に起こった事件なのだが、ルカだけはかなり早い時期のこととして記録している。内容がかなり違っているので、両者は別々の出来事と理解するほうが良い。

ここに登場する「罪の女」も、これ以前に主イエスに会っており、 \wedge わたしきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招いて悔い改めさせるためである \vee （5・32）ということばを聞いていたであろう。彼女の態度と、主を招いたパリサイ人シモンのそれとは対照的だった。

一、シモンの態度

パリサイ人については、研究資料を参照。彼らは5・17からルカの記述に現れ、主の「挙手一投足を監視していた。シモンが主を招いたのも、主の教えを聞くことではなく、非難の口実を得るためだった。その証拠に、彼は主を食事に招いておきながら、普通の客に出すはずの \wedge 足を洗う水 \vee も出さなかった。より親しい客への挨拶であった \wedge 接吻 \vee もしなかった。いわんや、貴賓の頭に注ぐ \wedge 油 \vee など、一滴も注ぎはしなかった。

なぜ、そのような態度だったのか。彼は主に対して、直前の34節に記されているような批判的な思いを抱いていたのだろう。また、 \wedge もしこの人が預言者であるなら、自分にさわっている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ \vee と、主を試そうとしていた。

うとしていた。謙そんに主のことばを受け入れようとは、少しも思っていなかったのだ。

二、女の態度

しかし、この女はシモンとは正反対だった。彼女が \wedge 罪の女 \vee であることをシモンが知っていたことをみると、かなり有名だったのだろう。当時は食事の時、左ひじで上体を支え、足を投げ出していたので、この女は背後からそと主の足もとに近づいた。そして、汚れた主の足を涙で洗い、髪の毛でその汚れをぬぐい取ったのである（水も布も用意していないところを見ると、これは意図していなかった行動かもしれない）。さらに主の足に接吻して、持ってきた \wedge 香油 \vee をその足に塗った（ \wedge 香油 \vee は、46節の \wedge 油 \vee よりもはるかに高価な物）。

この女の態度は、確かに尋常ではない。しかし、彼女はそうせざるをえなかったのだ。彼女は自分が罪の女であることを自覚していた。しかし、そんな \wedge 罪人を招いて \vee くださる主の愛が嬉しくて、何とかしてその感謝を表したいと思ったのである。

三、主イエスの態度

対照的な二人を前にして、主はシモンが \wedge 心の中 で言った \vee ことを見抜き、彼に一つのたとえ話をなされた。このたとえ話が言おうとしていることは、そう難しくはない。500デナリ借金していた人とは罪の女をさし、50デナリの借金をした人はシモンをさしている。重要なのは、金額は違っても、ふたりとも借金をしていたという点だ。しかし、シモンは自分が借金をしている（つまり罪を犯し

ている）とは思ってもいなかった。主は、そんな高慢なシモンのこともご存知の上で、彼の家においでになったのだ。主は、どんな人間のどんな罪をも赦してくださるお方である。

罪の大きさは、借金のように数字で表すことはできない。それはあくまでも自分の判断である。当時でも、「自分は何も罪を犯してはいない」と、とぼけて知らないふりをする \wedge 罪の女 \vee もいただろうし、ニコデモのように、自分の罪を認めたパリサイ人もいた。しかし、赦しの喜びは、罪を認めた者だけが得ることができる。 \wedge 罪の増し加わったところには、恵みもますます満ちあふれ \vee るのだ（ローマ5・20）。 \wedge この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされている \vee という訳では、愛が赦しの条件のように思われる。しかし、新共同訳のように、 \wedge この人が多くの罪を赦されたことは、わたしに示した愛の大きさが分かる \vee と訳すなら、愛は赦しの結果であることがよく分かるだろう。だからこそ主は、 \wedge あなたの信仰があなたを救ったのです \vee と宣言されたのだ。

結論

先週は、たとい異邦人であっても謙そんに主の権威を受け入れるなら、病が癒されることを学んだ。しかし、主はそれ以上に、 \wedge 罪をゆるすこととさえる \vee お方である。自分の罪の大きさを認める者なればこそ、かえって罪を赦された喜びは増し加わり、主を深く愛するようになることを知ろう。

研究資料

(長田)

主を多く愛するために

主はペテロに「あなたは…わたしを愛するか」（ヨハネ21・15）とお問いになったが、主は私たちに同様に問いかけて下さる。私たちは、この主の問いかけに、どのようにお答えすることができるだろうか。また、私たちの心深くをこぼれる主の前に、愛の浅薄さを覚えるとき、私たちはどうしたらよいだろうか。

①深い認罪（47節） 「罪の女」（37、39節）と呼ばれた女性に、自ら深い罪の意識があった。そのような罪のすべてが赦されたことに、彼女は驚きを覚え、感謝と感激のうちに、主を愛さずにはおれなかった。私たちの愛が冷やかであるとするれば、赦された罪の大きさ、重さに対する認識の不足がありはしないか（1ヨハネ3・1）。

②明確な贖罪信仰（50節） どんなに深い罪を持っていたとしても、主の贖いのゆえに、また、主が持っておられる絶対的権威のゆえに（48節）、赦しを得ることができる。何という恵みであろうか（詩篇32・1）。

③心の深みからの愛の表現（44、46節） 心の内側にあるものが外側の行為となって表れる。私たちの主への愛は、私たちの日々の生活の中にどのように表れているだろうか。

テキスト

7・36 あるパリサイ人がイエスに、食事を共に

したいと申し出た。パリサイ人は、当時のユダヤにあって、熱心な律法の研究者であったが、内面的な実質を見失い、キリストの言動を批判した（5・30、6・2等）。そのひとりである彼がキリストを

食事に招いた動機は定かではない。あるいは、キリストに対して多少の関心があったのかもしれない（47節）。しかし、それは、批判的な方向に向きがちであり、キリストが自らの罪のための救い主であるとの認識は持ち合わせていなかった。

37 その町で罪の女であったもの おそらく、遊女のことであろう。

38 泣きながら その家に入った瞬間から、彼女は内面の感情を抑えきれない。

髪のもでぬぐい 女性にとって大切な髪の毛を手拭い代わりに用いたことは、彼女にとって、キリストがどれほどに尊い存在であったかを示す。足に接吻したこと、高価な香油を用いたこと等も同様。

39 心の中で言った キリストは、心の中のつぶやきさえも知られる。

もしこの人が預言者であるなら 彼のキリストに対する認識は揺れ動いている。

41 ある金貨しに金をかりた人がふたりいた このたとえは、主を多く愛する秘訣を見事に言い表している。

42 どちらが彼を多く愛するだろうか 罪赦され、キリストを愛することにおいては同様であっても、その程度、その深さにおいて、異なっている場合がある。

44 この女を見ないか シモンは、彼女を「罪の

女」としてしか見ないが、キリストは彼女の内側にあるものに目を留めておられた。そして、シモンにも、彼女の内側を見せようとされる。

あなたは…ところが、この女は… 以下、キリストは、ご自身の足を洗うことについて、接吻することについて、香油を塗ることについて、シモンと女性の行動の違いを指摘される。そのことによって、キリストは、女性の内側と同時に、シモン自身の内側にも目を向けさせておられる。

47 この女は多く愛したから、その多くの罪はゆるされているのである キリストに対する愛による彼女の行動は、彼女が多くの罪を赦されたことを証明している。

少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さないシモンの愛の冷やかさの原因が指摘される。

48 あなたの罪はゆるされた この時初めて罪を赦したのではなく、これまでの罪の赦しを確認し、改めて宣言するお言葉であろう。

49 罪をゆるすこととさえるこの人は、いったい何者だろう 罪を赦す権威は、神だけに属する。キリストの神的権威が明らかにされている（マルコ2・5～10）。

50 あなたの信仰があなたを救ったのです 罪を赦す権威をお持ちの方がそこにおられた。しかし、その恵みを受け取っていたのは、その女性だけであつた。ただ信仰だけが神の恵みを受け取ることができる。

安心して行きなさい 罪の赦しを確認し、その平安の中に生きていくことを勧めるお言葉。

聖書 ルカ7・36〜50
タイトル どちらが多く？
中心聖句 少しだけゆるされた者は、少しだけしか愛さない。 ルカ7・47
目標 多くゆるされていることを知って、主を深く愛する者とされよう。

導入

主に出会った人。ローマの百卒長に続いて、きょうのところにはふたりの人々が登場し、比べられています。そのひとりパリサイ人シモン、もうひとりはその町で罪の女と言われていた婦人です。パリサイ人シモンがイエス様を食事に招きました。そのとき罪の女が食卓についておられるイエス様の足を涙でぬらし、髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して香油をぬったのでした。それを見たシモンは心の中で言いました。「もし、この人が預言者ならこんなことをしている女がだれだか、どんな女かわかるはずだ。罪の女なのだから」。イエス様はちゃんとその心を見ぬいていて、シモンにこんなたとえ話をなさいました。「ある金貸しに金を借りた人がふたりいたが、ひとり500デナリ、もうひとは50デナリを借りていた。ところが、返すことができなかったで、彼はふたり共ゆるしてやった。このふたりのうちで、どちらが彼を多く愛するだろうか」。シモンは答えて言いました、「多くゆるしてもらったほうだと思いま

す」。そのとおりです。多くゆるしてもらった人は「ありがとございます。このご恩は一生忘れません。あなたのためならどんなことでもします」と言うでしょうね。

少しだけ愛した人

50デナリを借りていた人とは実はパリサイ人シモンのことをさしているのです。実際、彼はイエス様に対してどんな真実な愛も注いでいないのです。イエス様が家に入っても、足を洗う水もあげなかった。接吻もしてくれなかった。頭に油を塗ってもくれなかった。食事にお招きをしたのも、実は、イエス様のお話を聞くこととしてではなく、どこかイエス様を非難するところを見つけようと思ったからでした。シモンは自分が罪人だなんて、これっぽっちも思っていないませんでした。なぜって、パリサイ人だったのですから。自分たちはきよい、自分たちは特別、自分たちはあの取税人や罪人たちとは違うんだぞと思っていたから、罪ゆるされた喜びなんて全然知らないし、イエス様への愛も本当にはなかったのです。でもイエス様はそんな高慢なシモンのこともよくご存知で、シモンの家の食卓につかれました。

多く愛した人

500デナリを借りた人だとえられた罪の女こそ多くゆるされて、多く愛した人でした。彼女がイエス様に示した愛の大きさと、どれほどイエス様から多くの罪をゆるされたのがよくわかります。香油が入れてある石膏のつばを持ってきて、泣き

ながら、イエス様のうしろでその足もとにより、まず涙でイエス様の足をぬらし、自分の髪の毛でぬぐい、そして、その足に接吻して、香油をぬりました。多くの罪をゆるされたというしるしです。イエス様はその女に「あなたの罪はゆるされた」「あなたの信仰があなたを救ったのです。安心して行きなさい」と言われました。何と喜ばしいことでしょう。

例話 ドロシー・ホーア先生のこと

ドロシー先生が3歳の頃、イギリスのお家であったことです。ピアノのレッスンです。ピアノの先生がこう言われました。「ドロシーちゃん、中央のドはここですよ、絶対にマークをつけてはいけませんよ」。そのように言われていたのに、どうしても自信がなくて、ほんのちょっと、しるしをつけました。次のレッスンのとき、「ドロシーちゃん、マークをつけないように言ったでしょう？」と先生に言われて、ドキッ、ズキッと、心が痛くなり、深い深い罪の自覚が生じてきて、泣きながらその小さいと思える罪を悔い改め、ゆるしの喜びを知りました。このようにして主への深い愛に満ちて、このイエス様を伝えたいばかりに、すべてを献げて、宣教師として日本においてになり、すばらしい働きをなして、イエス様のもとに帰られました。その墓碑には「神の和解を受けなさい」と刻んであって、見る人の心に今も力強く語り続けています。

静かに思いめぐらしてみましよう。わたしもどんなにか多くゆるされているか。主を愛しましよう。

ワーク A

話し方のヒント

たくさんお金を借りた人と、少しお金を借りた人が、もうお金を返さなくてよいと言われたら、どちらのほうがよりうれしいでしょうか。たくさんゆるしてもらった人のほうが、もっとうれしいでしょう。自分の罪がわからない人より、罪がよくわかってイエス様に「ごめんなさい」と言い、罪をゆるしていただいた人の方がうれしくて、イエス様をもっと大好きになるのです。「イエス様、私のたくさんさんの罪をゆるしてくださいありがとうございます」。

ワークについて

彩色して裏に祈りのことばを貼ってください。

ワーク B

- 質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましよう。
- 質問2 それぞれの行動の背後にある、罪人であることの自覚の有無、感謝と愛のころのの有無に気づくことができるようにしましよう。
- 質問3 ゆるされているという生徒には、感謝してさらに信仰に立てるよう導きましよう。ゆるされていないという生徒には、(無理強いすることなく)聖書の導きの中で悔い改めの機会となつたらさいわいです。まだ罪とは何かわからない生徒もいると思いますので、み言葉で(例マルコ7:21〜23)導きましよう。

ワーク C

- 第2問 答えは「多くゆるされた者は、多く愛する」です。肯定的な表現に変えて別の角度から考えてみます。「多くゆるされた者」とは、ゆるされている事に気づいている者のことです。本来、イエス様の十字架によって全ての人の全ての罪はすでにゆるされている(愛することがゆるしの条件ではない)からです。しかし、それを自分のものにするか否かは、各自の認罪と信仰によるのです。
- 第3問 罪の女は、ひたすらイエス様を見上げ、仕えています。しかし、パリサイ人は離れた所で冷やかに観察し、心の中で批判しています。認罪と信仰により、ゆるしを自覚した者とそうでない者との違い(思い、言葉、表情、態度)について話し合ってください。我らの中にも、このパリサイ人のような姿はありませんか。

ワーク D

- 罪の女と言われた人がイエス様を愛する愛は、ただものではありません。こんなに涙を流しながら、イエス様の前ではなく、後ろで足もとに寄り、ぼたぼた流れる涙で足をぬらし、髪の毛でぬぐい、足に接吻して、大切に高価な香油をぬる。そのことを想像しただけで、感動が沸き上がってきます。ああ私たちもこのようにイエス様を愛したいと思いませんか？
- 質問を通して、冷たいパリサイ人の態度と比較しながら、イエス様の感情も察したいと思えます。この女がここまでイエス様にできた理由は、彼女が多くゆるされていることを全身全霊で感じとっていたからでしょう。
- 4の質問でイエス様が女に語られたお言葉は2つあるので注意して下さい。

中高校へのヒント

- 考えてみよう
- 1 パリサイ人シモンが主イエスに対して取った行動から、どういうことがわかりますか。
- 2 罪の女が主イエスに対してあのような行動を取ったのはなぜですか。
- 3 47節は、善行によって救われることを言っているのでしょうか。
- 4 犯した罪は、どうしたら帳消しにされますか。
- 自分にあてはめてみよう
- 1 あなたは自分の罪についてどう認識していますか。
- 2 あなたは、すべての罪が赦されたという確信がありますか。その確信の根拠は何ですか。
- 3 救われる前と後で、主イエスに対する思いや態度はどのように変わりましたか。
- 4 あなたの信仰生活は、パリサイ人シモン型ですか、それとも罪の女型ですか。
- 話し合ってみよう
- 1 主イエスに対するパリサイ人シモンと罪の女との態度はまるで違いますが、その相違の原因はどこにあるのでしょうか。
- 2 罪赦された喜びのあまり、主に仕えるようになったダビデやパウロ等の生涯について調べ、感想を分かち合いましよう。
- 2 認罪に導かれた体験や、罪赦された喜びのあまり、主を愛さずにはいられなくなった体験があれば、分かち合いましよう。

聖書 ルカ10・38〜42
テーマ マルタとマリヤ

序論

この出来事は、ルカ福音書にしか記されていない。直前の良きサマリヤ人のたとえ話に続いているので、△何をしたら、永遠の生命が受けられましようか▽(25節)という問いに対する答えとしてここに置かれたのではないかと、『新聖書注解』は推測している。隣人を助けることは重要なことである。△しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである▽。それが何であるかを、今週のテキストは明確に教えている。ここに登場するマルタとマリヤは、ヨハネ11章に登場するベタニヤ村に住んでいた姉妹と考えてよい。

一、マルタの考え方

ヨハネ11・5、19にはマルタが先に書かれているので、彼女が姉だったと思われる。その責任感もあってか、彼女は主がおいでになられたとき、食事や宿泊の準備で忙しく働いていた。これは、だれかがなくてはならないことである。彼女は、きつと主が喜んでくださると思って、そのために一生懸命だった。ところが、妹のマリヤはいっとうに手伝いをしようとしめない。それで、彼女は△心をとりみだし▽主のところにきて、△妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください▽と言ったのだ。彼女の言い分もよくわかる。主のために労する

ことは、決して悪いことではない。現代の私たち、子どもへの伝道のために一生懸命奉仕している。主が喜んでくださると信じて奉仕している。時には、ほかの教会員が何もしないのに憤りを感じて、「主よ、私の手伝いをするように、あの人におっしゃってください」という祈りをしたことがあるかもしれない。これはまさに、マルタと同じような考え方ということができる。

二、マリヤの考え方

この箇所にはマリヤ自身のことは一言も出てきていないので、彼女の考え方は推測するしかない。彼女が△主の足もとにすわって、御言に聞きいつていた▽のは、手伝いをするのがいやだったからではないだろう。主がベタニヤ村を訪問される機会は、そう多くはなかった。12弟子たちのようにずっとそばにいて、主のみ言葉を聞くことができなかったマリヤは、主がおいでになったときこそ、何を聞いてでも、み言葉を聞きたかったのである。彼女は、これこそ主が喜んでくださることだと考えていたのだろう。

ヨハネ12・3によると、受難週に主に香油を注いだのはこのマリヤだった。彼女は、主を愛していた。み言葉を聞くことを、ほかの何事よりも愛していた。それこそが、最上の接待だと考えていたに違いない。

三、主イエスの考え方

マルタに対する返事の中に、主イエスの考え方は示されている。△マルタよ、マルタよ、あなた

研究資料

(長田)

無くてならぬもの

神が私たちにまずお求めになるものは、礼拝であり、み言葉と祈りのうちに、神ご自身との交わりを持つことである。このことを差し置いて、いかなるわざがなされたとしても、命と力を欠き、十分に神の栄光を表すことができない(ヨハネ15・5)。

アブラハムは、事あるごとに祭壇を築き、神を礼拝した(創世記12・8、13・18等)。ダビデは、王としてのどんな働きや経験にも勝って、主の前に行くことを喜びとした(詩篇16篇)。ダニエルは、異国の地において重要な地位に就いていたが、一日に三度ひざをかめて神の前に祈ることを忘れなかった(ダニエル6・10)。そして、神の御子は、早朝、夜明け前に、寂しい所で神の御前に出(マルコ1・35)、あるいは、山で徹夜の祈りをされ(ルカ6・12)、奇跡のみわざの後山に退き祈られた(マルコ6・46)。全人類の救いのために、十字架につこうとされる時も、ゲツセマネでの深い祈りで勝利を与えられることなしには前に進もうとされなかったのである。

「主が神を求められましたのは、ただ、父なる神と共に居る事を愛されたからだけではありません。主はまた、これが必要とされたのです。新しい力を受けるためには祈禱と交わりの静かな時を必要とされたのです」。(B・F・バックストン『神と偕なる行歩』関西聖書神学校出版部発行、1、

2頁)

私たちにとって、「無くてならぬもの」が何であるのか、心に銘記させていただきたい。

テキスト

10・38 ある村 ベタニヤ(ヨハネ11・1)。キリストは、しばしばマルタ、マリヤ姉妹の家を訪れておられる(ヨハネ11章、12・1)。

マルタ マルタはマリヤに比べて行動的、積極的な性格であったようである(ヨハネ11・20)。

39 マリヤ マリヤはマルタに比べ、内向的な性格のようであるが、キリストへの愛は深く、愛ゆえに時に思い切った行動をとることもあった(ヨハネ12・3)。

主の足もとにすわって、御言に聞き入っていたその場所は、主のすぐ近くであり、また、自らを低くする場所であって、み言葉を聴くのに最もふさわしい場所であった。みもとに行く者だけが、主の静かな御声を聴くことができる(マタイ5・1、マルコ3・13)。

40 接待のことで忙しくて心をとりみだし、せっかくの主への奉仕が、いらだつ心、裁く思いによって損なわれることがある(1コリント13・5)。妹がわたしだけに接待をさせている。主への奉仕は、主の御前に自分の果たすべき分を果たすことだけで十分なものである。人に対するつばやきを奉仕の中に入れてはならない。

なんともお思いになりませんか この言葉の中に、人へのつばやきが主へのつばやきにまで至っていることが表れている。私たちの奉仕が、どのよう

は多くのことに心を配って思いわずらっている。しかし、無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。マリヤはその良い方を選んだのだ▽。接待も大切なことだが、△無くてならぬものは…一つだけである▽。それは、主のみ言葉に聞き従うことである。ほかにもなすべき良いことがたくさんあるだろう。しかし、そのことゆえに△思いわずらって▽しまつては何にもならない。ただ、静かにみ言葉を聞くことが最も大切なのだ。

△まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。だからあすのことを思いわずらうな▽(マタイ6・33-34)というみ言葉を思い出す。本当に必要なのは、神との正しい関係である。主イエスとの深い交わりである。マリヤは、△その良い方を選んだのだ。そしてそれは、彼女から取り去ってはならないものである▽。主イエスの考え方は、マリヤの考え方と同じだった。

結論

隣人を愛することは大切なことであるが、神を愛することは、もっと大切だ。まず神を愛してこそ、隣人をも愛することができる。幼い魂を愛して教会学校の奉仕をすることは重要だが、そのために個人的な祈りの時間をとることができないなら、再考が必要だ。いわんや、奉仕をしていない人を批判するようになると、赤信号である。マリヤのように、主のみ言葉を聞くことを最大の喜びとしよう。これこそ、真の意味での主との出会いであり、永遠の生命を受ける秘訣である。

な状態の中で行われていたとしても、主がすべてを見ていて下さることに憩うべきである(黙示録2・2、9、19等)。

41 多くのことに心を配って思いわずらっている「思いわずらう」と訳される「メリムナオー」は、「心を分ける」という原意を持つ言葉。マリヤの心が無くてならぬただ一つのものに向かっていたのに対し、マルタの心は多くのものに向かって分かれていた。

42 無くてならぬものは多くはない。いや、一つだけである。主への奉仕の中で、心が多くのものに向かって分かれていたマルタに対して、一つのものに向かうよう招かれる。すなわち、主のみもとに留まることいかなる奉仕の中にあっても、主のみもとにとどまり続けることである。彼女の心が渴き、いらだち、つばやきで一杯になったのは、この一つのを欠いていたためであった(詩篇1・1-3)。

マリヤはその良い方を選んだのだ マルタが忙しく接待の準備をしている中、主の足もとで主の御声に耳を傾け続けることは、意志的な選択なしにはありえなかった。そして、主は彼女の選択を良しとされた。

それは、彼女から取り去ってはならないものである 私たちの周りで、主を礼拝し、主のお言葉を聴き、主に祈りをささげようとする人がいるなら、いろいろな理由によってその願いを妨げることがないように心したい。

聖書 ルカ10・38〜42
タイトル 一番大切なことは
中心聖句 無くてならぬものは多くはない。
いや、一つだけである。
目 標 マリヤのように、主のみ言葉に聞き入ろう。

導入

「おい、イエス様がベタニヤ村においでになるぞー。」「え？ イエス様が？」さあ、もしみんながそこにいたらどうする？「よし、イエス様の大好きなおいしいものを用意しよう。そして、一緒に食べるぞー」「ほく、肩たたき上手だから、たいてあげようかな？」「そうね、わたし、だっことしてほしいな。」「うーん、イエス様が一番にしてほしいことって何なのかな？」そうですね。つまりはこういうふうに考えることになるのですね。では、さあ、イエス様が「これが一番大切なことですよ。これが無くてならない、たった一つのことですよ」っておっしゃる、そのことは一体どうすることなのでしょう？」

マルタ・スタイル

旅の途中に、イエス様がとても愛していたマルタ、マリヤ、ラザロの住んでいたベタニヤ村へ入ったときのことです。マルタさんは、「イエス様どうぞ」と言っておいでなりました。

ワーク A

話し方のヒント

イエス様が私の家に来てくださった。うれしくてたくさんお話を聞きました。でもあんまり忙しくて、文句を言っていました。マリヤさんはイエス様のお話をじっと聞いていました。どちらも良いことですが、一番大切なのはイエス様のお話を聞いて守ることです。良いことをしても、文句を言いがらだたら喜んでもらえません。一番大切なこと、神様に喜んでもらえることができるようにお祈りしましょう。

ワークについて

新しい耳を作ってください。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。

●質問2 マリヤは良い人、マルタは悪い人というふうにならないように、あくまでも、そのとき良いほうを選んだのがマリヤであつたということです。ここはイエス様が何が一番大切なことをか教えているところですか。

●質問3 特に日曜日、教会学校に来ることを最優先できるように励ましましょう。ただし、勉強なども大切なので勉強なんかでなくてもいいといった極端にならないように注意しましょう。

お招きしたマルタさんは心を尽くしてイエス様やお弟子さんたちのために接待しました。接待して、もらってうれしいし、するのも楽しいものですよ。」「さあ、お招きした、これ、おいしいですよ。」「ああ、本当に何ておいしいでしょう。」「って。メインディッシュは何だったかな？ ドリンクは何種類準備したのかな？ デザートはどんなのだったのかな？ ちょっとのそいでみてみたいくらいです。うれしく楽しくやっていたらよかったのですが。マルタさんはあれも出し、これも出し、あれをひっこめ、これをひっこめ、やれ次はスープ、あ、次、次とやっているうちに目が回りそうになって、心を取り乱しました。ふと妹のマリヤの方を見ると、「もうマリヤだったら、私ひとりなんなてんでて舞いしているのに、一緒に手伝ってくれてもよさそうなものを」と心が爆発してしまい、とうとうマリヤではなく、せっかくお招きしたゲストのイエス様にそれをぶつけてしまいました。」「主よ、妹がわたしだけに接待をさせているのを、なんともお思いになりませんか。わたしの手伝いをするように妹におっしゃってください。」「って、喜び楽しみながらの接待はいいのですが、心をとり乱したり、あぐくの果てには、文句やつぶやきや、まわりの人をどうのこうのと言いだしたのでは、せっかくの接待も丸つぶれ、むしろやらない方がよっぽどいいんじゃない？」と言われそうです。これがマルタ・スタイル。

マリヤ・スタイル

マリヤさんは、その日、その時、何が一番大切なことなのかをよくわかっていた人でした。イエ

ワーク C

●「救い」とは、神様との関係の回復です。それは、創世記2〜3章でアダムとエバの「死」（神様との関係の断絶）を起源とし、人間にとってその関係回復が最も大切なことなのです。マリヤは、この第一に大切な事を第一とする姿勢を貫いた（そう理解し実践した）ということになります。

●しかし、これは賜物や個々人の生来の性格傾向にもよりますから、マルタを教育訓練したらマリヤになる、というものでもないでしょう。もてなしも大切です。しかし、それにもかかわらず、万人に大切な第一の事は、神様との関係の回復（信仰）です。「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」（ローマ10・17）とあるとおりです。

ワーク D

●マルタとマリヤの姉妹のお話は、私たちの身近な問題です。特に、女性には身につまされる箇所ではないでしょうか？ けれども、マルタに対してイエス様は、何も非難している様子を感じられません。むしろ、思いやりをもって名前を2度も呼びながら、優しく語りかけられています。彼女の苦しみも痛みも悩みも細かいところまで全部知って、理解して下さる。そんな、イエス様だからこそ、そのお言葉に信頼し、従えるのではないのでしょうか？

●どんな態度？ は、聖書の中からそのまま書けると思います。少し要約しても良いでしょう。どんな感情？ は、いらいらしていた、嫉んでいた、不安だった、などいろんな感情を想像して書いてみて下さい。

●それぞれ想像した感情を発表して分かち合ってみましょう。

ス様がベタニヤ村にこられるってことは、そうそうめつたにあることではないのです。お弟子さんたちだったら毎日一緒にいられるけれど、マリヤさんたちはちがいました。そこで、最上の接待として、「主の足もとにすわって、御言に聞き入っていた」のでした。愛するイエス様が何を語ってくださるのかわくわくしながら、じつとその口元に目を注ぎ、耳から入ってくるみ言葉をしっかりと心にとめていきました。イエス様はどんなに深い喜びをもって、また愛をこめて語ってくださいました。ですから、マルタさんによってそのよい瞬間が妨げられたとき、静かにマルタさんを諭しました。「マルタさん、そんなに多くのことで心をふり乱していますが、無くてはならぬものは多くはないのです。いや、一つだけなのです。妹のマリヤさんはその良い方を選んだのだよ。そして、それは彼女から取り去ってはならないものなのだよ」と。もちろんイエス様は食べることも良いことで、お好きでいろいろな人々のテーブルにいたり、イエス様も多くの接待をしたりしました。5000人4000人の給食、でもまず一番大切なことはイエス様のみ言葉を聞くこと。それによって、本当にイエス様との深い出会いが与えられるのです。マリヤさんはイエス様のお心がよくわかる人とされて、イエス様が十字架におかきになる前、香油を注いでお慰めしました。今こうして私たちがじつとすわって教会学校でメッセージを聞くのはとても大切です。これからはいつもマリヤ・スタイルをね！

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 マルタとマリヤの性格はどのようなものだと考えますか。
- 2 40節の言葉に至るまでのマルタの心の変化をたどってみましょう。
- 3 他の箇所でのマルタとマリヤも見てみましょう（ヨハネ11・1〜44、12・1〜11）。
- 4 この記事が、「良いサマリヤ人のたとえ」と「主の祈り」の間に置かれているのはなぜですか。

●自分にあてはめてみよう

- 1 あなたの信仰生活は、マルタ型ですか、それともマリヤ型ですか。
- 2 あなたは日々主のみ言葉に聞き入っていますか。また、そのことが「取り去ってはならない」身についた習慣となっていますか。
- 3 あなたも、「わたしだけに」という思いに陥り、ささいなことに腹を立てたり、人を非難したりしたことがありますか。その時の心の変化をたどってみましょう。どうしてそのような思いになったのでしょうか。
- 話し合ってみよう
- 1 み言葉に聞き入るとは、どのような姿勢のことを言うのでしょうか。
- 2 心を取り乱す原因は何でしょうか。そうならないためにはどうしたらよいでしょうか。
- 3 もし無人島に本を三冊だけ持っていくとしたら、何を持っていきますか。

聖書 ルカ17・11～19
テーマ 10人の病人

序論

主イエスの時代には、重い皮膚病にかかった彼らに対する差別はひどいもので、町の中に住むことさえ許されていなかった。彼らはまさに「打ちひしがれている者」(4・18)だった。主はある時、その病を持つ10人の人々にお会いになり、病をいやされたのである。しかし、1人の応答の仕方は、ほかの9人のそれとは全く違っていた。

一、10人の求め

主は「サマリヤとガリラヤとの間を通られた」。(ガリラヤに住む大多数はユダヤ人だったが、そのあたりでは、当然サマリヤ人も住んでいる。)すると、村はずれで集団生活をしていた10人の重い皮膚病にかかった彼らが、遠くの方から声を張りあげて、「イエスさま、わたしたちをあわれんでください」と叫んだのである。律法の規定によれば、彼らは「汚れた者、汚れた者」と叫びながら歩かねばならなかったことに留意したい(レビ13・45)。

彼らは自分たちが汚れた者であることを十分認識していた。主に近づくことさえできないと思っていた。しかし、彼らは主が多くの病人をいやしておられたことを知っていたのだらう。ただ「あわれんでください」と必死に求めたのである。彼らはあのローマ人の百卒長と同様に、謙そんだった。

二、10人のいやし

そのような必死の求めに対して、主は、彼らに近づきませず、彼らにふれませず、ただ「祭司たちのところに行つて、からだを見せなさい」と言われるだけだった。原語では「たつた語である。あまりにも簡単すぎはしまいか。確かに、律法によれば、病気が治ったことを証明してもらうためには祭司のところに行かねばならない(レビ14・2)。しかし、この時点では病気はまだいやされてはいなかった。それでも彼らは、主のみ言葉の權威を信じて祭司のところに向かったのだ。この点でも彼らはローマ人の百卒長と似ている。彼らには、いやされるにふさわしい信仰があったことは否めないであろう。

主のみ言葉は真実だった。「行く途中で彼らはきよめられた」。どれほど嬉しかったことであろうか。喜び勇んで、彼らは続いて祭司のところに向かったのである。律法によると、祭司のもとで7日間経過を見、8日目には犠牲をささげなければならぬ(レビ14・3～20)。帰ってこられるのは、早くても10日後ぐらいにはなる。でも、いやされたのだから、それはせねばならない。

三、1人の応答

しかし、10人の病人のうち1人だけは、ほかの9人と違った応答をした。彼はすぐにきびすを返して、「大声で神をほめたたえながら帰って」きた。祭司に見せることを忘れたわけではない。でも最初に、自分をいやしてくださったお方のところに行きたかったのだ。彼は、主イエスが神のみ

わざをなされたと信じていた。だからこそ、「神をほめたたえながら」主のもとに帰ってきた。主が律法よりもはるかに大切なお方であることを認めていたのだ。しかも、彼はユダヤ人からは「他国人」と思われていたサマリヤ人だった。神の選びの民でない者であっても、主がどういうお方を理解していたのである。

主は、「ほかの九人は、どこにいるのか」と嘆かれた。彼らの多くはユダヤ人だっただろうし、主イエスに対する信仰もあった。しかし、いやしてくださったお方が神の子であり、祭司よりも先に感謝をすべき方であると信じるところにまでは至っていなかった。

このサマリヤ人に対して、主は、「あなたの信仰があなたを救ったのだ」と仰せられた。これは、主の足に香油を注いだ女性に対して言われたことば(7・50)と全く同じである。サマリヤ人の場合は、病気を治していただいたのであるが、それは単に肉体のみでなく、魂も含めた全人的なものだった。サマリヤ人であっても罪の女であっても、信仰によって救われる。それは、彼らが「打ちひしがれている者」であるゆえに、ただ単純に主イエスのあわれみを求めたからである。

結論

信仰によって病気がいやされることはすばらしい。しかし、いやしを神のみわざと確信し、神をほめたたえることはもっとすばらしい。私たちも、神が私たちに与えられた救いのみわざに感謝し、常に神をほめたたえる者にならう。

研究資料

(長田)

キリストのもとに留まる

聖書中には、キリストに出会った多くの人々のことが記されている。しかし、そのすべてがキリストのもとにとどまったのではない。キリストから地上的なものを得ることを求めた人々は、結局キリストから立ち去っていった(ヨハネ6・26、66)。ただ、永遠のものを求めただけがキリストのもとにとどまった(ヨハネ6・68)。

キリストの招きは、「わたしについてきなさい」(マルコ1・17)であり、「わたしのもとにきなさい」(マタイ11・28)である。ただ、キリストから与えられる何物かを得るためにキリストに近づくのではなく、キリストにとどまり、キリストにあって神を永遠にほめたたえること、これがキリストの招いておられるところである(ヨハネ15・4～9、黙示録22・3、4)。

「かつてはわれよきものを／もとめて主をわすれたり／たまものよりいやしより／あたえぬし／さらによき／わがすべてのすべてなる／主をばあがめん／とこしなえに」(聖歌598番1節)

テキスト

17・11 サマリヤとガリラヤとの間を通られたユダヤ人とサマリヤ人が共に登場することが予想される場所。

12 遠くの方でたちとどまり 律法によれば、重い皮膚病を持った者は、「その衣服を裂き、その頭

を現し、その口ひげをおおって『汚れた者、汚れた者』と呼ばわらなければならぬ」す(レビ13・45、46)。また、人から離れて住まなければならなかった。

13 声を張りあげて 人々の注目を招かざるを得ない行動。彼らは、人々がどう思つかを顧みず、ただキリストのいやしを求めた。

わたしたちをあわれんでください 「キリストが哀れんで下さったならば、いやされることができる」との信仰を持って、主の哀れみを求めた。

14 祭司たちのところに行つて、からだを見せなさい 重い皮膚病の者が治ったと考えられる時は、祭司のところに行き、患部を見てもらう必要がある(レビ14・2)。主イエスは、いやしを求める彼らに対して、いやしがなされた時に取るべき行動をするように要求された。

行く途中で彼らはきよめられた 祭司のところに向かうことは、信仰によってしか行えないことであつたが、彼らはキリストのお言葉に従い、祭司のところに向かった。その途中で(祭司のところに着く前に)いやしはなされた。キリストが求められたのは、祭司のところに行くことそのものではなく、キリストのお言葉を信じて踏み出す、その第一歩であつたと言えよう。

15 そのうちのひとり、自分がいやされたことを知り、大声で神をほめたたえながら帰ってきていやしを求めた時と同様の大声で神をほめたたえた。私たちの祈りはどうであらうか。

16 イエスの足もとにひれ伏して感謝した 「足もとにひれ伏して」は、彼がキリストを大いなる

救い主として正しく認識していたことの表れ。祈りが答えられたときに、まずすべきことは、神への礼拝と賛美、また、感謝である。

17 きよめられたのは、十人ではなかったが 私たちの祈りが答えられたときが10回あれば、そのうちどれほど賛美と感謝をささげているであらうか。

ほかの九人は、どこにいるのか キリストは、祈りを聞いていただくだけで、ご自身のみもとに来ようとしないうちに対しても、彼らもご自身のもとに来ることを求められる。

18 神をほめたたえるために帰ってきたものの 祈りが答えられること、救いやきよめの恵みにあずかること、そのすべては神をほめたたえることに帰結すべきものである(ヨハネ14・13、エペソ1・6、12、14)。

この他国人のほかにいないのか 「神の民」として選ばれたはずのユダヤ人たちに對する嘆きが込められている。

19 立つて行きなさい キリストのもとに召された者は、キリストの証し人として世に遣わされる(マルコ3・13、14)。

あなたの信仰があなたを救ったのだ 10人の者すべては、病がいやされるために必要な信仰は持っていた。しかし、全人格的な意味での救いを受け取ったのは、彼のみであつた。その意味では、新改訳の「直した」よりも、「救った」の訳が良いであらう。

聖書 ルカ17・11～19
タイトル 何か忘れていませんか？

中心聖句

神をほめたたえるために帰ってきたものは、この他国人のほかにいないのか。

ルカ17・18

目標 神の恵みとみわざに感謝し、神をほめたたえよう。

導入

ある日、神様が人間の世界にふたりの天使をお遣わしになりました。「さあ、ここにあるバスケットをひとつづつもっていきなさい」。ひとりの天使に言いました。「いいですか。あなたはこのバスケットの中に、人々の感謝のお祈りを入れて帰ってきなさい」。もうひとりの天使にはこう言いました。「あなたは、このバスケットに、人々のお祈りのお祈りを入れてくるのですよ」。二人は神様のもとからくだっていき、言われたとおりにして帰ってきました。さてさて、バスケットの中はというと、感謝のバスケットにはたったふたつの感謝しか入っていません。ところが、お祈りのバスケットにはあふれてこぼれるほど入っていたというのです。人間は、なんと感謝の少ないものでしょう。きょうイエス様に出会った10人の人たちはどうでしょう？

叫んだ10人

この10人の人たちというのは重い病気ににかっ

ている人たちでした。もう一生治らな思われるような皮膚病でした。とても絶望的だったのです。サマリヤとガリラヤとの間にある村に住んでいました。普通だったら、誰にも会えない、そして、「私は汚れています、汚れています」と言って、人をさけていなければならない人たちでした。ところが、そこをイエス様がお通りになることを知って、彼らは周囲の人々のことも気にしないで、イエス様から遠くはなれた所に立ちとどまって、声を張りあげて、そう、今まで出したこともないくらい大きい声で叫びました。「イエス様、私たちをあわれんでください、あわれんでください」。

彼らは、イエス様がたくさんの病人をいやされたことを知っていて、こんなに大声で叫び求めたのでした。イエス様はどうされたのでしょうか。彼らをこらんになって、「祭司たちのところに行つて、からだを見せなさい」と言われたのです。近づいてもこられないし、手をおいてお祈りもしないのです。でも10人の人たちは、まだいやされてもいないのに、イエス様の言葉を信じて祭司たちのところへ向かいました。するとどうでしょう、行く途中で、10人ともみんな皮膚がきれいになって、すっかりいやされ、きよくされたのでした。何という驚き、何という喜び、イエス様の言葉は何と真実！

感謝したひとり

それから、9人の人たちはひきつづいて祭司たちのところへ行きました。律法では祭司たちのところで7日間様子をみて、8日目には犠牲をささげることになっています。ですから、イエス様の

ところに帰るのは10日ぐらい後になることになります。ところが、あとのひとり、もう、あまりの喜びに、すぐひき返したのです。大声で神様をほめたたえながらイエス様のところに帰ってきて、イエス様の足もとにひれ伏して、何度も何度も感謝をしたのです。実は、このひとりの人というのは、ユダヤ人の大きらいだったサマリヤ人だったのです。神様の選ばれた民ではなかったのに、自分のためにイエス様が素晴らしい神のみわざをなしてくださったとわかり、律法や祭司よりも大切な神の子イエス様のみもとに、あふれ出る感謝をささげに帰ってきたのでした。「きよめられたのは、10人ではなかったか。ほかの9人は、どこにいるのか」とイエス様は嘆かれましたが、感謝するために帰ったその人には、「立つて行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのだ」と、彼の信仰をおほめになりました。

適用

私たちはどっちの人でしょう？ イエス様のたくさん愛と恵みに対して、「大声で神をほめたたえ」感謝しているでしょうか。病気を治してもらったことある？ その時どうしました？ 神様に感謝のお祈りをしました？ それともお医者さんだけのおかげかと思っていました？ 人からよくしてもらっても、ちゃんと感謝をして、お礼を言います。ましてや、私たちを造り、愛し、守り、導き、救いに入れてくださる神様にいつも感謝し、誉めたたえることを忘れないようにしたいですね。さあ、何か忘れていませんか？ 一番大切なこと！

ワーク A

話し方のヒント

重い病気ににかかった10人の人がイエス様に、「治して下さい」とお願いしました。イエス様は「祭司の所に行きなさい」と言われただけでした。でも「きつと治る」と信じて、行く途中で治ったのです。「ありがとうございます」と感謝を言いにもどってきたのは、たった一人でした。私たちも、お願いをしなくても「ありがとう」を忘れてしまうことはありませんか。お祈りをするだけでなく、感謝を忘れずに、神様をほめたたえましょう。

ワークについて

彩色して壁かけを完成してください。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。
●質問2 恵みを受けっぱなしで終わってしまつたら御利益宗教と同じです。恵みに感謝し、主をほめたたえるという、神と人との交わりがなされるところに救いの意味があります。ただ一人感謝し、神との交わりに導かれたのがサマリヤ人でした。
●質問3 感謝は信仰を励ます力を与えます。具体的な事に感謝をささげられるように引き出してあげましょう。また、日々感謝することも教えるようにしよう。

ワーク C

●このワークの中で、自分が常日頃から神様に対して(また人に対して)「感謝」の足りない者であることを自覚したいのです。

●詳訳聖書は15節を「大声で神を認め」と訳しています。この癒しのみわざを体験した中で、神を認めた者は10人に1人でした。自分の心の中に感謝はどれくらいあるか、いっぱいあるか十分の1かを調べましょう。

●「感謝献金をささげる人が少ないですね」と、ある会計担当者が言ったことがあります。感謝の本心は、感謝献金に具体的に現われます。感謝献金の意味と大切さを、教師自身も取り扱われながら教えるといいですね。

●クリスチャンなのに感謝が少ないことは、結局「利益信仰」的になっていると言えないでしょうか。

ワーク D

●10人の重い皮膚病の人たち、そこにはユダヤ人も異邦人もなく、同病相哀れむ思いで一緒にいた様子が感じられます。その苦しみは想像を絶するものがあつたでしょう。しかし、一人残らずイエス様の指示に従って癒される。何が違つたのでしょうか。癒された後の態度でした。神をほめたたえるために帰ってきたのは、異邦人のサマリヤ人ひとりでした。

●質問を通して、イエス様のお気持を考えてみましょう。そして、恵みをあたたまえるように思いや弱い私たちですが、神様に「感謝」することを意識して、しつこいくらいにやってみませんか？すると、神様の恵みに気づき感謝があふれてきます。

中高科へのヒント

●考えてみよう

- 14節の主イエスの命令を聞いたとき、10人はどう思ったでしょうか。
- 10人が主イエスの命令のとおりにしたのはどうしてですか。
- サマリヤ人ひとりだけがイエスのもとに帰ってきたのはどうしてですか。
- 主イエスは帰ってきたひとりに「あなたの信仰があなたを救ったのだ」と言われましたが、これは何を意味していますか。

●自分にあてはめてみよう

- あなたが10人の立場であつたならば、主イエスの命令を聞いてどうしたでしょうか。また、いやされた後、どうしたでしょうか。
- あなたは祈りが聞かれたとき、主に賛美と感謝をささげていますか。
- あなたも、主の恵みや人の親切に対する感謝を忘れていませんか。
- あなたの信仰生活は、主イエスのもとに帰ってきたひとりのようですか、それとも他の九人のようですか。

●話し合ってみよう

- 感謝が乏しいのはどうしてでしょうか。また、感謝が乏しくなると、どうなるでしょうか。
- これまでの人生を振り返り、主の恵みや人の親切を一つ一つ思い起こしてみましよう。その中で最も感謝した体験を分かち合いましよう。

聖書 ルカ19・1～10
テーマ ザアカイ

序論

当時の取税人は、ローマ帝国に納める税金を同胞のユダヤ人から徴収し、時には幾分かを着服していた。当然自分の財産は増えるが、みんなからは嫌われることになる。今週の学びの主人公ザアカイは、その人取税人のかしらだったので、相当有能な人であり、また金持ちだったと思われる。18章で、主イエスは金持ちが神の国にはいることの難しさを語られた。しかし、人々にはできない事も、神にはできる（18・27）。主は、ザアカイに自分の罪を悟らせ、そこから救うために、彼の住むエリコの町を通られたのだ。

一、主と出会ったザアカイ

エリコの町に入るときに盲人をいやされた主は、△その町をお通りになられた▽。「通る」という語は4節にも用いられており、「通りすぎる」と訳したほうがより状況がよくわかる。主は、エルサレムに向かって進んでおられたからである（11節、28節参照）。しかし、足をとどめなければならぬ出来事がおこった。主のうわさを聞いていたザアカイが、△イエスがどんな人か見たいと思つて▽、いちじく桑の上から主を見下ろしていたのだ。

この時、ザアカイはただ有名な人を見たいからという単純な理由でそうしたのかもしれない。しかし主は、彼がどんな人物かを知っておられた。そして、△ザアカイよ、急いで下りてきなさい▽と

言われたのだ。主が、自分の名前を知っておられると思っていなかった彼は、びっくり仰天したに違いない。彼は先週学んだ病人のように、自分から叫び求めることはしなかった。しかし、主のほうに彼に声をかけられたのである。

二、主の愛を知ったザアカイ

ザアカイとは、「きよい人、義人」という意味の名前だ。多くの人から嫌われていたにもかかわらず、主は彼を「きよい人」と呼ばれた。それのみならず、△きよう、あなたの家に泊まることにしているから▽とも言われた。直訳すると、「あなたの家に泊まるべきだ」である。△背が低かった▽ザアカイは、幼少時代からみんなに馬鹿にされていたかもしれない。「なにこそ」と思つて、必死に努力してその地位を築いたのかもしれない。しかし、金持ちになつて広い家に住んでも、訪れてくれる人はわずかだった。そんな自分の家に、この有名なお方が泊まつてくださるとは、彼は△急いでおりてきて、ようこんでイエスを迎え入れた▽。しかし、その場にいた人々はこのような主の態度を理解することができず、△彼は罪人の家にはいつて客となった▽とつぶやいたのだ。

ザアカイは、自分が立派だから主がお泊りくださるのだ、とは夢にも思わなかっただろう。自分が悪い者であることは、十分承知していた。でもそんな自分を「きよい人」と呼んでくださり、泊まつてくださる。そこに、主イエスの愛を実感したのだ。自分の罪深さを知っている者こそ、主の愛の深さを理解することができるのである。

三、生まれ変わったザアカイ

多分、ザアカイの家での晩餐会の席上だろう。主は彼に何かをせよとは一言も言われていないが、彼のほうから、△わたしは誓つて自分の財産の半分を貧民に施します。また、もしだれから不正な取立てをしていましたら、それを四倍にして返します▽と宣言した。そのとおりしたなら、自分の財産がなくなることも覚悟の上だった。彼はそれまで、憎まれはしても愛されてはいなかった。富を得るために必死であっても、人に与えることなど考えもしなかった。しかし、愛されることの喜びを体験したとき、彼の心にも愛が芽生えた。彼は新しく生まれ変わったのだ。

ザアカイも△アブラハムの子▽であり、神の選びの民の一人である。しかし、彼はそれを自覚せず、神から離れて迷子になっていた。しかし主は、その△失われたものを尋ね出して救うため▽に、エリコに来られ、ザアカイの家に泊まれた。まさに△きよう、救がこの家にきた▽のだ。主はこの後、エルサレムに行かれる。それも△失われたものを尋ね出して救うため▽にほかならない。

結論

たとえ自分から求めない人であっても、主は愛しておられる。△自分のほうから近づいて出会つてくださるのだ。求めない人でも、主の愛がわかるなら、必ず変えられる。私たちの周囲にも△失われた人▽がいるだろう。私たちのほうから声をかけよう。その人が主と出会うきっかけを作ることとは、私たちの大きな責任である。

研究資料

(長田)

キリスト来臨の目的

福音書には、多くの人々がキリストに出会ったことが記されている。その出会いのすべては、キリストがこの世に来て下さったことによるものである。すなわち、神の御子が「神と等しくあること」を固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなしうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた（「ヨハネ」2:6、7）ゆえの出会いであった。

キリストは、罪人を招くために（マタイ9:13）、人々に仕えるために（マルコ10:45）、罪人を救うために（「イテモテ」1:15）、私たちに豊かな命を得させるために（ヨハネ10:10）、この世に来られた。すなわち、「失われたものを尋ね出して救うため」（10節）に来られたのである。

迷える羊を捜し求める羊飼いのことを語られた主は（マタイ18:12～14）、△自身そのような羊飼いとてこの世に来られ、多くの人々に出会い、彼らを救われた。また、現代に生きる私たちをも救つて下さるのである。

テキスト

19・1 エリコ エルサレムから27キロほどの古い歴史を持つ町。

2 ザアカイという名 「きよい人」「義人」を意味する。

取税人 ローマ帝国の税金を取り立てるための集金人。そのかしらであったザアカイは、帝国下で

はそれなりの立場にあったと言えるが、ユダヤ人同胞からは憎まれる立場にあった。

金持 その財産は、8節で言われているような不正による収入によるところも大きかったであろう。

3 どんな人か見たいと思つていた 彼がキリストに対してどのような関心を抱いたか、詳細を知ることができないが、後の展開を見るならば、それは好意的なものであり、かつ強い関心であった。背が低かったため、群衆にさえぎられて見ることができなかった 群衆にさえぎられたのは、群衆の間に意図的なものが働いた結果でもあろう。

4 いちじく桑の木に登った ザアカイのキリストに対する関心は、通り一遍のものではなかった。5 イエスは、その場所にいられたとき、上を見上げて 周囲の人々も、ザアカイ自身も予想しない出来事。

ザアカイよ 神的な知識によつてキリストは彼の名を呼ばれる。神が私たちの名を呼んで下さるところから、私たちに對する神のみわざが始まる（「イザヤ」43・1）。

急いで下りてきなさい ザアカイのキリストに対する思いの中には、遠くから観察しようとする気持ちも多分にあったことであろう。しかし、キリストは、その場所からおりてきて、更に近いキリストとの関係の中に入るよう招かれる。

きよう、あなたの家に泊まることにしているから ザアカイに對する人々の評価を△存知の上で、△あえて彼の家に泊まろうとするキリストのお言葉は、彼に對する愛以外の何物でもない。

7 彼は罪人の家にはいつて客となった 取税人が常に異邦人と接触していたことにより、彼らも

「罪人」と呼ばれたのであろう（ルカ5:30、15:1等）。このつぶやきには、罪人から遠ざかろうとする当時のユダヤ人のあり方がにじみ出ている。

それに対して、キリストの行動は、「罪人を招くため」（マタイ9:13）世に来られたことの当然の帰結であった。

8 立つて主に言った 立ち上がつて語ったことにも、彼の言葉に込められた思いが表れている。主よ、キリストに對するザアカイの見方は、この短い呼びかけの中に込められている。

自分の財産の半分を貧民に施します 自分の利益だけを求めてきた生き方との決別。

もしだれから不正な取立てをしていましたら、それを四倍にして返します 律法によれば、盗んだ羊を殺したり、売却したりしていた場合、四頭の羊をもつて償わなければならないかった。しかし、律法を知っていたからというより、彼の悔い改めの心の気持ちから自然に出た数字であったかもしれない。

9 きよう、救（い）がこの家にきた ザアカイの中に生まれてきた明確な悔い改めと、キリストに對する信仰が見られてのお言葉。救いは、真実な信仰に對して即刻与えられる神の賜物である。この人もアブラハムの子なのだから 彼の生活を見て「神の民」の枠の外にあるとしか見えなかった人々に對して、神の見方は異なっていることを指摘される。

10 人の子 キリスト△自分のこと。失われたものを尋ね出して救うため ザアカイとの出会いは、神のご計画の中にあつた出来事。

聖書 ルカ19・1-10

タイトル 急いで下りてきなさい

中心聖句 人の子がきたのは、失われたものを尋ね出して救うためである。

ルカ19・10

目標 失われたものを尋ねられるイエス様の愛を知ろう。

導入

迷子になったことのある人、泣いたり、叫んだりしましたか？ お父さんや、お母さんや、お家の人たちと出会ったときは何とも言えないくらい、まだ、涙がこぼれるくらいうれしかったでしょうね。今日は、そのような迷子を今も尋ねてください、救ってくださいイエス様にお会いした一人の人のことです。その人の名前はザアカイ。日本語では「清くん」という名前だったのです。

木に登ったザアカイ

木登りが大好きで遊んでいたのかな？ いいえ、実は深いわけがあったのです。ザアカイは取税人、しかも、そのお頭でした。じゃ、とても立派で、幸せだったのかしら？ いいえ、そうではなかったのです。その頃ユダヤの国は、大帝国ローマの支配の中でした。取税人たちは自分の仲間たちからも高い税金を取っていた上に、決められた以上のものは、自分のふところに入れていたので、お金はどうも貯まる一方、でもどんなにお金持ちに

なったとしても、みんなから嫌われて、誰も「ザアカイ」などと呼んでくれないザアカイの心の中は、寒い風が吹いているような淋しくつらいものでした。そして、自分ではもうどうしようもなくなっていました。ところが、ブッド・ニユース、イエス様が、ザアカイのいるエリコの町をお通りになると、ついに、その日がやってきました。ワイワイ、ガヤガヤ、たくさんの方がイエス様を歓迎しています。走り寄って、誰かの間から見ようとする、「ダメだよ」と、せっかく見ようとしてもイエス様を見ることができない。なぜって、ザアカイは、とても背が低かったし、それに人々は、「あのザアカイなんかイエス様を見させてはまるか」という気持ちだったのです。「負けるものか」と、ザアカイはふと頭を働かせて、近くのいちじく桑の木に上ると登りました。「ああ、イエス様」。見とれているザアカイの登っていた木のすぐ下に止まられて言われました、「ザアカイよ、急いで下りてきなさい。今日、あなたの家に泊まることにしているから。」ザ、ザ、ザアカイだって、「今まで「清くん」なんて呼ばれたことのない、ザアカイはビックリギョウテン。ころぶかと思うほどに一瞬の間に、

木から下りたザアカイ

背の低かったザアカイは、ますます腰を低くしてイエス様とお弟子さんたちを精一杯もてなしました。そして、何が起ったのでしょうか？ ザアカイ自身も驚きあるのみ、イエス様の前に立って言いました、「主よ、わたしは誓って自分の財産の半分を貧民に施します。また、もしだれから不正

な取立てをしていましたら、それを四倍にして返します」。ザアカイは、イエス様と出会って変えられたのです。心が生まれ変わったのです。もう誰からも愛されていないと思っていたザアカイは生まれ変わりました。背が低いから、お金持ちになつて人を見返してやろうと思ひ、取税人のお頭になったものの、淋しい心を抱いていた古いザアカイはいなくなりました。そうです、イエス様が言ってくれたように、「きょう、救いがこの家」にきた。この人もアブラハムの子なのだから」というザアカイの人生で最高の瞬間がおとすれたのです。それまで、ザアカイの心の中は自分のこと、まわりの人々のことだけが問題で、神様からは遠く離れた迷い子だったのです。でも、あの日、あの時、あの瞬間から変えられたザアカイとなりました。これこそ、キリストとの真の出会いなのです。

まとめ

迷子のザアカイを尋ね出し救ってくださったイエス様は、今も迷子を尋ね出し救ってくださいています。今日、私たちの心はどうでしょう？ 木に登っていたザアカイのように、迷子？ 神様から離れて、罪を犯したりしてしまふ存在？ 自分のことだけで一生懸命？ そんな私たちをも、イエス様は永遠の愛で愛してくださいます。「急いで下りてきなさい」と、声をかけて招いていてくださいます。罪と、高慢の木から急いで降りましょう。愛されていないんだと考えている木から急いで降りましょう。そして、私たちも今日、尊い救いに入れていただきますように。

ワーク A

話し方のヒント

●皆からさらわれていたザアカイさんは木の上からそっとイエス様を見ていました。イエス様のほうが、気がついて声を掛けてくださり、家に来てくださいました。うれしくてザアカイさんは今までの意地悪をやめ、皆にお金を返すことにしました。悪いことをしたからさらわれていると思っている人にも、イエス様のほうから来てくださり、信じるなら、神の子としてくださるのです。

●ワークについて
彩色して木を完成してください。

ワーク C

●人間は律法的、自分中心にものを感じ、考えがちです。「取税人は罪人だからダメ」「罪の女だからダメ」「私が気に入ったからOK」のように。これが人間の愛のスタイルです。

●しかし、イエス様は違います。イエス様は失われた罪人を探して、尋ねだして、名を呼んで、訪問して、宿泊して友となつてくださって、救い出してくださいるのです。

●イエス様は、ザアカイを一人の人間として、真正面から扱い、丸ごと受け入れてくださいました。この愛にとかされて、ザアカイは変わってしまったのです。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。

●質問2 イエス様と出会って、ザアカイは変えられました。その言葉の中に、悔い改めて方向転換したことがあらわれています。

●質問3 「きょう、救がこの家にきた」。これはザアカイの中に救いのわざがなされたことです。心の中にイエス・キリストを迎える、つまりイエス・キリストを罪からの救い主と信じ受け入れることが救いです。

ワーク D

●ザアカイと自分の共通点はあるでしょうか？ ザアカイの境遇や生き方を考えながら、共通点、相違点が見い出せるかも知れません。

●そのザアカイを他の人はどう見ているでしょうか？ 他人の冷ややかな目を感じないでしょうか？

●あなたは自身はザアカイをどう思いますか？

●そして、最後に、イエス様はザアカイをどう思っているでしょう。その様なことを考え、話し合ううちに、自分へのイエス様の思いが伝わってこないでしょうか？

中高校へのヒント

考えてみよう

1 主イエスに出会う前のザアカイはどのような生き方をしていたでしょうか。また、心の中はどうだったでしょうか。

2 主イエスから5節の言葉を聞いたときのザアカイの気持ちはどうだったでしょうか。

3 主イエスに出会った後のザアカイの生き方、心の中はどう変わったでしょうか。

4 「失われたもの」とは、どういう意味ですか。ザアカイが救われたのは何かをしたからですか。施しや弁償を実行したからですか。

●自分にあてはめてみよう

1 あなたもザアカイのように劣等感を抱いたり、ひとり寂しく悩んだりしたことがありますか。

2 「よろこんでイエスを迎え入れた」ザアカイのように、主イエスを心にお迎えしましたか。

●話し合ってみよう

1 主イエスが「人の子がきたのは…ためである」と言われた箇所を開き、来臨の目的について調べてみましょう（マタイ10・35、マルコ10・45、ルカ5・32、ヨハネ10・10他）。

2 罪を示されて人に謝罪したり、弁償したりした体験等、悔い改めの実を結んだ体験があれば、分かち合いましょう。

3 主イエスを信じる前と後とで、どのように変化したか、分かち合いましょう。

聖書 ルカ23・39～43
テーマ 十字架上の罪人

序論

単元「主と出会った人」の最後に取り上げるのは、主イエスと共に十字架につけられたふたりの罪人である。彼らはふたりとも主を目前に見ていた。しかし、ひとりとは本当の意味で主と出会ったのだが、もうひとは、そうではなかった。なぜそのような違いが生まれたのだろうか。これまでの学びも思い出して、3つの点で考えてみよう。

一、自分の罪を認めるか否か

ひとりの罪人は、あなたにはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」と叫んだ。直前の35節で、役人たちが、あなたが神のキリスト、選ばれた者であるなら、自分自身を救うがよい」と言ったことを聞いていたからだろうか。この罪人は、主をキリスト（救い主）と信じていたわけではなかったし、主だけが救われることを願っていたわけでもない。自分が苦しみから逃れたい一心で、こう叫んだだけのことである。自分が犯した罪のゆえに、このような刑に処せられていることをまったく認めていない。△われわれも救ってみよ」と言っているが、本当は「わたしを救ってみよ」で十分なのだ。それと対照的に、もうひとりの罪人は、△お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ」と、自分の罪を正直に認めている。

自分の罪を無視するなら、私たちは決して主とお会いすることはできない。これまで学んだ「主と出会った人」はみんな、自分が罪人であることを認めていた。そういう人々こそ、「打ちひしがれている者」なのである。

二、主イエスを神と認めるか否か

ただ、自分の苦しみを逃れたい者が、△あなたはキリストではないか」と言っても、そこに真実味はない。「苦しい時の神頼み」である。今も、どれほど多くの人々が、この罪人と同じように、自分の益のためだけに神を求めていることが。

もうひとりの罪人はそうではなかった。△おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか」と彼をたしなめた。自分の罪を認めただけでなく、この刑が神からのものであると受けとめていたのである。それだけではない。自分たちは罪のむくいを受けているのだが、△このかたは何も悪いことをしたのではない」と、主イエスには何の罪もないのに、十字架刑を受けていることをも認めている。さらに、△イエスよ。あなたが御国の権威をもっておいでになる時には」と、主が地上の国をはるかに超えた御国の権威をもっておられることさえも認めている。

主イエスが神としての権威を持つておられることを認める者は、主と出会うことができる。これまで学んだ人々は、主のみ言葉の権威、救いの権威、いやしの権威を認めていた。主を単なる歴史上の人間としてしか認めない人々は、主と出会うことはできない。

三、主と共にいるか否か

△あなたが御国の権威をもっておいでになる時には」と言った罪人は、厚かましくも、△わたしを思い出してください」と頼んだ。自分の罪を認めながらである。彼は、自分が罪人であっても、主は受け入れてくださると信じていた。この地上では刑場の露と消えても、御国においては主に思いついていただけると信じてそう願ったのだ。主はすぐに、△あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいる」と答えられた（パラダイスについては研究資料を参照のこと）。

ここで重要なのは△わたしと一緒に」という句である。主は、この罪人を思い出されるだけではない。一緒におられるのだ。しかも△きょう」と言われている。それが十字架上であらうと、あるいは御国であらうと、神の子イエスが、今日、自分と一緒にいてくださるという臨在の約束は、どれほどこの罪人を喜ばせたことであらうか。主と出会うとは、一度きりの経験ではない。永遠に続く主イエスとの交わりである。肉体的に一緒にいなくても、霊的に一緒にいることはできる。それが臨在信仰なのだ。

結論

神の子であるあなたが、こんな罪人の自分と出会うってくださり、一緒にいてくださるとは、まさに福音である。異邦人の百卒長も、罪の女も、マリヤも、いやされた病人も、ザアカイも、罪人も、みな主イエスと出会い、主と共にいることを喜んだ。私たちも、この喜びを経験しよう。

研究資料

(長田)

救いへの道

神は、御子キリストの十字架によって贖いを完成して下さった（ヨハネ19・30）。従って、私たちが救いに至るための条件は、極めて簡単なものであって、それは聖書において明確に記されている。「悔い改めて福音を信ぜよ」（マルコ1・15）、「神に対する悔改めと、わたしたちの主イエスに対する信仰」（使徒20・21）とあるように、罪を悔い改め、救い主キリストを信じることである。十字架上の犯罪者は、この救いの道を最短距離で進んだと言える。

① 罪の悔い改め まず、救いの条件の第一は、罪の悔い改めである（使徒2・38、17・30、ルカ24・47）。「悔い改め」と訳されるギリシャ語「メタノイア」は、心の転換を意味する言葉であって、悔い改めには、以下の要素が含まれている。

- a 認罪 まず、自分自身の内に罪があることを認めることである（1ヨハネ1・8）。
- b 罪への悲しみ 内なる罪を真実な心で悲しむことである（IIコリント7・10）。
- c 罪を離れる決心 罪との決別を願い、意志的に決心することである。悔い改めには、その結果として行動の変化が伴う（ルカ3・8）。
- d 罪の告白 以上のような心と態度で、自分の罪を神に言い表すことである（1ヨハネ1・9）。
- ② キリストへの信仰 しかしながら、人の決心や感情が救いをもたらすのではない。十字架上でな

された贖いのみわざを信仰によって受け入れることによって救われるのである（ガラテヤ2・16、エペソ2・8、9）。真実な悔い改めは、真実な信仰によって完成される。

信仰は知的要素を含んでいる。信じるためには、まず、み言葉によって救いの道を知ることが必要である（ローマ10・14～17）。しかし、信仰は、単に事実に対する知的同意でなく、全人格的なものであって、十字架にかかり、死んでよみがえられた神の御子に対する全人格的信頼を意味する。自らの永遠的救いのために、このお方に全面的に信頼し、お任せするのである。

テキスト

23・39 十字架 十字架刑は、死刑の方法として古代民族の間に広く普及していたが、最も忌まわしく、屈辱に満ちており、『絞首刑の方が磔刑（たづね）はよりつめの刑（はりつけの刑）よりも小さな刑罰である』とさえ言われた。（いのちのことば社『新聖書辞典』「十字架」の項より）

自分を救い、またわれわれも救ってみよ 十字架のもとで語られたあざけりの言葉（35節）に「われわれも救ってみよ」と付け加えている。これらのあざけりは、詩篇22・7、8に預言されている。40 もうひとりとはそれをたしなめて マタイ27・44等によれば、初めは彼も、もう一人の者と一緒になってキリストをあざけていた。しかし、やがてそれをたしなめるようになったのは、十字架上でキリストの祈り（34節）などの姿を通して、キリストに対する見方が変えられたためであらう。

神を恐れないのか この恐ろしい刑に処せられるだけの罪を犯し、その正当な報いを受けているにも関わらず、なお他者をあざけることしかしようとしないう態度を、「神を恐れない」としてたしなめている。

41 お互（い）は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ 彼の内に、罪の意識が起こっていたことがうかがえる。

しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない キリストに対する彼の見方の第一は、無実で、義なるお方であるということ（1ペテロ2・22）。42 あなたが御国の権威をもっておいでになる時には キリストに対する彼の見方の第二は、全地の王であられるということ（黙示録19・16）。

わたしを思い出してください ヘリクだった表現の中に、キリストに対する永遠的な救いに対する願いが言い表されている。

43 あなたはきょう、わたしと一緒にパラダイスにいます 犯罪者の言葉の中に、罪の悔い改めと、ご自身に対する信仰を見られたキリストは、彼に対して救いの宣言をされる。彼の願いは、再臨時の救いであったが、「きょう」と言われ、救いは永遠的なものであると同時に、即時のもの、現在から始まるものであることを明らかにされる。パラダイスは、キリストにある者が死後携え入れられる祝福された場所（黙示録2・7等）であり、その祝福の最大のものは、キリストが共にいて下さることである。その意味で天国と言い換えてもよい。

聖書 ルカ23・39～43

タイトル どっちの側？

中心聖句 あなたはきょう、わたしと一緒に

バラダイスにいます。

ルカ23・43

目標 罪を認めて、真に救い主キリストにお会いする。

導入

はじめに質問です。この世の中すべての人々を2つに分けるとすると、どんな分け方があるでしょう？ そつ、「男と女」これで真つ二つに分けられますね。中間なんてありません。それともうひとつ、とっても大切で厳粛な分け方があるので。それがきょうの十字架の場面でのことです。

イエス様の十字架を真ん中にして、右と左とで真つ二つに分かれるのです。さあ、それはどういうわけで、そのあととは一体どうなっていくのでしょうか。イエス様が十字架につけられたとき、もう2人の人たちもつけられました。その人たちは犯罪人だったのです。この2人の人の態度のように世界は真つ二つに分かれるのです。

ひとりの犯罪人

イエス様の十字架のもとには、醜い人間の姿がうず巻いていました。役人たちはあざ笑いながら言いました。「彼は他人を救った。もし彼が神のキ

リスト、選ばれた者であるなら、自分自身を救うがよい」。兵卒たちも、イエス様をののしりました。「あなたがユダヤ人の王なら、自分を救いなさい」。そんな人々のあざけりやのしりの声に含ませて、ひとりの犯罪人もイエス様の悪口を言いつづけたのでした。「あなたはキリストではないか。それなら、自分を救い、またわれわれも救ってみよ」。本当はイエス様をキリスト、救い主と知っていないかったのです。そして「われわれも救ってみよ」と叫んでも、「わたしを救え」と叫んでいるも同然なのです。自分がどうして十字架刑を受けているのかも考えようとせず、自分の罪がどんなに重いものであるかも認めようともしていません。

もうひとりの犯罪人

この人もはじめはイエス様の向こうにいる犯罪人と一緒にあって、イエス様をあざけつたりののしつたりしていたのですが、心が変わられたのです。きつとイエス様が十字架にかけられて最初に祈られた気高い言葉を聞いたからではないでしょうか。みんなもよく知っている、「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」。この祈りの言葉に心動かされたにちがいありません。そこで、このもうひとりの犯罪人には、いろんなことが見えてきたのでした。だからこのようにたしなめて言ったのです。「おまえは同じ刑を受けていながら、神を恐れないのか、お互は自分のやった事のむくいを受けているのだから、こうなったのは当然だ。しかし、このかたは何も悪いことをしたのではない」。この

犯罪人の方は、自分の犯した罪の重大さを認め、こうして刑にかけられているのは当然としています。それと共に、イエス様をキリスト、救い主として仰いで言いました。「イエスよ、あなたが御国の権威をもっておいでになる時には、わたしを思い出してください」と。こうして、地上のこの世の国の権威をはるかに越えた、神の権威をお持ちのイエス様を認めて「わたしを思い出してください」と言った犯罪人に、イエス様は驚くような約束のお言葉をかけてくださいました。「よく言っておくが、あなたはきょう、わたしと一緒にバラダイスにいますであろう」と。やがての時ではなく『きょう、今』『わたしと一緒に』『バラダイスに、天国にいます』と力強く、このもうひとりの犯罪人は死を目の前にして、永遠の救いにあずかりました。危機一髪でした！

まとめ

これは、心もからだも引き裂かれるような苦しい、苦しい十字架刑のまっただ中のできことです。イエス様は罪のない神様の子、わたしに代わって十字架にかかってくださった、罪を赦してください、救い主、そして、やがてこの世界においてくださって、全世界を支配されるお方と信じて仰ぎつづける者はイエス様と一緒に、『きょう』『主と共に』『バラダイスに』と約束されています。信じるだけです。このもうひとりの犯罪人も十字架に釘付けられていて何もできません。しかし、ただ信じることはできました！ さあ、心にたすねてみて下さい。私は、ぼくは今日どっちの側にいる？

ワーク A

話し方のヒント

イエス様が十字架にかけられたとき、両側に2人の人もかけられていました。1人は「おい、自分を救って、おれたちも助けてみる」と言いましたが、もう1人は「おれたちは悪いことをしたのだから十字架にかけられるのも当然だ。イエス様、私も天国に行けるようにしてください」とお願いしました。そしてイエス様から「私はあなたとずっと一緒にいる」と言われ、天国の約束をもらいました。どんなに嬉しかったことでしょう。

ワークについて

「永遠の命」を貼り、カードを完成してください。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。

●質問2 救われた犯罪人は、自分の罪を認め、イエス様が罪からの救い主であることを信じたので、バラダイスに入る約束をいただきました。

●質問3 特に、はっきりしない生徒は、犯罪人が、ただ信仰によって救われたことを理解させてあげましょう。そして、いっしょに祈ってあげるとよいと思います。

ワーク C

●主イエスの十字架のお姿や言葉は、人間の常識をはるかに超えていて、理解しがたいものです。むしろ、周囲の兵卒や犯罪人の言った言葉のほうに、肉の思い、罪人の考えとして、理解しやすい内容です。神の尊い犠牲、恵みに感謝しましょう。

●「スタート」から始め、この場面の言葉を当てはめながらコマを進めていきます。行く先の分かれ目となる言葉の内容のポイントは、①自分の罪を認めているか否か、②主イエスを救い主と認めているか否か、の二つです。

●この場面から、人はただ信仰によって即刻に救われることがわかります。教会に通っている事や、洗礼式、奉仕することによって救われるのではない、ということです。

ワーク D

●いよいよイエス様に出会った人のシリーズも最後となりました。イエス様が2人の人に出会った場所は、十字架の上でした。イエス様は死の直前まで、人間の永遠に関わる事柄に関心をもって、人と関わられるお方であることがわかります。

●「どう思いますか？」という質問に対して、一人一人自由に思いを語り合しましょう。誰の話にも耳を傾けましょう。

●そのうちの一人は最後の最後に3つのことをして、天国の保証をいただきました。

●来週は食パン等素朴なパンを用意してください。

中高校へのポイント

●考えてみよう

1 最初主イエスをののしっていた二人の犯罪人ですが（マタイ27・44）、途中からひとりとは態度を変えました。どうしてでしょうか。

2 犯罪人のひとは、悔い改めの実を結びことも、バプテスマを受けることもできませんでしたが、救われました。どうしてですか。

3 「何も悪いことをしたのではない」主イエスが十字架につけられたのはどうしてですか。

●自分にあてはめてみよう

1 あなたの主イエスに対する態度は、二人の犯罪人のうちのどちらですか。

2 十字架につけられた主イエスを、あなたはどのように思いますか。

3 あなたは信仰の決断を先延ばしにしていますか。先延ばしにする理由は何ですか。

4 あなたは天国に行ける確信がありますか。救いの約束のみ言葉をいただきましたか。

●話し合ってみよう

1 元気な時は自由に生き、死の間際に信じればよいと考える人がいますが、どう思いますか。

2 若い時に救われることは、どういう点ですばらしいと思いますか。

3 救いに必要な条件は何ですか。バプテスマは何のために受けるのでしょうか。

4 どのようにして教会に来るようになり、悔い改めと信仰に導かれたか、分かち合いましょう。

聖書 ヨハネ6・22～40
テーマ 命のパン

序論

今週から6週間にわたり、ヨハネ福音書の中に何度も現れる「わたしはくである」という箇所を学ぶ。これは、ギリシャ語では「エゴ・エイミ」と書かれており、本来、神性を示す表現なのである。この学びによって、主イエスがどういうお方であるか、より明確に理解できるに違いない。

今週のテキストは、主が5つのパンで5千人以上の人々を養われた後の記事である。この奇跡を見た群衆は、主を王にしようとした(15節)。パンを何倍にもできる人物を王にするなら、この国の食糧問題はきれいに解決すると思っただろう。

一、朽ちない食物

主は、群衆の考えを知っておられたので、夜の間にカペナウムに戻られたのだが、群衆はそのあとを追いかけてきた。そこまで熱心に主を求めていた彼らに、主は、**「あなたがたがわたしを尋ねてきているのは、しるしを見たためではなく、パンを食べて満腹したからである」**とおっしゃった。彼らの動機を見抜いておられたのだ。さらに**「朽ちる食物のためではなく、永遠の命に至る朽ちない食物のために働くがよい」**と言われ、朽ちない食物こそ、本当に求めるべきものであることを示された。

当時、飢えに苦しむ人々が多数いた。確かに主は、そのことに無関心ではおられなかった。しか

し、主の第一の使命は、決して食糧問題を解決することではない。食糧は朽ちるものであり、有限なものである。食べてもまた飢える。本当に必要なのは、食べた後も飢えることのない食物、つまり**「朽ちない食物」**なのだ。

二、与えられる食物

続いて主は、その食物は**「人の子があなたがたに与えるものである」**と仰せられたが、人々は、それを得るために**「人の子は何かをしたらよいのでしょ」**と尋ねた。自分の力で獲得しなくてはならないものだと思っただろう。朽ちる食物ならそうだが、朽ちない食物はそうでない。それは**「人の子がつかわされた者」**(すなわち主イエス)を信じることである。しかし、人々は**「あなたを信じるために、どんなしるしを行って下さいませか」**と再び尋ねた。彼らにとっては、5千人の給食もしるしではなかった。モーセがしたように、イスラエルの民全体を40年間にわたって養うマナを与えてこそ、本当のしるしだと言っているのである。そんな彼らに、主は**「天からのまことのパンをあなたがたに与えるのは、わたしの父なのである」**と答えられた。

朽ちない食物は、この地上で人間が生み出すものではない。あくまでも、父なる神から与えられるものである。マナも本当はモーセが与えたのではない。神が与えてくださったのだ。しかし、マナはこの時代にはもつなくなっていた。しかし、父なる神は、朽ちる食物だったマナ以上の朽ちない食物を与えてくださった。それが、**「人の子がつかわされた者」**、すなわち主イエスなのである。

三、永遠の命を与える食物

人々はやっと、**「主よ。そのパンをいつもわたしたちに下さい」**と言った。ちょうど、サマリヤの女が**「人の子をわたしに下さい」**と言ったように(4・15)。そこで主は、**「あなたがたが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない」**と仰せられた。自分の必要を知り、主のもとに近づくときに、はじめて主は、**「ご自身を示される」**。パンである主を食べるとは、主が**「天から下ってきて、この世に命を与える」**お方だと信じることである。そして、主のもとに来ることだ。主は、**「あなたがたに来る者を決して拒みはしない」**と言われる。主は、父なる神のみこころを行うためにこの世においでくださった。そして**「父のみこころは、子を見て信じる者が、ことごとく永遠の命を得ることなのである」**。つまり、主イエスは**「この地上の命を保つためのパンではなく、永遠の命を与えるパンにほかならない。この地上で生きる数十年のためのパンと、永遠の命のためのパンと、はたしてどちらが重要だろうか」**。

結論

命のパンをいただくのは、決して難しいことではない。ただ、イエスのもとに行けばいいのだ。主は、**「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとにきなさい」**(マタイ11・28)と言っておられる。すでに主を信じている者は、日々主のみ言葉をパンとして受け取ろう。また、聖餐式のパンは、命のパンである主のからだの象徴なのだ。

研究資料

(石田)

テキスト

27 朽ちる食物 主はこの日の前日、5千人にパンと魚を与える奇跡をされた。これに狂喜した群衆は、主をかついで主にしよとした(15)。彼らは主にも奇跡をしてみようことになって、食べるのに困らないようにしてもらおうと考えたのである。しかし、主はこれを断固拒否して言われたのが27節の言葉である。主の奇跡は、群衆の飢えを満たすことが目的ではなく、その奥義を悟らせるためのしるしであった。主は、この世のいかなる富や快楽も人間の霊的な飢えを満たすことはできないことを前提にしておられる。イザヤも言っている**「なぜ、あなたがたは…飽きることもできぬもののために労するのか」**(55・2)。神だけが、私たちの魂の飢えを真に満たすことができる。なぜなら神が私たちの魂に、**「ご自分を求める飢えを置いておかれたからである。父なる神は、人の子にそれをゆだねられた。主は人間に永遠の命を与えるため、父なる神より遣わされたことを明らかにしておられる」**。

28 神のわざを行うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか 人間には何か良いことをしなければ神を喜ばせることができない、あるいは自分の努力でよいわざに励んで神の祝福を受けたい、という考えが染み付いている。彼らの反応は、そのことをよく表している。

29 神がつかわされた者を信じるのが、神のわざである そのような行為義認に立つ人々に対し

て主は、**「ご自分を神の子と信じるこそが、神のわざである」と**言っておられる。救われたことへの感謝と、聖霊への信頼があつてはじめて、神に喜ばれるよいわざを行うことができる。

30 わたしたちが見てあなたを信じるために、どんなしるしを行って下さいませか 群衆の求めたしるしとは、主イエスが救い主であることをあらわす奇跡のことである。彼らが5千人を養うというめざましいしるしを目の当たりにしながら、なおしるしを求めたということは、これ以上の何を見てもイエスを救い主として信じようとしな心のかたくなさを表している(36)。

31 『天よりのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです 彼らはみ言葉を盾にして、モーセのようにマナをふらすことを主イエスに要求している。

32 モーセではない…わたしの父なのである 荒野にマナをふらせたのはモーセに力があつたからではなく、全く父なる神のみわざであった。5千人をパンで養ったのも同じ神のお働きであった。33 神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与える エジプト脱出後の荒野におられたマナは、民の肉体的命は養ったが、魂の命までを養うことはできなかった(49)。マナは神のパンそのものではなく、そのひな形であった。しかし、主は信じる者の魂を養う**「天からのまことのパン」**であると宣言しておられる(47)。5千人を養った奇跡も、このメッセージの導入であつたと言える。

34 主よ、そのパンをいつもわたしに下さい この願いは、サマリヤの女が渴くことがないという奇蹟の水を求めた願いと同じである(ヨハネ4・

15)。群衆が主イエスを求めた動機は、やはり生活苦の解消という現実問題に釘づけられていた。結局、彼らの心の目は開かれず、多くの弟子たちも主のもとを去って行った(66)。

35 わたしが命のパンである これはヨハネによる福音書に出てくる**「わたしはくである」**という7つの表現の第一番目である。命(ソイー)は、神ご自身の命を表す言葉である。他に命を意味する言葉では**「ヒオス」**があるが、これは自然のままの肉体的命のことであつて、霊の命、永遠の命を表す場合には用いられない。ヨハネによる福音書では**「命のパン」**のほかに、**「生ける水(命の水)」**(4・10)、**「永遠の命の言」**(6・68)、**「命の光」**(8・12)、**「永遠の命である命令」**(12・50)という具合にソイーが用いられている。主イエスこそが、人の霊的な飢えを永続的に満たすことのできる命のパンである。同じように4章では、主がサマリヤの女に、**「ご自分こそが人の霊的な渇きをいやす生ける水であることをあらわされた。決して飢えることがなく…かわくことがない。主はまことのパンとして、人間の霊的な最深欲求を満たして下さい」**。39 終りの日によみがえらせることである 命のパンである主イエスを食べる(信じる、信頼する)ことによって、神との命の交わりに入れられるので、その関係は肉体的死によっても絶たれることはない。主はからだの復活を保証しておられる。永遠の命は信じた時に与えられているが、終りの日には完全な形で現れる。現代的でもあり、終末的でもある。

聖書 ヨハネ6・22〜40
タイトル 神のパン
中心聖句 わたしが命のパンである。
ヨハネ6・35
目標 天よりの神のパンであるイエスを信じて永遠の命を得る。

導入

これまでずっとイエス様に出会った人たちのことを見てきました。みんな本当にイエス様にお会いしてよかった／と思っただけでした。私たちもそう思いましたよね。そして、あなたもイエス様に出会ったかしら？ これからしばらく、イエス様がどんなお方なのか、もっともっとよく知ることが出来る学びです。イエス様が、「わたしは〇〇である」と、自己紹介をしてくださるのです。イエス様のことが大好きな私たちには、とても楽しみです。さあ、最初の自己紹介は何でしょう？

なくなるパン

今日のみ言葉で、イエス様は「わたしが命のパンである」と言っておられます。それでは、その前に『パン』について考えてみましょう。パンの大好きな人／ハリー、パン食べ放題というお店がありますよ。パンの大好きな人には、たまらない魅力ですね。焼きたてのおいしいパンを10種類以上も食べられるのですから、どんな種類のパン

ンがある？ アンパンマン、ああこの中にもいろんなパンが登場しますよね。ここでは、人々はもう一つの種類のパンのことを言っています。そのパンのお名前は「マナ」。あまり聞いたことない？ それはすいぶん昔だったからかも。イスラエルの人たちがモーセに率いられて荒野を旅していた40年の間、毎朝、毎朝、やむことなく天からのパンとして、神様が与えてくださったパンなのです。でも、このパンを食べた人たちは荒野で死んでしまいました。そして、今私たちが食べているパン、どんなにおいしいパンでもなくなってしまうし、それを食べる私たちもいつか必ず死んでしまいます。じゃ、パンじゃなくて、ごはんとか肉とか野菜とかは？ イエス様がパンと言われるときは、身体のための食物全部のことを言っておられるのです。どこかになくならないパンはないのかな、どこかに死んでしまわない命はないのかな。

なくなるパン

あるのです。「わたしが命のパンである」と言われるイエス様こそ、決してなくならないパンです。天から下ってきたパン、神からのパン、そして、この世に命を与えるパンなのです。そして、今日のみ言葉の続きを見ると、「わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない」とあります。イエス様のもとへ、誰でも、いつでも、どんな時でも行くな、心に満足が与えられます。イエス様を信じるならば、もう心が渇くことなく、いつも潤されていることができます。そして、決して死なない命、永遠の命をいただけるのです。なくなるパン

で養われるこの身体はいつか必ず死ぬ時がきます。でも、イエス様を信じる人は、イエス様が再び来られるときによみがえらされて、永遠に神様と一緒に生き続けるのです。何という約束でしょうね、イエス様は、マタイ4・4でこう言われます。『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある。イエス様を信じて永遠の命をいただいた人は、毎日のパンとして神様のみ言葉を食べて成長し、導かれ続けるのです。

例話

アメリカ第16代大統領リンカーンのお母さんは、彼が9歳の時、愛するイエス様のもとに召されていきました。死ぬ前に、枕元に彼を呼んで、「エブ（アブラハム・リンカーンの愛称）、ここにいらっしやい。あなたに母は広い土地も、多くの財産もあげられないけれど、あなたはこの一冊の聖書を毎日読んで、神様と人のお役に立つ人になりなさい」と言いました。彼にとって一番大切なのは「命を与える神のパン」だと、お母さんはよくよく分かっていたのだそうです。リンカーンはお母さんの遺言どおりに実行し、立派なクリスチャンとなり、大統領になりました。それだけではなく、鎖につながれて、地上に何の望みもなかった天の御国をのみ仰いでいた多くの奴隷たちを解放するという、かけがえのない、朽ちない食物のために働きました。私たちも毎日『神のパン』を食べて命を得、神様の働きをしましょう。

ワーク A

●2月15日〜3月7日の聖句―ヨハネ6・35

話し方のヒント

●どんなにおいしい物もいつかはなくなります。でも、なくならない食べ物があることをイエス様は教えてくださいました。「私が命のパンである」と言われるイエス様を信じた人には、永遠の命が与えられます。また聖書の言葉が毎日の心の栄養となります。いつかはなくなる食べ物のことを心配するのではなく、いつも聖書の言葉を守り、天国にいけるよう祈りましょう。

ワークについて

彩色してポストを完成してください。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。
●質問2 神が与えてくださった命のパンはイエス・キリストであり、決してなくなることなく、永遠の命を与えるものです。
●質問3 命のパンを食べるとは、イエス・キリストを信じることであり、また、み言葉に聴き従うことです（マタイ4・4参照）。

ワーク C

●第1問 「命のパン」と書き入れます。

●第2問 時間があれば、聖書の中に書かれている3種類のパンを、聖書を開いて確認します。「マナ」は、出エジプト16章、五千人の給食の時のパンは、ヨハネ6・1〜13です。命のパンであるイエス様御自身については、本日箇所です。
●第3問 「パンである主を食べる」とは、主が天から下ってきて、この世に命を与えてくださるお方だと信じることです。

●第4問 今後、この命のパンをいただき続けるということは、主を信じる信仰とともに、主のみ言葉のパンである聖書を毎日読み親しみ、そこから養いと導きをいただくということです。（マタイ4・4）

ワーク D

●今日から6週間にわたって、イエス様の自己紹介シリーズが始まります。まず最初は、「命のパン」であるイエス様です。
●先週の予告のように、食パン等、素朴なパンを用意してください。
●マタイ26章26節ではイエス様が弟子たちにパンをさいて、分け与えられる記事があります。そのイエス様を思い起こし皆で分け合って食べましょう。

●次に質問に答えましょう。
●毎日のパンである、神様のみ言葉を読んで、聴き従う歩みをいたしましょう。
●来週はお菓子を用意してください。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 群衆が「イエスを探ねてカペナウムに行った」のは何のためですか。
2 ヨハネが、主イエスのなさった奇跡を「しるし」と呼ぶのはどうしてですか。

3 「朽ちる食物」と「朽ちない食物」の特徴を比較してみよう。
4 「わたしの父のみこころ」とは何ですか。そのために、主イエスは何をされましたか。

5 命のパンを食べるとは、具体的にどうすることですか。また、命のパンを食べた者には、どのような約束がありますか。

●自分にあてはめてみよう
1 あなたは今、生きることに疲れを感じたり、心の渇きを覚えたりしていませんか。

2 群衆同様、あなたも自分の欲望を満たすために主イエスに近づこうとしていませんか。
3 あなたは、「わたしが命のパンである」と言われる主イエスを信じ受け入れましたか。

●話し合ってみよう
1 人生に疲れを感じるのはどうしてでしょうか。どうしたら本当に満足のか人生を送ることができるでしょうか。

2 私たちは何のために学び、何のために働くのでしょうか。
3 主イエスを信じることによって、心の渇きがいやされた体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ヨハネ10・1～18
テーマ 門・羊飼

序論

今週の箇所も、直前の出来事と関連がある。主イエスは安息日に一人の盲人の目を見えるようにされた。それがきっかけで、パリサイ人たちはこの盲人を会堂から追い出した。つまり村八分にしたのである。そんなパリサイ人を前にして（弟子たちもいただろうが）、主は「自分が羊の囲いの門であり、また良い羊飼であること」を示された。

一、命に導く門

主は6節までで、当時の羊の飼い方を彼らに話しておられる。それは「比喩」であって、これから説こうとする真理の備えであった。でもパリサイ人たちは、「自分たちにお話しになっているの何のこたか、わからなかった」。彼らの霊的高慢が、彼らを盲目にしていたのだ（9・41）。

まず主は、「わたしは羊の門である」と言われた。風間は放牧されている羊であるが、夜になると門を通して囲いの中にはいる。この囲いの中にいるなら安全なのだ。「わたしをとおってはいはる者は救われ」と言われているように、この囲いの中にこそ、永遠の命がある。バックストンは「ブル9・12を引用して、「羊は如何なる門に由て天国に入りますかならば主の血の門を通らなければなりません。…此門は即ち主イエスの血です」と説明する（『ヨハネ伝講義』183頁）。私たちは主の十字架の贖いを信じて命を得たのである。

二、命を養う羊飼

また主は、「わたしはよい羊飼である」ともおっしゃった。羊飼いは「自分の羊の名をよんで連れ出す。自分の羊をみな出してしまつと、彼は羊の先頭に立つて行く。羊はその声を知っているの、彼について行くのである」。主は、私たちに命を与えられるばかりではない。その命がさらに豊かにされるために、私たちの名をよんで連れ出し、牧草のある所に導いてくださる。つまり、私たちと日々親しい関係を持ち、み言葉の糧をもつて、霊的に成長させてくださるのだ。主がこの世に來られたのは、まさに私たち「羊」に命を下させ、豊かに得させるためである。

しかし、過去のイスラエルには悪い羊飼が多かった。エゼキエル34・8には、神の嘆きが次のように記されている。「わが羊はかすめられ、わが羊は野のもろもの獣のえじきとなっているが、その牧者はいない。わが牧者はわが羊を尋ねない。牧者は自身を養うが、わが羊を養わない」。主イエスの時代においては、パリサイ人たちがそのような牧者だった。彼らは「盗人であり、強盗である」。彼らは、主イエスを救い主と認めない者であり、八門からでなく、ほかの所からのりこえて来る者」だった。

三、命を捨てる主イエス

さらに主は、「よい羊飼いは、羊のために命を捨てる」と仰せられた。羊飼いと違って、「羊が自分のものでもない雇人は、おおかみが来るのを見ると、羊を捨てて逃げ去る」。イスラエルにいたのは、たとえ強盗や盗人でなくても、この雇人

のような者たちばかりだった。本当に羊を愛し、羊のために命を捨てるような羊飼いがいなかった。それゆえ、神はエゼキエルをとおしてこう言われた。「わたしは、わたしみずからわが羊を尋ねて、これを捜し出す。…わたしは彼らをもろもの民の中から導き出し、もろもの国から集めて、彼らの国に携え入れ、…これを養う」（34・11、13）。主イエスは、この預言を成就するためにこの世においてになった。そして、サタンのえじきとなっている人々を救うために、命を捨ててくださったのだ。それは、イスラエル人だけでなく、全人類の救いのためである。「わたしはまた、この囲いにいない他の羊がある。わたしは彼らをも導かねばならない」との言葉からそれがわかる。主が命を捨ててくださったのは、羊をよく知り、その羊を愛されているからである。愛のゆえに、「自分からそれを捨て」、しかも「命を捨てるのは、それを再び得るためである」と言われる。ここには十字架と復活の奥義が示されている。

結論

私たちは、自分がこれほどまで主イエスに愛されていることを知っているか。どんなに弱い羊でも、主が門であり、羊飼いであることを信じるとき、永遠の命にあずかれる。この恵みに感謝すると同時に、私たちも主に倣おう。教会学校の子どもたちを、自分に委ねられた羊であると受け取り、自分の命を捨てる覚悟で彼らを愛していこう。捨てるなら、再び得ることができるからである。

研究資料

(石田)

テキスト

1 よくよくあなたがたに言っておく… 本章の「よい羊飼」の比喩は、文脈としては直前のパリサイ人に向けてなされている。彼らは信仰者として民衆の指導者（羊飼）となるべきであったが、盲人の目を開いた主イエスを救い主として信じることができなかった。それどころか目の開かれた盲人を共同体から追放した（9・34）。この出来事一つを取り上げてみても、彼らが人々の霊的指導者にはなりえないことがはっきりした。彼らはイエスから「盗人であり、強盗である」と言われている（1）。そこで真の指導者は誰か、どういうものかというテーマで本章が展開する。ここで取り上げられている羊飼いと羊の関係は、旧約聖書では神と神の民との関係としてたびたび用いられている（詩篇23・1、77・20、イザヤ40・11など）。題材としても生活に身近なものであった。

7 わたしは羊の門である 暖かい時期、羊は野原に放牧され、夜には屋外の囲いに集められた。その入り口には扉はなく、羊飼いがそこへ横になり、体を張って羊の門となった。

9 わたしは門である。わたしをとおってはいはる者は救われ… 人は主イエスという救いの門をとおることによってのみ、救われることができる。主は命に至る唯一の道である（ヨハネ14・6）。また、十字架で成し遂げられた主の贖いを信じることによってのみ、神に近づくことができる（ヘブル10・20）。まだ出入りし、牧草にありつくであら

う 羊飼いの導きによって、羊は門を安全に出入りすることができる。羊飼いのこまやかな配慮がなければ、安全で健康な生活をおくることができない。「出入りする」という言い回しは、旧約聖書では指導者が国を外敵から守って、民に安全な生活を保障することを表した（民数記27・17）。

10 わたしがきたのは、羊に命を得させ、豊かに得させるため 主の來臨の目的が明言されている。この命（ソエー）は、霊の命、永遠の命を指す（28）。豊かに（ベリッソフ）の原意は、あふれるばかりの、あり余るほどのという意味である。主が信じる者に与える命の豊かさは、地上で極めつくすことができない。

11 わたしはよい羊飼である（ホ・ポイメン・ホ・カロス） よい（カロス）という言葉には、単に職務上優れているというだけでなく、人をひきつける優しさを持っているという意味合いがある。

よい羊飼いは、羊のために命を捨てる（この命）（フシケ）は、霊的命ではなく、肉体の命のことである（15、17、24）。捨てる（ティセーミ）の直訳は「危険を冒す」である。羊飼いは群れの羊を預かる身として所有者に対する責任があった。羊がいなくなつて見つからなかったら、それを償わなければならぬ。けものには裂き殺されたら、耳や足を取り返して、その証拠を示さなければならぬ。強盗や野獣が羊を襲ってきたら、命がけで守らなければならない。時には本当に命を落とすこともあった。主は私たちを救うために進んでご自分をとの供えものとし、あがないとしてご自分の命を差し出して下さった（イザヤ53・10、マ

ルコ10・45）。主は単に危険を冒すだけでなく、文字どおり命を捨てて下さった驚くべき羊飼いである。

12 羊飼いでなく、羊が自分のものでもない雇人 よい羊飼に対して、ここではにせの羊飼について言及されている。危険に出くわすと、命をかけて羊を守るどころか、まさきに命からがら逃げ出してしまふ。彼は報酬が自当で、羊の命への責任感がない。これは主が「わが牧場の羊を滅ぼし散らす牧者」と言われ（エシマヤ23・1）、「自分自身を養うイスラエルの牧者」（エゼキエル34・2）と非難された指導者のことである。

14 わたしの羊を知り、わたしの羊はまた、わたしを知っている 4、5節の比喩がここで解き明かされている。それぞれの羊にはその特徴をあらわす名前がつけられていて、羊飼いはその名前で個々の羊を呼ぶ。羊は羊飼いの声を聞き分けることができるので、別の人にはついて行かない。

15 父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである 主はご自分が神の子として、神と親密な交わりのあることを明らかにしておられる。

17 それ（命）を再び得る これは死人の中から復活することを意味している。主イエスにとって十字架の死と復活は織り込み済みであった。

18 わたしが自分からそれ（命）を捨てるのである 11節の意味が深められている。主は十字架の死に追い込まれたのではなく、父の御旨に従って、ご自分から十字架を選び取られた。避けようのない苦難ではなく、避けようと思えば避けることのできた道であった。

聖書 ヨハネ10・1〜18
タイトル 羊飼いの愛
中心聖句 わたしはよい羊飼いである。よい羊飼いは羊のために命を捨てる。
ヨハネ10・11
目標 よい羊飼いを感謝し、豊かな命を与えられて、従っていこう。

導入

皆さんのお家には、ペットがいますか？どんなペットを飼っているのかな？猫、犬、うさぎ、カメ、ハムスター（カワイイね）、中にはピラニア、もしかして、ヘビ、名前がついてますか？黒い猫だったら「クロ」とか。長い間一緒に暮らしていると、かわいくって仕方がありませんね。一緒に食べたり、遊んだり、寝たりして、かわいがられるペットは幸せものです。飼い主の気持ち、よくわかりますね。実は、今日のイエス様の自己紹介は、「わたしはよい羊飼いである」なのです。そうか、イエス様も羊を飼っていたのかって！ユダヤの国には沢山の羊と、羊飼いたちがいました。ちょうどそのように、羊は私たちで、イエス様が羊飼いなのです。イエス様はどんな羊飼いなのでしょうか？

導いてくださる羊飼

日本ではあまり羊や羊の群、羊飼いを見かけないかもしれませんが、聖書に記されているユダヤ

の国、イエス様の時代には沢山の羊や羊飼いがいたので、イエス様はその人たちによくわかるようにお話されたのです。羊という動物は、とても弱い生き物で、ゆっくりしか動けないし、どうも目がありよく見えないようです。だから、羊はどこへ行ってよいかわからず、迷いやすいのです。羊飼いがいなければ羊はすぐにも迷い、獣のえじきになって死んでしまいます。羊飼いは、羊一匹一匹の名前を呼んで連れ出し、おいしい草のある所へ連れて行って養います。羊がみんな囲いから出てくると、今度は羊の先頭に立って導きます。羊飼いの声をよく聞き慣れているので、羊はみんな羊飼について行って、おいしい牧草や水にありつくことができるのです。幸せですね。さあ、イエス様は私の羊飼いです。私もこの先どうなるのか、明日のことだってわかりません。一体どの道を行けばいいのか、一回きりの繰り返せない一生を何をすれば悔いなく生きることができのか、わからない私たちです。そういう私たちのために、イエス様という羊飼いがおられ、聖書という牧草があるのです。私たちも毎週教会でイエス様の導きの声を聞き、毎日聖書を読んで導いていただいて、正しい道を歩みましょう。

命をくださる羊飼

「よい羊飼いは羊のために命を捨てる」とあるように、羊を愛する羊飼いは、その羊が危険な目に合うとき、狼がやってきて殺そうとするとき、命がけで戦い守ります。必死で戦い、傷ついてもひとりで逃げ帰らないで、羊の群を囲いの中まで連れ帰り、そこで自分は出血多量で死んだ羊飼

もあると聞いたことがあります。心熱くなる羊飼いの愛ですね。

私たちのよい羊飼、イエス様はどうでしょう？私たち羊は、迷子の羊のように神様に背を向けて神様から離れ、神様の言われることよりも、自分勝手なやりたいことをする声を聞き、心は暗く、したくない悪いことをし、罪に罪を重ねて、やがては永遠の滅びに行く方向へひたすら歩んでいますが、よい羊飼いなるイエス様は、私たちを永遠に生かすために、私たちに代わって罪の刑罰を十字架で受けて死んでくださいました。しかし、神の力で三日目に死よりよみがえってくださって、今も生きておられて、信じる者に永遠の命を与えてくださる最高の羊飼いです。そして、その命は『豊かな命』だとイエス様は言われます。イエス様が命をも捨てるほど、私を愛していてくださるとわかると、喜びに満たされ、どこまでも、どこまでもイエス様についていきたいと思えますよね。いつでもこの本当の羊飼、イエス様の声を聞き、従って、命の道を、永遠の神様の御国をめざして進みましょう。しっかりとくっついて行っていないと、命の道からはずさぜられるかもしれません。イエス様はちゃんと警告しておられるように、私たちの回りにも「盗人、強盗、雇人の悪い羊飼」がいて、道をはずさせようとしています。『注意！』

まとめ

最高の羊飼、イエス様の十字架を信じて、罪を悔い改め、永遠の命、豊かな命をいただきましょう。教会学校でいただく言葉は毎日覚えるとい

ワーク A

話し方のヒント

羊は弱くて迷いやすい動物です。だから羊飼いは羊の世話をよくし、羊も羊飼いの声がわかります。私たちは羊のように弱く、間違った道に行きやすいのです。私たちの羊飼いはイエス様。私たちを自分の命より大切に思い、守って下さいます。イエス様についていく人には、永遠の命が与えられるのです。羊飼いが毎日おいしい草を食べさせてくれるように、イエス様は、聖書を読んでお祈りする人に心の栄養をたくさん下さいます。

ワークについて

塗り絵を完成してから声あてゲームで遊ぶ。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日の言葉完成させて、覚えましょう。
●質問2 羊は弱く、羊飼いが絶対に必要です。同じように、私たち人間も弱い存在で、羊飼いを必要としています。よい羊飼いである、イエス様がどうしても必要で、このお方に信頼し、聴き従うことが何より大切です。
●質問3 イエス様はよい羊飼いとして、どんなことをしてくださったのか。特に十字架の死による贖いを強調しています。さらには羊が羊飼いの声を聞くとあるように、日々の導きも大切で、詩篇23篇を紹介してあげたり、教師自身が牧者なる主に導かれてきたことの証しができたらよいでしょう。

ワーク C

●よい羊飼いは羊のために、牧草のあるところや、飲み水のあるところに導き、世話をします。狼などの獣がやってくると、命を懸けて守ります。夜は、屋外の囲いに一匹一匹の名を呼んで導き入れ、その門で番をして羊を守ります。また、囲い乗り越えて入ってくる盗人とも命を懸けて戦います。

●悪い羊飼いは、羊が自分のものでないために、命を懸けて守ろうとせず、自分本位に逃げだしてしまいます。

●イエス様は、私たちのよい羊飼いとして聖霊の水を与え、み言葉の牧草に導き、悪しき霊から守ってくださいます。そのために、十字架で命まで捨ててくださったお方です。

ワーク D

●今日は「よい羊飼」であるイエス様です。ワークに書いてある《やり方》に従ってロールプレイをしましょう。
お菓子はあらかじめ用意してください。
●楽しみながらやりましょう。先生も羊役をやってみませんか？
●最後にハローロールプレイのあとにみんなで読もう！を読みましょう。
●★の質問を通して気持ちを確認しましょう。

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 羊はどのような性格の動物ですか。また、羊飼いはどのような存在ですか。聖書が人間を羊にたとえ、神や民の指導者を羊飼いにたとえるのはどうしてですか。

2 「よい羊飼」である「主イエスは、どのようなお方ですか。特に、迷い出た羊に対して、どうされますか。

3 迷い出た羊が元のところに帰るために、主イエスは何をされましたか。

●自分にあてはめてみよう

1 あなたは迷い出た羊ではありませんか。「よい羊飼」である「主イエスのもとにいますか。
2 主イエスがあなたのすべてを誰よりもよく知っておられることをどう思いますか。
3 あなたは日々、主イエスのみ声に聴き従っていますか。他の声に聴き従っていませんか。
4 あなたは命に満ちあふれる人生を送っていますか。

●話し合ってみよう

1 命に満ちあふれる人生とはどのような人生のことでしょうか。どうしたらそのような人生を送ることができるでしょうか。
2 迷い出た羊のようなあなたに対して、主イエスはどのように下さったか、分かち合いましょう。
3 「この囲いにいない他の羊」のために、私たちは何をすべきでしょうか。

聖書 ヨハネ11・1～44
テーマ よみがえり・命

序論

今週は、ラザロのよみがえりという奇跡の直前に、主イエスが言われた「わたしはよみがえりであり、命である」と焦点をあてる。この奇跡は、ヨハネが描く7つのしるしの最後のもの、主ご自身の復活を暗示する出来事だった。今まで学んできた、命のパンである主、羊に命を得させる羊飼である主の姿よりさらに明確に、永遠の命を与えるため来られた主の使命がわかるだろう。

一、本当の希望を与える主

ラザロの姉であるマルタとマリヤは、福音書の中に何回か登場している（研究資料参照）。主は、エルサレム近郊のベタニヤに住む彼ら一家と親しくしておられた。ある日、ラザロが病気になるという知らせが「ヨルダンに向かう岸」（10・40）におられた主のもとに届いた。だが主は、「なおふつか、そのおられた所に滞在された」。そのため、主がベタニヤに着かれたときにはラザロはすでに死に、4日間も墓の中に置かれていたのである。だが、主が知らせを聞いてすぐ出発されたとしても、ラザロは生きていなかった。

主が来られたとき、マルタもマリヤも「主よ、もしあなたがここにいて下さったなら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょう」と言っている（21、32節）が、ラザロが死んでしまった以上、主はどうすることもできず、希望は失われたと思ってい

た。しかし、主は「あなたたちの兄弟はよみがえらせるであろう」と仰せられた。主は、病気をいやされるだけではなく、よみがえらせることもできるお方なのだ。これこそ、本当の希望である。

二、本当の愛を示される主

「イエスは、マルタとその姉妹とラザロを愛しておられた」。だから、「ユダヤ人らが、さきほどあなたを石で殺そうとしていましたのに、またそこに行かれるのですか」と弟子たちがいさめたにもかかわらず、ベタニヤに行かれたのである。そして、マリヤたちが墓の前で泣いているのを見て、「激しく感動」された。新改訳聖書は「霊の憤りを覚え」と訳しているが、それは、人類の「最後の敵」（1コリント15・26）である死に対する憤りであり（新聖書注解）、また人の不信仰に対する憤りとも解せる（ヨハネ伝講義）。さらに、「イエスは涙を流された」（「はらはらと涙を落とす」というニュアンスのあるこの動詞は、聖書中でここにしか用いられていない）。そこで共にいた人々は、「ああ、なんと彼を愛しておられたことか」と感動したのである。

父なる神はこの世を愛し、人の子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るために、主イエスをこの世に遣わされた（3・16）。主の使命は、死の力を打ち砕き、信じる者に永遠の命を与えることなのだ。主は今も、私たち一人一人を愛してくださっている。その愛のゆえに、罪から来る報酬である死を、私たち罪人の身代わりとなって引き受けてくださったのである。

三、本当の信仰を教えられる主

すでに主は、ヤイロの娘とチインのやもめの息子をよみがえらせておられた（マルコ5章、ルカ7章）が、それを目撃していた弟子たちでも、主のみわさを期待してはいなかった（11・16節）。マルタが「終りの日のよみがえりの時よみがえる」とは、存じています」としか言えず、マリヤとともに悲しみ泣いていたことは不思議でない。また、ある人々は「あゝの盲人の目をあけたこの人でも、ラザロを死なせないようにはできなかったのか」と言っていた。だれもかれも不信仰であった。

しかし、主は墓の入口をふさいでいる「石を取りのけなさい」と命じられた。へもう奥くなっていきます」と反発するマルタに、「へもし信じるなら神の栄光を見る」と断言された。そして、父なる神に祈られたとき、ラザロはよみがえったのである。

ラザロの死は、人神の栄光のため、また、神の子がそれによって栄光を受けるためのものだった。その場にいた人々は、主が「よみがえりであり、命である」との真理を信じないわけにはいかなかっただろう。不信仰の石は取り除かれたのだ。

結論

ラザロは確かによみがえったが、その後いつまでも地上にいたのではない。肉体の命は失った。しかし、この出来事をおして、主イエスを信じるなら、死後にも永遠の命が与えられることを確信したはずである。何よりも、その1週間余り後、主が復活されたことを目撃した人々は、その確信をさらに強めたに相違ない。

研究資料

(石田)

テキスト

1 マリヤとその姉妹マルタ ユダヤに伝道に來られた主をよくもてなした。主も彼らを愛しておられた（ヨハネ11・5）。主と彼らの関わりについてはたびたび記されている（ルカ10・41、42、ヨハネ11・1～46、12・1～8など）。

17 四日間も墓の中に置かれていた 当時のユダヤ人は、3日の間は死人の魂が肉体に帰ってくるかもしれないと考えていた。しかし、その期間も過ぎ、人々から蘇生の望みは全く消え去っていた。

21 もしあなたがここにいて下さったなら マルタは主イエスがどんな病人でも癒し、時には死人でさえもよみがえらせることを知っており、信じてもいた。しかし、4日もたつてはもう無理だと主の力を限定して考えている（39）。

24 終りの日のよみがえりの時よみがえれることは、存じています 当時のパリサイ人は、世の終りにメシヤが現れる時、死人はよみがえってさばきを受けるに信じていた。マルタの告白は、この信仰に基づいている。また肉親の死という重みに圧倒されていたので、目の前の死人がたちどころによみがえることまでは信じられなかったであろう。

25 よみがえり（アナスタシス） 本来の意味は「立つ・立ち上がる」とだが、新約聖書では「よみがえり、復活」と訳されている（38回）。「わたしはくである」という表現は、主が神であられることの宣言である。主イエスご自身が復活の源であり、信じる者に命を与える力である。わたしを

信じる者は、たとえ死んでも生きる 信仰によって主につながっていた人がよみがえることで、直接的にはラザロのよみがえりを指している。信仰者の命はキリストと共に神のうちに隠されているので、死は支配力を持たない（コロサイ3・3）。

26 生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない 信仰者は生きていようと死んでいようと、神の前ではみな生きている存在である。「神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神である」（マタイ22・32）。あなたはこれを信じるか

信仰だけが永遠の命とからだのよみがえりにあずかる秘訣である。なお「信じるか」は現在形であるから、「信じ続けるか」という問いかけでもある。

27 この世に來るべきキリスト、神の御子であると信じております 主の言われる復活の意味をじっくりと理解したわけではないが、この時のマルタにできた最上の信仰告白であった。

33 激しく感動し（エンプリマオマイ） これには馬が鼻を鳴らすという意味もあり、からだの震えるほど心を悩ます様子を表している（38節も同様）。主は親しい友の死を目の当たりにして、心が張り裂けるほど悲しんでおられる。これは人間として自然な感情である。また、この言葉には「激しい怒りを覚える」という意味もある。どんな人生も破滅に迫りやる死に対して、聖なる怒りが燃え上がったのである。心を騒がせ（タラッソ）心をかき乱され、動揺する様を表している（12・27、13・21）。

35 涙を流された この描写から主の悲しみが心底からのものであることが、さらにはつきりする。

主は人一倍鋭敏な心を持った、人間らしい人間であられた。この奇跡は、主が神の子であることを示すためのものであると共に、主の深いあわれみから出たものでもある。ユダヤ人は、主の愛の深さを感じ取っている（36）。

39 石を取りのけなさい これは人の信仰を試す言葉である。これに対して人は常識を超え、不信仰を取り除いて、信仰を働かせなければならぬ。そこに奇跡は行われ、神の栄光が現れる。

40 もし信じるなら神の栄光を見るであろうと、あなたに言ったではないか これは25節の「わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる」という言葉を指している。

41 人々は石を取りのけた 信仰を働かせて、主の言葉に従った。あたかもカナの婚禮で、僕たちが水がめに水を入れて運んだように（2・7、8）。わたしの願いをお聞き下さったことを感謝します。このように祈られたのは、主がご自分の力で奇跡を行うのではなく、全く神の力であることをそこに居合わせた人々に示すためである。また、「ご自分ではなく、神に栄光を帰するためである。神によって神のために行われた奇跡である」。

43 大声で「ラザロよ、出てきなさい」と呼ばわれた 父なる神が祈りを聞いて下さったという確信に満ちた言葉である。

44 すると、死人は出てきた こうしてラザロは現実によみがえらされたが、彼はもう一度死ぬことを免れなかった。この奇跡は主の言われた「よみがえり」（25）の究極ではなく、主が死に対する勝利者、よみがえりの権威をもつ救い主であることとしるしである。

聖書 ヨハネ11・1-44
タイトル よみがえりの命
中心聖句 わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。ヨハネ11・25
目標 唯一、死に勝利されたイエス様を信じて、永遠に生きよう。

導入

先週はかわいいペットのお話をしましたが、もしかして、皆さんのかわいがっていたペットが、死んでしまったという悲しい、悲しいことありませんでしたか？ ペットが死ぬのもとてもつらいけれど、もっとつらいのは一緒に遊んでいたお友だちがある日突然死んでいなくなるとか、もっとつらいのは大好きなお父さんとか、お母さんとか、兄弟とか、優しいおじいちゃんとかおばあちゃんとかが死ぬことです。皆さんの中で、そんなつらい思いをした人があるでしょうか。でも、周りを見れば分かるように、鼻から息をしている動物も人間も、いつかは必ず死ぬのです。何ということでしょう。

絶望から

それは全く、絶望という以外にありません。一体なぜ生きるの、何のために生きるの、と言いたくなります。今日読んだ聖書の中にも、弟ラザロが死んでしまった絶望の涙に泣いているマルタと

マリヤがいます。そこにイエス様がおられなくて、とうとう病気が悪くなって死んでしまいました。

しかも、イエス様に知らせが届いたのに、なお2日行くのが遅れたので、イエス様がラザロに会いに行った時にはもう死んで4日もたって、臭くなってしまっていました。ベタニヤ村は、悲しみと絶望の色一色でした。人々は皆、そこにイエス様が来られてもなお絶望一色でした。思い出せば、かつてヤイロの12歳の娘や、ナインのやもめのひとり息子を死からよみがえらせたことのあるイエス様だったのに。「わたしはよみがえりであり、命である」とマルタに言っても、マルタはまさかその場でラザロをよみがえらせてくださるなんてとても信じられず、「終りの日のよみがえりの時よみがえることは、存じています」と答えました。ラザロの墓、そこには大きな石が置かれています。絶望と語っているようです。イエス様は、ハラハラと涙を流されました。イエス様はこのように罪と死の力に押さえつけられている人を憐れみ、そのようにしたサタンへの怒りも覚えつつ、思わず涙を流されました。人々は「ああ、なんと彼を愛しておられたことかと感動して言う人もあれば、「あの盲人の目をあけたこの人でも、ラザロを死なせないようには、できなかったのか」と言う人もありました。イエス様はまた心を動かされて洞穴の墓に入り、「石を取りのけなさい」と言われました。「もう4日もたって、臭くなっています」と言うマルタに、「もし信じるなら神の栄光を見るであらうと、あなたに言ったではないか」と言われ、人々が石を取りのけると、イエス様は、目を天に向けて祈られました。父なる神様を信じて、

希望へ！

そうして、大きな、大きな声で呼ばわったのです。「ラザロよ、出てきなさい」、するとどうでしょう！ 手足を布でまかれ、顔も顔おおいで包まれたまま、死んだラザロが出てきたのです。何という瞬間！「わたしはよみがえりであり、命である」と言われたイエス様は、死人さえよみがえらせる力のある方だとハッキリと示されました。こんな力、こんな愛、こんな希望、他にどこにあるでしょうか？ イエス様は、死も命も支配されるお方です。これはその後1週間あまり後に、私たちの罪のために十字架にかかり、3日目に父なる神様によみがえらせられたイエス様のことも示すできごとでした。ラザロは、その後何年生きたでしょうか。でも、また肉体の命は死にました。しかし、イエス様はよみがえって今も生き続けておられます。そして、やがて再び天から信じる私たちを迎えにこられます。その時、まず信じて死んだ人々（眠っている人々）がよみがえらせられて、イエス様と同じく輝くよみがえりの栄光の姿になって、空中におられるイエス様のところに引き上げられ、次に生き残っている人々が一瞬のうちに、よみがえりの体に変えられて空中でイエス様と会い、そうして永遠にイエス様と共に過ごすのです。

ワーク A

話し方のヒント

ラザロさんは重い病気になり、イエス様が到着した時は間にあわず、もう死んでしまっていました。皆が泣いているのをくらになり、イエス様も涙を流されました。皆は、いくらイエス様でももうどうにもできないと思っていました。イエス様は、「もし信じるなら神の栄光を見る」と言って、ラザロを呼びました。なんとラザロがよみがえったのです。この力あるイエス様を信じる人には、天国の永遠の命が与えられます。

ワークについて
ペープサートを作りましょう。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。
●質問2 ここでは取り上げませんでしたがイエス様が、なお2日遅らせ、ラザロが生きかえる可能性がない完全な死の状態からよみがえらせたことも、理解力に応じて伝えましょう。
●質問3 これまでの歴史の中には、多くの立派な人物が現れましたが、死んでからよみがえられたのはイエス・キリストのみです。4大聖人の一人として数えられますが、イエスのみ神であり同レベルと考えられるべきではありません。そして、信じる私たちも、よみがえりの驚くべき望みがあることを伝えましょう。

ワーク C

●人は健康で順調な時には死を意識せず、無条件に死を忘れるよう忘れようとしています。

●しかし、事件や事故で愛する家族が死んでしまった時、遺族は悲嘆・絶望感に飲みこまれて泣き叫びます。これは、「もう生きて帰ってこない」とことを認めざるを得なかった時の人間の反応です。まさに、「死は人間の最大、最強、最後の敵です。●この場面でもマルタ、マリヤをはじめ人々は、そういう絶望に飲み込まれていました。イエス様が来られた事が、慰めにも希望にもならず、「ラザロが生きている時に来てほしかった。もう遅い」という本心が吐露されています。人間の本性が露呈された、こういう舞台設定の中で、主はラザロを死人の中からよみがえらせ25〜26節を鮮やかに全人類に証明して見せてくれたのです。

ワーク D

●今日は「よみがえり、命」であるイエス様です。●死に対して人間は無力であり、絶望です。しかも、死んで4日間も墓に葬られた人に対して、何の希望があるでしょうか？ 今日の出来事は、その様な死に対してまさに、よみがえりであり、命である主ご自身が顕著に表わされた記事です。●質問に順を追って答えて行きましょう。登場人物の気持ちを考えたり、イエス様の様子などを見ながら、この場面の嘆き、悲しみが伝わってくるでしょう。

●ラザロに起こった出来事を見ながら、私たちも主の自己紹介にあるとおり、イエス様を信じたいと思います。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 主イエスがラザロの病気について知らされても、すぐ出発されなかったのはどうしてですか。
- 2 主イエスが「激しく感動し、また心を騒がせ」、「涙を流された」のはどうしてですか。
- 3 主イエスの復活によって、何がもたらされましたか。もし復活されなかったら、どうなっていましたか（1コリント15章他）。
- 自分にあてはめてみよう
- 1 あなたは、自分のことを「あなた（主）が愛しておられる者」と認識し、感謝していますか。
- 2 あなたは罪を犯し続け、死んで悪臭を放つような生き方をしていますか。
- 3 あなたの中にも、取りのけるべき不信仰の石がありませんか。
- 4 あなたは「死んでも生きる」命をもっていますか。

●話し合ってみよう

- 1 死がどのようにして人類に入り込み、どのようにして克服されたか調べてみましょう。
- 2 もし、死がすべての終わりであったならば、人生観はどのようなものになるでしょうか。
- 3 復活の希望に生きるなら、地上の人生はどのようなものになるでしょうか。
- 4 「神の栄光のため」の試練であった、祈りの答えが遅れたのは主の愛のゆえであった、と後に悟った体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ヨハネ12・44～50
テーマ 世の光

序論

主イエスは、8・12で、△わたしは世の光である△と言われている。本書の冒頭では、△すべての人を照らすことの光があつて、世にきた△と書かれているように、主が世の光であることは、著者ヨハネが強調したい真理のひとつだった。12章までのまとめと言える今週のテキストには、この真理が、次のような3つの対比で説明されている。

一、光とやみとの対比

主が光としてこの世にこられた目的は、はっきりしている。△それはわたしを信じる者が、やみのうちにとどまらないようになるためである△。△光はやみの中に輝いている。そしてやみはこれに勝たなかった△(1・5)と記されているところり、光は必ずやみに打ち勝つ。やみのあるところに光がくるなら、かならずやみは光となる。光がない状態が、やみのだから。

主がこの世にこられたこと自体が、やみに対する勝利だった。ただ残念なことに、△光がこの世にきたのに、人々はそのおこないが悪いために、光よりもやみの方を愛した△(3・19)。重要なのは、主が世の光であることを信じる信仰である。だからヨハネは、△光がある間に、光の子となるために、光を信じなさい△と言った(12・36)。たとい今の世の中がどのように暗くても、世の光である主を信じるなら、やみに負けることはない。

二、父と子との対比

また主が、△わたしを信じる者は、わたしを信じるのではなく、わたしをつかわされたかたを信じるのである△と言われたことにも注目したい。△わたしをつかわされたかた△とは、父なる神であることは明白だろう。御子イエスを信じるとは、父なる神を信じることである。

旧約聖書の冒頭は、天地創造以前、やみがすべてをおおっているときに、父なる神が△光あれ△と命じられたと記している(創世記1・1～3)。しかし、父なる神は物理的な意味で光をもたらされただけではない。時至って、御子イエスを、世の光として、この地上につかわされた。それは、このお方によって、神がどういってお方を啓示するためだった。現実には肉体をもってこの地上に生きたこのお方を見ることによって、罪人たちも神がどういってお方を知ることができた。神は決して恐ろしい方ではなく、やみの中を歩く人々にも、明るさと温かさとして力を与える光のようなお方であることを示すために、御子イエスはこの地上に誕生されたのだ。彼は肉体となつて、この地上に生きた神の言にほかならない(1・14)。

主がここで、△わたしは自分から語ったのではなく、わたしをつかわされた父△自身が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったのである△と言われた理由もわかるだろう。

三、救いとさばきとの対比

△たとい、わたしの言うことを聞いてそれを守らない人があつても、わたしはその人をさばかな

い△という主の言葉は、△神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。彼を信じる者は、さばかれない△(3・17～18)との関連で理解しなければならぬ。主が世の光としてこられたのは、信じる者を救うためである。律法を守ることができず、主の言葉も守ることができない者であつても、ただ信じるだけで救われるのだ。これこそ福音である。

だが主は、△わたしを捨てて、わたしの言葉を受け入れない人△、つまり信じない人には、△その人をさばくものがある△と言われたことも忘れてはならない。その人が生きていた時にさばきはないとしても、△わたしの語ったその言葉が、終りの日にその人をさばく△のである。これは、終末に実現する最後の審判を意味している。

主が世の光としてこられたのは、やみの中を歩む人々が救われるためである。決してさばくためではない。信じるか否かが、救いかさばきを決定する唯一の条件なのである。

結論

ヨハネ8章に述べられている姦淫の女の物語は、この箇所具体的な例話となるだろう。彼女は、まさにやみから光へと導かれた人だった。この物語の直後に、主は、△わたしは世の光である。わたしに従つて来る者は、やみのうちを歩くことなく、命の光をもつであろう△(8・12)と宣言された。主を信じて従っていくときに、私たちは二度とやみに支配されることはない。

研究資料

(石田)

この箇所には、ヨハネの福音書の12章までに展開されてきた主イエスの教えが凝縮されている。主イエスの時代の人々は、旧約の預言者たちによって、やがて必ず救い主が来られることを知り、それを切実に待ち望んでいた。ところが、いざその方が来られ、神の国の福音を語り、しるしとしての奇跡をなさったところ、素直に信じた人は多くはなかった。それは「彼らが目で見ず、心で悟らず、悔い改めていやされることがないため」であった(12・40)。当時の人々にとって、目に見えない神が、見える形で現れたことを認めるのは困難であつたことがうかがえる。見えたがゆえにつまりいた人もいたわけである。また、信じても社会的な制裁を恐れて告白しない人がたくさんいた。そういう態度の人々を見て、主が福音のエッセンスを「大声で」宣べ伝えられたのがこの箇所である。主は人々が悔い改めるようにと忍耐深く語り続けておられる。

テキスト

44 わたしを信じる者は…わたしをつかわされたかたを信じる これは、父なる神と子なるキリストは一つであり、目に見えない神を知りたいと思つたら、主イエスを信じればわかるということである。まことの神がどんなお方であるかを理解させるためには、まず主イエスのみ言葉とみわざを伝えることである。

45 わたしを見る者は、わたしをつかわされたかたを見るのである これと同じ意味のみ言葉として、「わたしを見た者は、父を見たのである」(14・9)という、より簡潔で大胆な表現がある。神は特別に旧約の預言者たちにより自分をあらわされた。しかし、主イエスにおいて明白で完全な啓示をなさつた。今は誰でも信仰の目によって神を見ることができる。主がまことの救い主であることがわかつたら、それは見えない神を見たことと同じだからである。

46 わたしは光としてこの世にきた 旧約聖書では、神は光であり、救い主が光として来られることが預言されている(イザヤ9・2、42・6)。それが成就したと主は宣言しておられる。これは主がみずから神の子であると断言することであるから、激しい拒絶反応を巻き起こした。しかし、主にとって、ご自分が神から遣わされたことは、思想でも信念でもなく、誰から否定されようと、現実そのものであつた。主の光は、欲望、不安、恐怖など心の闇に勝利させる。「やみはこれ(光)に勝たなかった」(1・5)とある。また、この光は隠れたものを明らかにする。神の目に隠れるものは何もない。闇を愛する人間の本性を鋭く切り開く(3・19)。さらにこの光は正しい生き方へと導く。「わたしたちの心を照らして下さつた」(Ⅱコリント4・6)とあるように、何が神に喜ばれることであるかという、魂を照らすみ言葉としての光である。わたしを信じる者が、やみのうちにとどまらないようになるためである 主イエスを受け入れることが光を持つことであり、受け入れ

ないことが罪の闇に住むことである(ヨハネ1・12、3・19～21)。光に照らされた魂は、もはや以前どおりの罪深い生活にとどまることはできず、光の子として歩み始めることができる(8・12、10・6・2、1ヨハネ3・9)。また、世の光となるべく召されている(マタイ5・14～16)。それは生まれ変わった人のうちに命そのものである光、また命の道を歩ませる原動力が聖霊によって与えられるからである。

47 わたしがきたのは、この世をさばくためではなく、この世を救うためである 主の第一の来臨(降誕)は、信じる人を救うためである(3・17)。主を拒む人に対しても、主は最後まで救いの手を差し伸べておられる。

48 わたしを捨てて、わたしの言葉を受け入れない人には、その人をさばくものがある 主は信じる人を救うために来られたが、死ぬまで信じようとしない人は「終りの日」、つまり第二の来臨(再臨)のときには、さばかれることになる。

49 わたしは自分から語ったのではなく、わたしをつかわされた父ご自身が…お命じになったのである 父と子とは一つであることがさらに明確にされている。50節後半も同様である。主は何から今まで父なる神にご自分を明け渡しておられる。

50 わたしは、この命令が永遠の命であることを知っている 主の言葉を信じ、従い続けることによって神との交わりが保たれ、永遠の命を全うすることができ。ペテロは「永遠の命の言を持つているのはあなたです」と告白している(6・68)。

聖書 ヨハネ12・44～50
タイトル ふしぎな光
中心聖句 わたしは光としてこの世にきた。
ヨハネ12・46
目標 イエス様の光に照らされ、罪のやみから命の光の中に歩み出そう。

導入

今日は、4番目のイエス様の自己紹介です。イエス様は「わたしは光としてこの世にきた」と言われます。はい、それでは、どんな光がこの世にありますか。言ってみましょう。アドベントの時にも考えたことがあるのですが、2種類あると思いますよ。人間が作り出した光と、神様が造ってくださった光とね。人間が作り出した光は？ マッチの光、ランプの光、電気の光、火打石の火の光、これはマッチでつけるけど。テレビやパソコンの光もあるね。じゃあ、神様が造ってくださった光は？ もちろん、太陽が一番、月の光、星の光、蛍の光、雪の光、オーロラもきれい。私たちはこんなにも沢山の光に囲まれているんです。驚くばかり。ところが、最初に光が造られたのは、太陽ではありませんでした。エツ？ 実は、神様が「光あれ」と言われてできた光は太陽ではないのです。だって太陽は4日目に造られたのですから。それって、不思議な神様の光ですね。そして、この神様がひとり子イエス様を「世の光」として、この

世に遣わしてくださったのです。

心を照らす光

不思議な光であるイエス様の光は、他の沢山の光とどうちがうでしょう？ 考えてみてください。さっき言ったすべての光は、私たちの外側を明るく照らすものですね。そうそう、X線というレントゲンの光も不思議だけど、それは、私たちの内臓を写し出します。しかし、イエス様の光はほんとうに不思議。実は、私たちの心を照らし出すのです。すごいことですね。心の中にある、罪のやみが見えてきます。わがままな心や憎む心、ねたむ心や自分中心の心、ほしがる心やいやな感じをもつ心、うそを考える心や怒りっぽい心、何ということでしょう。こんな心は、みなやみの中の心で、神様から遠く離れた心ですね。この不思議な光が心にさし込むと、「ああ、こんな汚い心、こんな汚いこれまでの歩み、なんとかして」と、誰もがそう叫ぶのです。

命を救う光

そのまま進んでいくと、やみからやみへ、ついに神様から全く離れて滅びてしまいます。そんな私たちを、永遠のさばきと滅びから救ってくださるのも、この不思議な光としてこられたイエス様なのです。ちょうど目の前に小さな10円玉を置くと、太陽が見えないように、私たちと神様の間に罪が入り込んでいます。犯してしまった罪の思い出も、心からぬぐい切れません。やみのような心も、自分の力ではきれいにできません。そんな私のために、イエス様が十字架にかかって、私の罪

とのろいを全部背負って罰を代わりに受けてくださって、私たちは罪のおわびをしてイエス様を信じれば、罪が完全にゆるされ、取り除かれて、滅びない命がいただけるのです。私たちの命を救う光はたった一つ、イエス様という不思議な光だけです。

例話

ヨハネさんは、そのことがよくわかる出来事を記しています。イエス様の、不思議な光に照らされて、その光の中で、イエス様に罪をゆるしてもらったひとりの女の人のことです。それは、ヨハネ8・1～11に書かれています。罪の現場をおさえたパリサイ人や律法学者たちが、この女の人をイエス様の前にひっぱってききました。「モーセは律法では、石で打ち殺せと命じています。イエス様、あなたはどお思いますか」。問い続ける彼らに、「あなたがたの中で罪のないものが、まずこの女に石を投げつけるがよい」と、イエス様は言われたのです。誰ひとりできる人はなく、みんななくなり、イエス様と女の人だけになりました。「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように」。そして、「わたしは世の光である」と、イエス様は言われました。不思議な光であるイエス様の光の中にどまって、女の方はゆるしと救いを与えられました。本当に不思議で、そして、すばらしい光、それがイエス様です。私たちの心も、その光に照らしていただき、十字架をおおいで、すべての罪をゆるされて、光の中を歩き続けましょう。

ワーク A

●3月7日～21日の聖句―ヨハネ14・6

●話し方のヒント

太陽の光や電気の光のなかでは何でもはつきりと見えますが、心の中までは見ることはできません。イエス様の光はだれにも見えない心を照らします。すると悪い心、罪がはつきりと分かるのです。自分では罪をどうすることもできませんが、「イエス様、ごめんなさい」とおわびしたら、ゆるしていただけるのです。イエスさまといっしょに光の中を歩いていきましょう。

●ワークについて

ゆび人形を作り、動かしてください。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。

●質問2 中心聖句の続きです。もしできれば、ここもいっしょに暗唱しましょう。

●質問3 具体的な罪をあげてありますが、その本質は「神から離れてしまっていること」です。そして、人を罪のやみから救い出して、光の中を歩む命を与えてくださるのは、ただイエス・キリストだけです。

ワーク C

●地上の物理的な光を考える時、光と言えばまず太陽の光であり、その他の多くも太陽の光を元にしています。

①「火」は木や化石燃料により、②電気は発電により生じ、太陽が起源。③月も太陽光の反射。④紫外線、赤外線、エックス線もある。これらの光も創世記一章の神の創造の中にあるのです。人間は神にかたどって造られたように、この物理的光もその元は神の栄光の輝きです。(ヨハネ1・5～7、黙示21・23など)

●しかし、「世の光」、「すべての人を照らすこと」の光(ヨハネ1・9)としてこられたイエス様の光は、心の奥底まで照らし出す不思議な霊的な光です。罪や汚れもあはき出しますが、罪人の悩み悲しみも照らし出し、暖めてくれる光です。

ワーク D

●今日は「光」であるイエス様です。

●「人間が作り出した光」「神様が造って下さった光」は説教例を参考にしてください。

●2の質問はヨハネ福音書の中の光に関連したみ言葉からの質問です。

●今日の聖書の箇所は、イエス様が大声で話されています。私たちは耳を傾けましょう。主は、いつもご自分ではなく、父なる神様に栄光を帰しておられることに感謝を受けたいでしょうか？

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 この時、主イエスが「大声で言われた」のはどうしてですか。
2 主イエスは、父なる神との関係についてどう言っておられますか。

3 主イエスの来臨の目的は何ですか。
4 私たちをやみから救い出すために、主イエスは何をして下さいましたか。
5 主イエスを信じるならば、どうなりますか。

●自分にあてはめてみよう
1 あなたは今、光の中にいますか。それともやみの中にいますか。
2 あなたはこの主イエスの言葉を聞いて、何か示されたことや決心したことがありますか。

●話し合ってみよう
1 「光」「やみ」「命」の性質や働き等を挙げてみましょう。本書全体で、これらの語がどのように用いられているか調べてみましょう。
2 47節と48節をどう理解したらよいのでしょうか。
3 やみのうちにとどまっている人々の間で、私たちはどのような生き方をしたらよいのでしょうか。
4 「光としてこの世にきた」主イエスによって罪を示されて悔い改めた体験、やみから光へと導かれた体験があれば、分かち合いましょう。

聖書 ヨハネ14・1～6
テーマ 道・真理・命

序論

今週のテキストも、直前の箇所と深く関わっている。受難日の前夜、主イエスは弟子たちの足を洗われた後、△あなたがたはわたしの行く所に来ることはできない△と仰せられた。十字架と復活を経てから、昇天されることを意味しておられたのである。しかし、そのことがわからないペテロが、△主よ、どこへおいでになるのですか△と尋ねたとき、主は再び、△今はついて来ることはできない△と言われたばかりでなく、△あなたがたはわたしを三度知らないと言つてであらう△ともおっしゃった(13・33～38)。弟子たちが△心を騒がせ△たのも無理はないだろう。主はこのとき、△わたしは道である△と彼らを励まされたのである。

一、父の家に至る道

先週も学んだように、主は、△自分が父なる神とひとつである△ことを、何度も弟子たちに告げておられた。ここでも△神を信じ、またわたしを信じなさい△と言われ、それから、△わたしの父の家には、すまいがたくさんある△と宣言されたのである。主が弟子たちを導こうとされていたのは、この地上の家ではなく、父なる神がおられる家だった。主が彼らから離られるのは、その△場所を用意しに行く△ためにほかならない。もし、そのようなすまいがないなら、主はそのことを彼らに言っておかれたはずである。だから、弟子たち

は心を騒がせる必要はなかった。身近なたええを用いると、お花見の席を確保するために、父親が子どもたちを離れて先に出かけるようなものである。子どもたちは父親を信じて、父親が帰ってくるのを待てばよいのだ。

二、主と共に行く道

さらにすばらしいのは、△場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたをわたしのところに迎えよう△と約束してくださったことである。これは、第一義的には、再臨を指していると思われる。しかし、バックストンが18節や23節との関係から、聖霊がおいでになることだと注解している(『ヨハネ伝講義』259頁)ことは、この箇所を理解するにふさわしい。

△わたしが道である△ことは、「私は道を教える」というのと違う。後者の場合は、教えられた者は、自分ひとりで行かなくてはならない。しかし、前者の場合は、そう言われるお方が、その道を共に歩んでくださるのである。行ったことのない所へ行くための道を教えてもらえるのは嬉しい。しかし、よく知っている人が自分と一緒に歩いてくれることのほうがはるかに心強い。

この章の25節から、主は聖霊について教え始められ、△わたしは去って行くが、またあなたがたのところに帰って来る△と約束しておられる。主は、場所の用意をされるだけでなく、そこに至るまで、弟子たちと一緒に歩んでくださるのだ。だからこそ、△わたしはどこへ行くのか、その道はあなたがたにわかっている△と言われた。

三、真理と命が伴う道

それでもまだ、△どうしてその道がわかるでしょう△と尋ねたトマスは、本当に正直な弟子である。そんな愚かな彼に、主は、△わたしは道であり、真理であり、命である△と答えになった。

なぜ、真理と命がつけ加えられているのか。バックストンは、脱線した汽車のたとえでこのことを説明している(前掲書262頁)。汽車が目的地に着くためには、まず軌道に戻され(道)、機械を修理し(真理)、石炭に火をつけねばならない(命)。主イエスは、共に歩んでくださるだけでなく、日々正しい道を示し、歩く力さえも与えてくださる。愚かで弱い弟子だからこそ、主がいつも一緒に歩けばならないのだ。主が、△だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない△と仰せられたのは、そのためだった。

主は、翌日には自分が十字架につけられることをご存知の上で、このように言われた。十字架は敗北のしるしではない。それは、愚かな弟子たち、罪深い人間が神のもとに行くための唯一の道である。それは、犠牲なくして罪の赦しがないという真理を示し、罪人に永遠の命を与えるものだ。

結論

このとき、弟子たちは主と共に十字架の道を行くことはなかった。しかし、主が復活・昇天され、聖霊が与えられた後には、同じ道を歩んだのだ。私たちも同様の道を歩もう。主が「一緒に、苦難の道も歩める。そして、必ず、父の家に用意されているすまいに至るのである。」

研究資料

(石田)

テキスト

1 心を騒がせないがよい(タラッソー) 大きな痛みや悲しみて心を乱される様子を表している(11・33、12・27、13・21)。弟子たちはなぜ心を騒がせたのか。それは主が十字架への道を進もうとしておられることを知って、頼みとする主に取り残され、敵対する者たちから迫害されるという恐れに捕えられたからである。また、自分たちの願いと正反対の展開にがく然となり、失望したからである。そんな彼らに主は「心を騒がせるな」という命令だけでなく、「わたしの平安をあなたがたに与える」という約束もしておられる(14・27)。神を信じ、またわたしを信じなさい(ピスチューエテ) 現在時制なので△信じ続けなさい、信頼し続けなさい△という意味にもなる。ここで主が、神を信じることに△自分を信じることを同列にしておられるのは驚くべきことである。この真理は「わたしを見た者は、父を見たのである」にも表されている(9)。弟子たちがこの危機的状況を乗り越えるためには、神を信じるだけではじゅうぶんではなかった。彼ら以外のユダヤ人も、当然のように神の存在を信じていたからである。主イエスの言葉とわざを信じることによって、揺るぐことなく神に信頼することができる。

2 わたしの父の家には、すまいがたくさんあるすまい(モネー) 新約聖書ではここと23節だけに

使われている。これは第一に、地上の一時的な住居ではなく、天上の永遠のすまいを意味する。第二に、天上の神の御座近く、あるいは天の至聖所という意味もある。エルサレムの神殿には祭司たちの住まいがあった(列王紀上6・5、10)。詩篇には、神の幕屋あるいは神殿の近くに住むことへの願いが歌われている(詩篇65・4、84・3)。そのように、聖霊を受けた者は、からだは地上にいても霊はすでに天上の神のもとにある(エペソ2・6、「ロサイ3・3」。これは10節の「わたし」が父にあり、父がわたしにおられること)に通じる。場所を用意しに行く 天国の住まいを備えると共に、聖霊を注ぐ準備をするという言ひもある。3 行つて 神の右の座に着かれるまでのプロセス、つまり十字架による死、復活、昇天を指す。またきて 文字どおり、再臨のことである。しかし、もう一つには、主が昇天して神の右の座に着き、神から聖霊を受け、それを地上の弟子たちに注ぐこと(使徒2・33)、別の言い方をすれば主イエスが聖霊によって弟子たちの中に住まわれることである(18、23)。わたしのおる所にあなたがたもおらせるため からだは地上にあっても、霊は神のもとにあるようにして下さる。

4 その道はあなたがたにわかっている 主は反対者に対して再三、父なる神のもとに行くことを語っておられる(7・33、8・21)。弟子たちはそれを聞いていたはずである。

6 わたしは道であり 「わたしは」である」という表現は、神が△自分をあらわされるときに使用されるもので、人間は使うことができない。わたしは道であると言つが、どこへ行く道なのか。それは「わたしの父の家」(2)であり、「わたしのおる所」(3)であり、「父のみもと」(6)である。主は天国に至る道であり、神と交わる道である。わたしは…真理であり 真理(アレーセイア)の第一の意味は、「率直さ、隠されていないこと」である。しかし、ユダヤ人にとつての真理(ヘブル語のエメス)の第一の意味は、「支えているもの」である。真理は堅く立っていることを意味し、人の期待を裏切ったり、失望させたりしないことである『ウエスレアン神学辞典より』。だから「真理、まこと」とも訳される。これは神の性質から出てきたものである。一方、アレーセイア(真理)は、救いのために啓示された福音そのものを意味する。それは「福音の真理」という表現に表れている(ガラテヤ2・5、14)。注目すべきことは、主が真理について知っており、教えることができると言われたのではなく、わたし自身が真理であると言われたことである。教師ではなく、神である。わたしは…命である 主は命の水、命の光、命のパン、命を得させる羊飼ひ、よみがえりであり命であるお方である。以上のことをまとめてみると、主は「命に至る真理(まこと)の道である」と表現することができる。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない「命にいたる…道は細い」(マタイ7・14)、「神と人との間の仲保者もただひとり」とある(1・テモテ2・5)。

聖書 ヨハネ14・1～6
 タイトル この道を行こう
 中心聖句 わたしは道であり、真理であり、命である。 ヨハネ14・6
 目標 父のもとへの唯一の道はキリストであることを知る。

導入

だんだんと暖かくなつて、いのちの春を感じて
 いますか？ 皆さんは毎日、どんな道を通って学校
 や保育園に行くのかな？ まっすべな道、曲がりく
 ねた道、下り坂、上り坂、広い道、細い道、ア
 スファルトの道、でこぼこ道、どんな道でしょ
 うね。今日は、イエス様が、「わたしは道であり、真
 理であり、命である」と言われます。イエス様道
 (どう)なんですね、すごく便利で速く通れる高
 速道路には名前があります。名神高速道路とか、
 舞鶴若狭道とか、徳島道とか、高知道とかね。そ
 して目的地にちゃんと行けるように、「高知左寄れ」
 と親切に道路標識に書かれてあるので、本当に助
 かります。さてさて、それでは『イエス様道』っ
 ていったいどんな道でしょう。

父のみもとへ行く道

私たちの毎日は、道を歩いているのです。その
 道はいつも2つあって、私たちはそのどちらかを
 歩いています。それは命への道か、滅びへの道か、
 2つにひとつです。イエス様を知ろうとしないし、

信じない、自分勝手に行く道は、滅びへの道です。

でも、イエス様を信じて、イエス様について行く
 道は、永遠の命への道です。そして、その道だけ
 が天の父、魂の父のみもとへの道なのです。天の
 御国、永遠の御国への道です。イエス様以外の何
 によっても、父のみもとへは絶対に行けません。
 お金の力でダメです。勉強だけでもダメです。
 どんなに努力してもダメです。天の父の家へは行
 けません。そこにたどりつける道はただ一つ、十
 字架、イエス様がそこにかかってくれた十字架
 架の道だけです。そこだけが罪をゆるされる所
 であり、きよい父のみもとに行ける道なのです。父
 なる神様は私たちを愛して、滅びてしまわないよ
 うにと、イエス様を十字架につけてまでも、この
 大切な道を開いてくださいました。感謝ですね。

イエスと共に歩く道

お友だちの家にはじめて行ったことのある人、
 その時どうしました？ お友だちに地図を書いても
 らって、行き方を教えてもらったかしら？ 迷わな
 いで行けたらとってもうれしいですよ。でも、
 その地図がとてかわりにくかったり、目印のも
 のがなくなっていたり、どっちの道かわからな
 くて迷ったりしたらつらいですね。歩いていても
 しんどいし、車で迷うと、特に高速道路で行き過
 ぎたりしたら、もう大変、涙が出そうになります。
 そんなとき、お友だちと一緒に歩いて、連れて行
 ってくれたら、こんなに確かなことはありません。
 絶対大丈夫なんですから。そのお友だちイエス
 様、そういうことになります。実は、イエス様が
 そうなのです。イエス様道なのですから、いつも

イエス様と共に歩いてくださる道です。十字架で
 死なれたイエス様は3日目に復活されて、今も生
 きておられ、信じる私たちと一緒に天の父への道
 を歩いてくださいます。何て心強いことでしょう。
 肉の目には見えなくても、いつも「これが道だよ」
 と、私たちの心に語りかけていてくださいます。

道するべは、聖書のみ言葉と、聖霊による平安で
 す。イエス様と共に歩く道は御国への道、絶対大
 丈夫な道です。「人は死んだらどこへ行くの？」
 この大きな問題に、みことに答えてくださるのが
 道なるイエス様なのです。

例話

イエス様のはじめのお弟子さんたちや、お弟子
 さんたちを通してイエス様を信じた人々がどのよ
 うに呼ばれていたでしょう？ 『この道の人々』っ
 て呼ばれていたんですよ(使徒行伝9・2他)。こ
 の道、唯一の、天の父への道、イエス様道を歩む
 者たちと呼ばれていました。その道は決して、楽
 な道ではなかったのです。大変な迫害を受けて、
 牢屋に入れられたりしました。でも、『この道の人
 々』は、それで今道を歩くのをやめてしまったり
 はしません。イエス様と同じ苦しみを与えられ
 と、むしろ喜んでますます堅く、この道を歩み続
 け、さらに多くの人々をこの道に招き入れていっ
 たのです。今日、私たちもその中の一人ですね。
 永遠に変わることはない真理の道、永遠の命の道
 に至るたった一本の道、イエス様道。あなたは今
 どの道を歩んでいますか？ この道を共に歩もう、

ワーク A

話し方のヒント

●どんなに勉強しても、たくさんお金があっても、
 天国に行くことはできませんね。イエス様のこと
 が大好きで、イエス様を信じている人だけが天国
 に行くことができます。イエス様は私たちをひと
 りにするのではなく、いつも一緒にいてくださ
 います。どんなに苦しいときでも、迷ったり間違っ
 た道に行ったりして天国に行けなくなるならい
 ように、守って下さっているのです。

ワークについて

くまに彩色して切り抜き、完成してください。

ワーク B

- 質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完
 成させて、覚えましょう。
- 質問2 天の父のみもとに行くことのできる道
 はただひとつ、イエス・キリストだけです。
- 質問3 イエス・キリストが天の父のもとに行
 くことができる道であるのは、十字架と復活によ
 るからです。そしてこの道は孤独の道ではなく、
 主と共に歩む道です。しかし、目には見えない主
 と共に歩むために、具体的にどうしたらよいか考
 えましょう。み言葉に従うこと、祈ることもそ
 ですが、主と共におられることを信じるが大
 切です(マタイ28・20)。

ワーク C

●柔道、剣道、空手道、書道、華道、茶道…日本
 人は、自分の生き方・あり方を探り求め、人生を
 極めるために「修行の道」を歩んできたように思
 います。しかし、本当は、心の奥底では、その探
 り求めていた道は、天国・天の神様への道であ
 ったに違いありません。しかし、鎖国の中で、日本
 人はキリストを知る事もできず、もがき続けてき
 たのではないでしょう。か。『全ての道はローマに通
 す』とありますが、本当に必要なものは、心から求
 めてやまない、天につながる唯一の道「主イエス・
 キリスト」である、と言っていることができるでしょう。

ワーク D

- 今日は「道、真理、命」であるイエス様です。
- 《アイズブレイク》では、旅行に行く時のこと
 を考えながら旅行気分や準備などを思いめぐらし
 ます。
- 《メインテーマ》に入って、礼拝説教を思い起
 こしながら命の道と滅びの道の違いを考えます。
 行き先、パスポートなど項目に従って考えてみま
 す。命の道では行き先は永遠の命、天国など。パ
 スポートはイエス様は救い主と信じてのこと。旅行
 費用は無料。ナビゲーターはイエス様。道しるべ
 は、聖書のみ言葉、聖霊による平安。困難は迫害、
 誘惑などになります。わくをはみでない範囲で、
 いろいろ考えてみましょう。滅びの道については
 自由に考えてみて下さい。

中高校へのヒント

●考えてみよう

- 1 主イエスが「心を騒がせないがよい」と言わ
 れたのはどうしてですか。
- 2 「わたしの父の家」は、どのような所ですか
 (黙示録21・22章も参照)。
- 3 この時の主イエスがこれからしようとしてお
 られたことは何ですか。
- 4 主イエスが「わたしは道である」と言われた
 のはどうしてですか。
- 5 私たちが「父のみもとに行く」ために必要な
 ことは何ですか。
- 自分にあてはめてみよう
- 1 あなたの心が騒ぐのはどのような時ですか。
- 2 あなたは今、どのような道を歩んでいますか。
- 3 主イエスが迎えに来られる日は、あなたにと
 ってどのような日になるでしょう。
- 4 あなたのために用意された場所が天にあるで
 しょうか。
- 話し合ってみよう
- 1 主イエスが去って行かれることを聞かされた
 弟子たちは、どう思ったでしょう。
- 2 どうしたら心を騒がせないでいることができ
 るでしょう。
- 3 この地上のすまいと、「わたしの父の家」にあ
 る「すまい」とを比較してみましょう。
- 4 「父のみもとに行く」道は他にないのでしょ
 うか。

聖書 ヨハネ15・1～11
テーマ まことのぶどうの木

序論

単元「わたしは」である」の最後に、まことのぶどうの木である主イエスの姿を学ぶ。旧約聖書では、イスラエルは、しばしばぶどうの木にたとえられてきた(研究資料参照)。しかし、ほとんどの場合それは、良い実を結ばないものとして描かれている。このような過去を改め、新しいイスラエルを創造するために、主イエスは「まことのぶどうの木」として、この世にこられたのである。それとの関連の中で、農夫・ぶどうの枝・豊かな実などの表現が用いられていることに注目したい。

一、農夫としての父なる神

主は、父なる神を農夫にたとえ、**「わたしに繋がっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりぞぎ、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れてこれをきれいにささる」と**言われる。農夫は、ぶどうの枝が実を結ぶかどうかに関心ではありえない。実を結ばなかった過去のイスラエルが、バビロン捕囚等の厳しいさばきを受けたことは、厳粛な事実である。それと対照的に、農夫は実を結ぶものを**「手入れてきれいにささる」**。原語ではこれは「語で、3節の**「わたし」**が語った言葉によって」きよくされている**「わたし」**と親戚関係にある。つまり、父なる神は、主イエスの言葉によって、弟子たちを手入れなさるのである。

父なる神は、旧約時代のイスラエルが豊かな実を結んでくれるように切に願っておられた。しかし、それができなかったため、御子イエスを「神の言」としてこの地上に遣わされたのだ。御子によってのみ、回復が可能だからである。

二、枝としての弟子たち

弟子たちは、主の言葉によって**「既にきよくされている」**。これは直前の洗足の時に、**「あなたにたはきれいなのだ」**(13・10)と言われたことと同じだろう。しかし、それでも主イエスとつながりをもち、主に足を洗っていただく必要があった。同様に、枝はぶどうの木につながり、絶えず樹液を供給されねばならない。**「枝がぶどうの木につながっていないければ、自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていないければ実を結ぶことができない」**。主イエスは、父なる神と同じく、本来はぶどうの木を管理するお方であった。そのお方がぶどうの木となつてくださった。それにつながるなら、どんな枝でも実を結ぶことができる。しかし、逆に木につながっていないなら、枝は決して実を結ぶことはできない。**「既にきよくされている」**者だからこそ、主イエスにつながり続けるのだ。これは、当時の弟子たちだけではなく、現代に生きる私たちすべてにもあてはまる。

三、豊かな実を結ぶために

ぶどうの木に豊かな実を結ばせるために、農夫は肥料をやり、手入れをする。これは外部の恵みである。ぶどうの木は樹液を送り続ける。これは

内部の恵みである。その結果、ぶどうの木は豊かに実を結ぶ。この箇所をバックストンはこう注解する。「この実はどういう実でありますか。これは一番最初に伝道の成功ではありません。…神はまず私共の心に実を結ぶことを願ひ給います。ガラテヤ5・22、23を御覧なさい」(『ヨハネ伝講義』287頁)。ガラテヤ5章には、御霊の実が9つあげられている。その最初のふたつが愛と喜びである。そして、ヨハネ15章9節以降に、このふたつの実について言及されていることは興味深い。

主は言われる。**「わたしは愛のうちにいなさい。もしわたしのいましめを守るならば、あなたがたはわたしの愛のうちにいるのである」**。原語では、「愛のうちに」いる、ある」という語は、「わたしに」つながる」という語と同じである。主の愛のうちにいるときに、愛という実を結ぶことができる。そして、主の戒めを守ることもできる。父なる神と主イエスとの親密な関係が、私たちと主との間にも生まれるのだ。その結果、主イエスの喜びが、私たちにも宿るのである。

結論

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」とのみ言葉を、クリスチャンはひと時も忘れてはならない。主から離れては、私たちは何一つできないからである。新しいイスラエルである新約時代の教会は、この原則によって生かされている。聖餐式は、このことを思い出すために制定されたことを銘記しよう。

研究資料

(石田)

テキスト

1 わたしはまことのぶどうの木 神の民イスラエルは、よい実を結ぶべきぶどうの木、あるいはぶどう畑としてたとえられてきた(イザヤ5・1～7、エゼキヤ2・21、エゼキエル15章、19・10)。そのため、ぶどうの木はイスラエル民族のシンボルとして用いられ、マカベア朝時代にはコインにも刻まれたことがあった。ぶどうは当時でも今でも一般的で重要な果物である。主はこのよく見慣れたものを題材にしておられる。イスラエルはよい実を結ぶようにと神から期待されているが、実際は繰り返し神にそむいて甘い実を結ぶどころか、さっぱり実らなかったり、すっぱい実を結ぶ木になってしまった。まことの(アレーシノス)は、「本物の、純粹の」という意味があり、主イエスこそイスラエルに代って神に期待されたとおりに完璧な実を結んだぶどうの木である。そして、主を信じる者はその枝である。そのような主イエスとクリスチャンの命の関係がこれから展開していく。

2 父がすべてこれをとりぞぎ とりぞぎ(アイロー)ぶどうの木は勢いよく成長するので、よい実を結ばせるためには思い切った刈り込みが必要である。実のならない枝は容赦なく切り落とされ、実のなる枝のために養分を確保しなければならぬ。御国の福音が優先的に宣べ伝えられたコダヤ人は、それを受け入れてよい実を結ぶぶどう

の枝となるはずであった。ところが、彼らの多くは主を受け入れなかったで、退けられた(6)。**「手入れてこれをきれいにささる」**(カサイロー)実を結ぶ枝も余分な小枝の刈り込みが必要である。主を受け入れた者も、み言葉によって取り扱いを受け、悔い改め、従うことによって豊かな実を結ぶように刈り込まれる。主は弟子たちにおいて、その互いの人間関係の中で刈り込みを進められた人と関わることで自分が見えてくるものである。今日の教会や家庭においても同様である。

3 既にきよくされている(カサイロー) 余分なものや悪いものを取り除くという意味で、詳訳聖書は「刈り込み済みである」と訳している。

4 わたしにつながっていないさい つながる(メノー)には「とどまる、いる、住む、継続する」などの意味があり、原文には「の内に」という前置詞がある。同じ言葉が、「わたしの愛のうちにいなさい」と訳されている(9)。「わたしのうちにいなさい」というのが中心の意味であろう。いずれの意味にせよ、クリストの中に身を預け、心と思いと精神を尽くしてより頼むこと、しかも継続して信頼すべきことがこのメッセージである。そうすれば、わたしはあなたがたにつながっている。主は、信頼し続ける者の内にとどまり、住み、ご自身で満ちたして下さるという約束で、ぶどうの木から枝に栄養が注がれるように、クリストの命が注がれ続けるのである。しかも死を超えて永遠に。わたしにつながっていないければ実を結ぶことができない。ぶどうの枝それ自体には命の源がないので、生け花のように離れたら枯れるばかりである。そのように一時的、部分的な信頼では、主が計画し、期待しておられるような実とは結ばれない。人の努力が実を結ばせるのでもない。主ご自身も「自分からは何事もすることができない」(5・19)と言われ、父なる神に全く依存しておられた。これは主の不完全さを意味するのではなく、むしろ「わたしと父とは一つである」(10・30)という神との一体性を表している。

5 実を豊かに結ぶようになる 「木はそれぞれ、その実でわかる」(ルカ6・44)とあるように、主の品性が、信頼し続ける者の内に現れてくる。

6 人がわたしにつながっていないならば、枝のように外に投げ捨てられて枯れる ぶどうの利用価値はその実にあるのであって、枝や幹にはない。ぶどうの木は柔らかいため家具にも建築資材にもならず、燃やして煮炊きに使う他はないものである。

7 あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉が… 主の言葉にとどまる(守る、従う)ならば、主がその人の内にとどまって下さる(14・23)。何でも望むものを求めるがよい 主と主の言葉に従う生活の中で祈るならば、どんな願い事も神に受け入れられる。

8 わたしの父は栄光をお受けになる 私たちが実を結ぶ目的は、神があがめられるためである。

9 わたしの愛のうちにいなさい 「わたしのいましめ」(10)と言われる神のみ言葉に従って、隣人を愛することである。その報いは、聖霊による喜びである(11)。

聖書 ヨハネ15・1～11
タイトル つながってる？
中心聖句 わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。ヨハネ15・5
目標 まことのぶどうの枝となって、実を結ぶ人生を。

導入

「ぶどうの木とかけて何と解く?」「マラソン選手と解く。」「その心は?」「ハシムニヤナリ」とこんなわけで、確かにぶどうの木は木でも柱にはなりません。ぶどうの木はぶどうの実を結ぶための木です。今日、イエス様は、父なる神様が農夫で、イエス様はまことのぶどうの木だと紹介しておられます。昔、神様に選ばれたイスラエルの民をぶどうの木として植えたものの、彼らはおいしい実をつけず、野ぶどうのようにおいしくない酸っぱい実をつけて、神様をがっかりさせ、悲しませてばかりいたのです。そこで神様は、ついにまことのぶどうの木としてイエス様をこの世にお遣わしになったのです。ぶどうの木、見たことありますか? いっぱいおいしい実をつけているぶどうの木、そこから実を摘んだことがあるかしらう。本当にわくわくしてうれしいですよ。その実が甘くておいしかったら、もう最高の喜びですよ。農夫であられる父なる神様をお喜ばせする、ぶどうの枝にみんななりたいですよね。

枝に実

イエス様はお弟子さんたちに、「あなたがたはその枝である」と言われたばかりでなく、今日、私たちひとりひとりに「その枝だよ」と言っておられるのです。もちろん実を結ぶために枝は、幹なる木であるイエス様としっかりとつながっていなければなりません。実は枝になるのですが、もし、枝が幹につながっていないと絶対実をつけることはできません。当たり前です。枝は幹を通して、命の樹液をいっぱい受けて、おいしい実をつけるのです。そのように、私たちもイエス様としっかりとつながり続けるなら、自然と、豊かな実を結んでいけるのです。イエス様にどうやってつながり続ける? それは、一つにはイエス様の言葉、聖書のみ言葉をよく読み、心に貯え、覚え、信じて行うこと。もう一つには、お祈りをして、神様やイエス様のお心を深く知る事です。そうして、もちろん日曜日には教会で神様を礼拝し、クリスチャンと交わる事です。この3つのことを励んでいいたら、きつときつと、おいしい実を結ぶようになります。楽しみですね。

豊かな実

じゃあ、私たちは一体どんな実を結べるのでしょうか。まさか、私の頭の上にぶどうの房がついたり、ほったたかりんごの実がでたり、鼻の先にバナナがぶらさがったりするわけではありません。その実というのは、私たちの心に結ばれて、それが熟して外にあらわれてくるのです。聖書の他のところ、ガラテヤ5・22、23というところに、

ワーク A

話し方のヒント

● ぶどうの木にはおいしいぶどうがたくさんできず。木から栄養をたっぷりもらってぶどうの実が甘くおいしくなります。もし途中で木から切り離されたらぶどうの実は育ちません。私たちも神様から切り離されたらダメになってしまいます。神様にしっかりとつながるためには、みことばをおぼえて行いましょう。いつもお祈りをして神様に助けていただきましょう。イエスさまのことがもっと大好きになり、うれしい気持ちがあふれます。ワークについて

● ぶどうに彩色して、木につけてください。

ワーク B

● 質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。
● 質問2 枝が木につながっていないければ、実を結ぶことは決まできません。その枝は捨てられて、燃やされてしまいます。
● 質問3 イエス様とつながっているとは、イエス様に対して信頼し、イエス様と一つになっていることです。その具体的なこととして、日常生活の中で罪や弱さを認め、イエス様の十字架の血潮を仰ぎ、イエス様に頼って生活することです。

ワーク C

● 父なる神の願いは、クリスチャンが多くの実を結ぶ生涯を歩む事です。それによって父なる神は栄光をお受けになるからです。

● 豊かな実とは、まず内側に結ぶ「御霊の実」(ガラテヤ5・22～23) 品性の実です。また、一テサロニケ5・16～18の「喜び・祈り・感謝」でもあり、イエス様が言われた「私の喜び」(ヨハネ17・13)、「私の平安」(ヨハネ14・27)でもあります。その後には救霊の実が続きます。

● そのため必要なのは、枝であるクリスチャンが幹であるイエス様にしっかりと結び付き続けることです。枝が力んでも何もならず、ただしっかりと主に結び付き、樹液をいただき続けるのみです。それは「み言葉・祈り・礼拝」によるのです。

ワーク D

● 今日イエス様の自己紹介シリーズの最終回で、「まことのぶどうの木」であるイエス様です。
● ガラテヤ5章22、23節を読んで、ぶどうの実に書き入れます。
● 問1、問2に対しては、特に具体的にどうすることか、どういつことを考え話し合います。例え、問1はイエス様とお話すること、お祈りすること、信じること、従うこと、聖書を読むこと等。問2はやりたいこと、やらないといけないことを幾つかにしばるように、神様から示されること、自分の罪に気付く、み言葉によってきよくされること等。先生や生徒のみなさんでもっと具体的な事柄が思い浮かぶかも知れません。

私たちがイエス様とつながって結ばれる実のことが記されています。イエス様の命の樹液であるみ言葉によって結ぶ実とは愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制という9つの実が記されています。今日の聖書、ヨハネ15・1～11ではこのうちのはじめの2つの実、愛と喜びが取り上げられていますね。イエス様が父なる神様の愛のうちにいられたように、イエス様の愛のうちにとどまる恵みが与えられ、イエス様の喜びが心に宿ると言っています。しかも、その喜びが満ちあふれますと言っています。

ぶどうの実の味わい

一粒のぶどうが「あ、きれいな人が僕を食べてくれようとしている。よいし、うんと甘いジュースにしてあげよう」とか、「ア、いっつも怒りっぽいおじさんが食べるぞ。エイ、苦いジュースに切り替えだ」なんてことはありませんね。どんな人が食べても、よく熟れたおいしいぶどうの実は、とっても甘いよい香りと味を、食べる人に与えるのです。もう一粒のぶどうが「あれっ、あの大きな長靴で踏みつけられるよう……酸っぱいジュースを出してやるぞ」と、いうこともないのです。一粒のよくよく熟したつやつやしたぶどうは、靴で踏みつけられたとしても、すごくおいしくて甘いジュースを出します。イエス様にしっかりとつながっている子ども大人も同じです。いつでも、その心には神様の愛とイエス様の喜びがあふれているですね。みんな、つながってる?

中高校へのヒント

● 考えてみよう

- 1 主イエスに「つながっている枝で実を結ばないもの」と「実を結ぶもの」とがあるのはどうしてですか。
 - 2 両者に対して、神は何をなさいますか。また、両者の結末はどのようなものですか。
 - 3 主イエスにつながり続ける者には、どのようなことが約束されていますか。
 - 4 聖書中、結ぶべき良い実としてどのようなものがありますか(マタイ3・8、ヨハネ15・16、ガラテヤ5・22～23他)。
- 自分にあてはめてみよう
- 1 あなたは今、主イエスにつながっているでしょうか。
 - 2 あなたはこれまでどのような実を結んできましたか。
 - 3 豊かな実を結ぶために、あなたは何をなさべきでしょうか。
- 話し合ってみよう
- 1 主イエスにつながり続けるとは、具体的にどうすることでしょうか。
 - 2 神による「手入れ」とは、具体的にどのようなことでしょうか。
 - 3 神によって手入れされた体験や、実を結んだ体験があれば、その前後を振り返りながら恵みを分かち合います。

聖書 ヨハネ12・12～19

テーマ 救い主の入城

序論

今週から3週間は、主イエスの受難と復活について学ぶ。教会暦で「しゅろの日曜日」と呼ばれる日は来週なのだが、カリキュラムの都合上、1週間繰り上げて、この日の出来事を扱うことにしよう。4つの福音書はみな、主がエルサレムに入城されたことを記録している。しかし、それが安息日の翌日であったことと、群衆がしゅろの枝をもって主を迎えたことは、ヨハネしか記していない。そして、彼はこの重要な出来事について、3つの違った対応の仕方があったことを記すのだ。

一、群衆の対応

△その翌日△とは、香油注ぎがあった日の翌日である。香油注ぎは、△過越の祭（木曜夜から始まる）の六日まえ△（12・1）との記述から、安息日の出来事だとわかる。過越の祭のためにエルサレムに来ていた大勢の群衆は、主がラザロをよみがえらせたということを知っていた（12・9、18）。当然、主の気持はうなぎのぼりである。彼らは、その日主が、△エルサレムにこられると聞いて、しゅろの枝を手にとり、迎えに出て行った△。黙示録7・9にも大勢の群衆がしゅろの枝を手に持って、御座の前に立っている姿が描かれている。この時、群衆が叫んだ言葉に注意したい。それは、詩篇118・25、26の引用であり、メシヤに対する賛美の声である（△ホサナ△については、研究

資料参照）。その上、彼らは△イスラエルの王に△という言葉さえつけ加えている。2月15日にも学んだように、主はご自分が王に祭りあげられることを拒んでおられた。それにもかかわらず、ここではあえて彼らの行動を許容しておられるのはなぜか。きっと主は、このことが自分を十字架に追いやれることをご存知だったからであろう。

群衆は、主を政治的な解放者として熱狂的に迎えていた。しかし、その数日後、彼らは「十字架につける」と、叫ぶようになるのだ。メシヤの本当の使命を知らなかったからにほかならない。

二、弟子たちの対応

弟子たちとても、群衆と大差はなかった。主がわざわざ△るばの子を見つけて、その上に乗られた△とき、彼らは不審に思ったに違いない。王であるなら、馬に乗って威風堂々と入城するのが当然だからである。今風に言えば、ロールスロイスの最高級車を用いるべきなのに、古い軽トラックに乗って入城するようなものだ。これは、ゼカリヤ9・9の預言の成就だったのに、△弟子たちは初めにはこのことを悟らなかった△。だから、彼らも数日後には主を捨ててしまうことになる。

ゼカリヤの預言は、さらに続く。△わたしはエフラムから戦車を断ち、エルサレムから軍馬を断つ。また、いくさ弓も断たれる△と。主イエスは、あくまでも平和の君である。彼は、重荷を負って黙々と歩くるばのように歩まれた。△まことに彼はわかれわれの病を負い、われわれの悲しみをなされた△お方なのである（イザヤ53・4）。

三、パリサイ人たちの対応

11章45節以降を見てみよう。パリサイ人たちも、主がラザロをよみがえらせたことを知っていた。そして、△もしこのままにしておけば、みんなが彼を信じるようになるだろう。そのうえ、（彼が王となつて、民衆を扇動して暴動でもおこそうものなら）ローマ人がやってきて、わたしたちの土地も人民も奪ってしまうであろう△（11・48）と危機感を抱き、主を殺そうと画策し始めたのである。しかし、群衆が主のエルサレム入城を大歓迎する姿を見て、△何をしてもむだだった。世をあげて彼のとを追って行ったではないか△と、嘆くほかなかった。だが、ユダの裏切りをきっかけとして事態は急展開し、彼らの画策は実現する。

彼らが主を殺そうとしたのは、大祭司カヤパの言ったとおり、△ひとりの人が人民に代って死んで、全国民が滅びないようにする△ためだった（11・50）。カヤパは意図していなかったけれど、実は、これこそ神のご計画だったのである。パリサイ人たちは主の使命を知らなかった。

結論

主が、エルサレムに入城されたとき、群衆・弟子たち・パリサイ人たち、みな違った対応をしたが、だれも、その意義を正しく理解してはいなかった。それにもかかわらず、神の救いの計画は着々と進んでいくのである。それは、主がユダヤ人のみならず、全人類の罪を贖うために、身代わりの死をとげられることによって実現する。神の御子の犠牲がなければ、人類の救いはないのだ。

研究資料

（長田）

平和の王の入城

十字架につけられる週の初め、キリストはるばの子に乗ってエルサレムに入城された。王としての入城（13節）であれば、軍馬に乗っての入城が期待されるところであるのに、るばの子による入城であった。これは、ゼカリヤ9・9に預言されていたことであって、キリストがどのような王であるかを明らかにすることであった。

キリストは、確かに全地の王たるべきお方であるが、この世の王とは異なるお方であり（ヨハネ18・36、37）、政治力や軍事力による王ではなく（マタイ26・52）、「平和の君」である（イザヤ9・6）。すなわち、全人類の罪の身代わりに十字架にかかり、贖いを成し遂げ、そのことによって全地の王とされようとしておられた。このお方の前にひれ伏す者は、力によってではなく愛によって征服された者であり、自ら喜びをもってこのお方に献身を誓うのである。

エルサレム入城前、都が見えるところまで来られたとき、「神のおとすれの時」を知らないエルサレムの人々のために、主は涙を流された（ルカ19・41～44）。今も、主は平和の王として、かたくなに主を心に迎えようとしないうちのために涙を流しつつ、静かに人々の心の扉をたたき続けるのである（黙示録3・20）。

テキスト

12・12 その翌日 12・1より、過越の祭りの5日前。すなわち、キリストが過越の祭りの日に十字架にかかれたとすれば、日曜日に当たる。

13 しゅろの枝 ここに記されているしゅろは、なつめやしのこと（いのちのことば社『新聖書辞典』『しゅろ』の項）。その葉は元来仮庵の祭りで用いられたのが、その後様々な祝いに用いられるようになった。エルサレム入城のキリストを迎えた人々は、自然な気持ちでこの枝を振ったのであろう。全地の民がしゅろの枝を手に持ち、神と御子とをほめたたえる、終末的情景が黙示録に描かれている（黙示録7・9）。

迎えに出て行った 祭りに来ていた群衆が、キリストを迎えに出た理由は、17、18節に記されているように、ラザロの復活の奇跡を伝え聞いていたため。

ホサナ 元来、「今、救ってください」との意で、賛美に伴う感嘆詞のように用いられるようになった言葉。彼らの叫びは、詩篇118・25、26から来ており、この詩篇は、過越の祭りの巡礼がエルサレム神殿に向かう時に歌われていたもの。

イスラエルの王に 詩篇118篇には見られないが、キリストがユダヤ人の王、民族的解放者となることを期待しての言葉であろう。

14 るばの子をみつめて 詳細に言えば、弟子たちに見つけて来させたのであるが（マタイ21・1～7）、当福音書では省略されている。

15 シオンの娘よ 以下、ゼカリヤ9・9の引用。

シオンとは、エルサレムを意味する言葉で、「シオンの娘」はエルサレムの住民を意味する。

16 弟子たちは初めにはこのことを悟らなかった 預言の言葉に思い当たらなかったというだけでなく、その言葉が示すようには、るばの子による入城の意義を深く悟ることができなかった。

イエスが栄光を受けられた時 十字架の死・復活・昇天により栄光を受けられた時（12・23等）。

17 イエスがラザロを…よみがえらせたとき、イエスと一緒にいた群衆が、そのあかしをした 群衆のキリスト理解は浅はかなものではあり、そのあかしも興味本位の面が多分にあったであろうが、単純素朴な分、祭りの集まった人々（12節）にも速やかに伝えられていった。

19 何をしてもむだであった ラザロの復活直後、パリサイ人たちは対策を議論し（11・47）、キリスト捕縛のための指令も出していたが（11・57）、これまでの彼らの努力が無益に思えたことを告白している。この時点での、彼らの敗北感が表れている。

世をあげて彼のとを追って行ったではないか この後、ユダの裏切り、捕縛、裁判から十字架刑執行へと続き、彼らは思いがけない逆転勝利を得たように思ったであろうが、まさに敗北とも見える十字架を通して勝利を得ることこそ、神から与えられたキリストの方法であった（1コリント1・18）。彼らは、キリスト昇天後、再び同じ嘆きを語るようになる（使徒5・28）。

聖書 ヨハネ12・12・19
タイトル ホサナノ
中心聖句 ホサナ、主の御名によってきたる者に祝福あれ、イスラエルの王に。
ヨハネ12・18
目標 エルサレムに入城された主を、私の心に救い主として迎える。

導入

イエス様の自己紹介シリーズは終わりました。イエス様がどんなお方かわかりましたね。そのクワイマックスのように、これから3回、決定的なイエス様像を学んでいきましょう。

6年生のお友だち、卒業おめでとうございます。先生方や在校生の方々、保護者の方々の拍手の中に見送られて感謝でした。次は、いよいよ中学生になって拍手で迎えられますね。教会学校でも、ぜひユニア・クラスに大拍手で迎えられてください。今日のイエス様はエルサレムに入城された折、大勢の群衆により大拍手で迎えられました。なぜって、死んで4日もたったいたラザロをよみがえらせたニュースを聞いたら、誰だって興奮します。だからこの時、イエス様の人気はグリーンとうなぎのぼりでした。イエス様のことをよく思っていないかったパリサイ人たちもさすがに、「何をしてもむだだった。世をあげて彼のあとを追って行ったではないか」と、深いため息まじりに言う有様だったのです。イエス様はマリヤから香油を注

がれた翌日、エルサレムに入城されました。

救主の入城

「ホサナノ」「主よ、どうぞわれらをお救いください」(詩篇118・25)と、その時エルサレムの祭に来ていた大勢の群衆は、大きな声でそう叫びました。勝利者をたたえるしゅろの枝を手にとつて、大歓迎しました。暦の上では来週がこのエルサレム入城の記念の日で、バーム・サンデー(しゅろの主日)なのです。人々は、イエス様が自分たちをローマの圧制から力で、ラザロを死からさえもよみがえらせた力でもって、救ってくださる救い主に違いないと信じ、そのようにたたえたのでした。しかし、エルサレムに入られたということは、ヨハネ12・24にあるように、イエス様が一粒の麦として十字架で死ぬためであつたのです。力で人々を救うのではなく、十字架の死によって、人類を罪の力、死の力から救うために入つてこられたのでした。こんなにまで、「ホサナ、ホサナノ」と歓迎した群衆の叫びは、その週の金曜日には「十字架につけよ、十字架につけよ」に変わっていきます。けれども、これが神様のご計画で、イエス様は十字架で死んではじめて、すべての人を罪と永遠の死から救つことができるのです。何も悟っていない群衆、まだ弟子たちでさえもそうでした。それにもかかわらず、神様の尊い救いのご計画がちゃんに進められていきました。

王の入城

「主の御名によってきたる者に祝福あれ、イスラエルの王に」(ここでも、群衆や弟子たちの考え

と、神様のご計画とはかなりズレがありました。彼らは文字通り、イエス様がローマの国をやつつけて、もっと強い国を打ち建て、そこに王として君臨するという期待があつたのです。しかし、何とイエス様は立派な王の乗る軍馬でなく、小さなろばに乗って入られたのを見て、きつと彼らはエツ?と頭をかしげていたにちがひありません。これはゼカリヤという預言者がちゃんと預言していたことです(ゼカリヤ9・9)。ろばの子、平和のしるしであり、柔和なろばの子の背に乗っての入城でした。イエス様の目に見えない愛の王国は、平和と柔和と謙遜な人々の住まう王国です。このイエス様の姿は語っていてくださるのです。武力と権力で治められていたローマの国はやがて、分裂し、弱く、小さくなつていきます。けれども、イエス様を王とする平和と柔和と謙遜に満ちた愛の王国は、ますます力強く広がり続けていくのです。この時には、弟子たちも、もちろん群衆にもとても悟ることはできませんでした。

まとめ

さあ、私の心の王座はどうでしょうね。私ががんばっている、いつでも何でも、私の思うままにやっているかしら?それって、とてもいやで、わがままな心だということがわかってきます。だから今日、私も「ホサナノ」と叫んで、「イエス様、どうぞ私をお救いください」と祈りたいですね。そして、永遠に榮え続けていくイエス様の愛の王国の、平和と柔和と謙遜な王、イエス様、どうぞ私の心の中にお入りくださいと祈りましょう。

ワーク A

●3月28日〜4月11日の聖句―ルカ24・6

●話し方のヒント

たくさんすばらしいことをされたイエス様のことを人々は喜んで、自分たちの王様になつてほしいと思ひました。でもイエス様は王様になるためではなく、十字架にかかるために来られたのでした。ちいさなろばの子に乗って来られたイエス様。罪を赦すため、身代わりに十字架にかかってくださったイエス様を、私たちの心の王様としてお迎えしましょう。

●ワークについて

ろばの首ふり人形をつくりましょう。

ワーク B

●質問1 聖書を開いて読み、今日のみ言葉を完成させて、覚えましょう。

●質問2 イエス様が、馬でなく、ろばの子に乗ってエルサレムに入城されたことは、イエス様がどのような王であるかを示すしるしでした。そこに、平和、柔和、謙遜があらわれています。

●質問3 群衆は、イエス様を歓迎しながら、後には「十字架につけよ」と態度を変えてしまいました。彼らを批判するのではなく、これはまた私たちの罪の姿であり、そのためにイエス様が十字架にかかってくださったことを覚えて、イエス様を救い主として感謝してお迎えするようにしましょう。

ワーク C

●「平和の君」が入城されたのですが、その真意を悟っている者は一人もいませんでした。側近の弟子たちさえも。人々は、イエス様を政治的な救い主、王、指導者として期待し、心の中で勝手に祭り上げていたのです。彼らが叫んだ言葉も旧約聖書の預言の成就ですが、その真意を理解していなければなりません。世的な目で見れば、にぎやかで、勢力拡大に向かって有利な展開にさえ見えます。パリサイ人たちも危機感を募らせたほどでした。この状況の中で主はどのような思いだったでしょう。か。軍馬に乗るのが最適な場面、あえてろばに乗っての入城は、人々の期待の叫びや雰囲気と比べて、あまりに対照的な姿です。テロと戦争を今のこの時代に体験するにつけ、平和の君のろばによる入城を、私たちは今も待ち望んでいます。

ワーク D

●カッコ良さを求める人間の心理に対して、イエス様のご入城のお姿はともユニークです。と言つては言い過ぎでしょうか?今日も質問を通して、イエス様に出会いたいと思います。

●人々のイエス様への期待と神様のご計画には大きなズレを感じますが、神様は御旨を著々と進められます。神様は人知では計り知れない御業なさる方です。パリサイ人も群衆も身近にいた弟子たちも、主の御旨を推し量ることは不可能でした。ただ素直な思いで「ろば」に乗って来られたイエス様をそのまま心の王座にお迎えしようではありませんか!

中高校へのヒント

●考えてみよう

1 主イエスがエルサレムに入城された目的は何ですか。また、ろばの子に乗って入城されたのはどうしてですか。

2 群衆の言動から、主イエスをどのようなお方として認識していたことがわかりますか。

3 群衆に大歓迎されたときの主イエスのお気持ちを想像してみましょう。

4 「イエスが栄光を受けられた時」とは、何を指していますか。

●自分にあてはめてみよう

1 あなたにとって主イエスはどのようなお方ですか。

2 あなたは群衆のような心で主イエスに接していませんか。

●話し合ってみよう

1 この出来事の意味をその時悟らなかつた弟子たちが、「イエスが栄光を受けられた時に悟ることができたのはどうしてですか。

2 主イエスを大歓迎した群衆が、「十字架につけよ」と叫ぶようになったのはどうしてですか。

3 様々な思いや企てが交錯する中、主の救いのご計画は着々と進んでいきました。主のご計画、主の御心についてどう思いますか。

4 主のご計画の意味をその時は理解できなかったが、後になって理解できたという体験があれば、分かち合ひましょう。

聖書 詩篇23篇章1〜6節
金言 わたしの生きているかぎりには必ず恵みといつくしみとが伴うでしょう。

目標 この一年も、いつも共におられる神様に、どこまでも聞き従いましょう。

詩篇23篇 6節

新しい年の初め皆さんは、どんな一年になったらいと願っていますか。この年もどんなに悲しいこと、つらいことがあってもいつも神様がいっしょにいて導いてくださいます。いつも、神様の恵みを一つ一つおぼえて感謝していくときに信仰が成長します。

さて皆さんは、ダビデという王様を知っていますか。イエス様がお生まれになるよりもずっと昔、イスラエルの国を治めた立派な王様です。この詩篇は、そのダビデ王がうたった歌です。おそろしく、ダビデ王がいろいろなことを経験していく中で、どんな時でも神様に従った時に知った神様のすばらしさを歌っているのです。

良いところに置いてくださる神様

私たちの周りには、美しい自然、すばらしい家族やお友だち、あたたかな住まい…などがあります。それはちやうど、弱くて迷いやすい羊のような私たちを、羊飼いである神様がいつも備えていてくださる牧草地やゆるやかな流れのほとりのような所です。

良く導いてくださる神様

しかし、どんなに周りの環境が良くなっても、心と魂が迷っているとは本当に満足しているとは言

えません。神様だけが永遠のいのちを与え、どのような時でも神様が喜ばれる生活ができるように、私たちの心も魂も導いてくださるのです。

神様は、罪に迷う私たちのためにイエス様をお送りくださり、イエス様は十字架におかかりになりました。それは、私たちを罪から救い、神様といつも交わることのできるようにするためだったのです。このすばらしい救いの恵みをもつ一度しっかりと受けとめ、信じ続けていきましょう。

よく助けてくださる神様

神様は、つらくて苦しい死の陰の谷を通ることがあっても、私たちのすぐそばにいて、勝利を与え続けてくださいます。それはちやうど、羊飼いが羊を導き、牧草を与え、危険から命がけで守るのに似ています。強盗や敵に追われている旅人が逃げ込んできたなら、その家の主人が旅人をかくまうて保護したように、どんな時でも助けてくださる神様です。そして、豊かな恵みを与えてくださるのです。

すばらしい祝福を与えてくださる神様

神様は、変わらない恵みといつくしみという祝福を与えてくださいます。特別に何の良いところがなくても、弱くて小さな者にあふれるほどに与えてくださるのです。そして、永遠に神様と一緒に生きることができるようです。イエス様がよみがえられたのは、その保証でした。

さあ、神様に向かって、「主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。…わたしの生きているかぎりには必ず恵みといつくしみが伴うでしょう」と言い表しましょう。

(一九九三年12月号参照)

ご案内

左記奥付の発行者の所在地・電話・FAXは
〒655210804 神戸市兵庫区塚本通三の三の19
電話(078)5751551 神戸市兵庫区塚本通三の三の19
電話(078)5751551 に移転しました

FAX(078)5751661

編集後記



『牧羊者』の第4巻をお届けできますことを感謝します。今回も執筆者の交代があり、秋の特伝やクリスマスの諸準備の中に執筆していただいた皆様の多大なご協力を、心から感謝いたします。また、10月20日にCS局員と執筆者が集まって、次年度の『牧羊者』について意見交換や協議を行いました。カリキュラムも変わり新年度を迎えるに当たって、各教会学校が活性化され、若者の中から救われる者が起こされるために色々なことを計画し、実行に移し、励んでいくことを確認しました。『牧羊者』がいよいよ子どもたちの育成や救霊に、CS教師の先生方の育成にも大いに用いられる様に、引き続き皆様のお祈りをお願いいたします。

終わりに今号の執筆者を紹介いたします。

聖書講解 鎌野 善三
研究資料 長田 栄一 石田 高保
メッセージ例 小野 淳子
ワーク 鎌野喜恵子 小平 徳行
中高科 長尾 秀紀 上森 恭子
フラッシュカード 竹崎 光則
み言葉カード 陰山 恭子
また、編集を手伝ってくださった鎌野善三師、光田隆代師、森明子師、本部事務所の仁科真人師、鎌野幸師と岡本羊一兄、印刷会社あくとの本田慈郎兄に、心から感謝します。

フラッシュカード

教会に1セットお送りします。

ワークブック

ワークブックA……未就学児用
ワークブックB……小学1〜2年用
ワークブックC……小学3〜4年用
ワークブックD……小学5〜6年と中高生用

どれも3ヵ月分600円
生徒の数だけコピーして下さい。

ぜひご利用下さい

聖書教育教案誌 牧羊者

二〇〇三年度 IV巻

二〇〇三年十二月十五日発行

発行者 岩田扶美二

滋賀県近江八幡市多賀町五〇六の一

日本イエス・キリスト教団出版局

電話(074)3315511

FAX(074)3112151

編集者 日本イエス・キリスト教団

教会学校局

印刷所 有限会社 あくと

電話(029)7815935

*日本聖書協会『口語訳聖書』使用許諾済み